

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【タイトル】

真剣で私に恋しなさい!!S 四神の王

## 【作者名】

慶次

## 【あらすじ】

武士道プラン。それは過去の英雄たち(クローン)を現代に甦らせ、現代の人材不足

を補い、又彼女たちと切磋琢磨させ一般の学生たちの能力向上も目的とされている

その中で一人新たにプランに参加するものがいた。

名前は「黄真 龍一(おうま りゅういち)」

彼の正体を知るのはわずかに二人。武士道プランを実行している九鬼財閥の長「九鬼 帝」

そしてその妻「九鬼 局」である。

— 一体彼の正体とは？ 彼はこれから先なにをしていくのか。それで  
は、彼の物語を見ていくとしよう。

## プロローグ

S i d e 九鬼地下研究所

ここはとある研究所の一室である。中には十数名の人がおり、彼らはその道のプロ

である。生物学者、物理学者、科学者、天文学者、医療学者など…、彼らは今ある

計画のために動いている。

『武士道プラン』

これは、過去の英雄たちの細胞を研究し、その英雄のクローンを生み出し、現代の

人材不足を補い、また彼女らと共に切磋琢磨させることで一般の学生たちの能力や

才能の向上を目的としている。

??? 「経過はどうなんだい？」

と、ふいに研究室の入り口から声がかかった。

主任「はい、マーブル様。皆順調に育っています。バイタルも安定していますし

このままいけばあと数日で外に出すことができます。申し訳  
ありません、

わざわざご足労いただきで。

と、入り口からかけられた声に対し応えたのはこの『武士道プラン』  
に必要な過去

の英雄たちを生み出す研究をしている責任者だ。研究者らしく白  
のワイシャツに紺

色のネクタイ、黒いスラックス。その上から白衣を着ている。

マーブル「そうかい。それはなによりさね。」

マーブルと呼ばれた女性は満足そうに主任の方へ歩み寄りながら頷く。彼女はこの

『武士道プラン』を提唱した人物で、彼女が所属している世界的に有名な大企業

九鬼財閥の従者部隊で序列二位の人物でもある。黒い服を身にまといどこか喪服の

ようなイメージである。そして二人は室内を回り、一つのリアクターの前で足を

止める。

マーブル「この子ともうひとりが義経と弁慶、与一より早く生まれそうだね。この

子は誰のクローンなんだい？」

主任「申し訳ありません。この子に関しては全て帝様により情報の公開が禁止され

ています。そしてなにより私たちも知らされてはいないので、この子の素

性を知るのは帝様と局様の御二人だけと聞いております。」

マーブルの質問に主任はそう答えた。その答えにマーブルは一瞬顔を歪ませるとす

ぐに元の表情に戻った。

マーブル「まあ、帝様が公開しないってんならしょうがないねえ。時期が来たら教

えてくれるだろうし。この子にはそれだけのものがあるってことだし、

今はこの子が無事に生まれるのを待とうじゃないか。」

そう言い目の前のリアクターに目を戻した。主任は「そうですね。」  
と言いマーブ

ルに倣いリアクターに目を移した。目の前のリアクターの中には透き通った緑色の

培養液の中に約50cmほどの赤ん坊が、目を閉じて気持ちよさそうに眠っている。

しばらく眺めた後二人は各更新データのチェックをしながらリアクターの前を歩い

ていたときその音は響いた。

『ドックンー、ドックンー』

その音は部屋中に響いた。

マーブル「なんだい、この音は？」

マーブルは周りを見ながら内心そう呟く。現在も『ドックンー、ドックンー！』と言っ

音は部屋中に響いている。

学者「主任!!音は87番のリアクターからです!!」

主任「わかった。すぐに調べる。それから従者部隊に連絡を。何が起こるかわから

んからな。…申し訳ありませんマーブル様、念のため安全な上の管理室まで

お下がりください。先ほども言いましたが、何が起こるかわかりません故」

報告に来た学者に指示を出した後、主任はマーブルにそう言った。

マーブル「仕方ないね。上で見てるから、しっかりおしよ。ヒューム、クラウディ

オここは任せたよ。」

そう言ってマーブルは上の部屋に行ってしまう。代わりに現れたのは二人の男性だ

った。一人は殺伐とした雰囲気をもたせており、もう一人は穏やかな雰囲気をも

とわせている印象だ。

ヒューム「ふん、マーブルめ人使いの荒い。」

そう毒つく男は殺伐とした雰囲気をもとわせる方だ。彼の名をヒューム・ヘルシン

グ。九鬼家従者部隊の序列零位で九鬼家に使える有能な執事である。しかし、戦闘

力に特化しているためやや好戦的でプライドも高い。足技が主体。

クラウディオ「まあ、いいではありませんかヒューム。」

そう言うって嗜めるのは穏やかな雰囲気をもった男、クラウディオ・ネエロであ

る。彼も九鬼家に使えており、序列は第三位である。非常に優秀な執事で、英才教

育を受け執事学校を主席で卒業。その優秀さから『万能執事』、『ミスターパーフェ

クト』ともよばれる。戦闘力もとても高く鋼の糸で相手を拘束した

り、短刀で戦っ

たりする。

ヒューム「ふん、まあいい。しかしなんだこの赤子は。部屋に響く心臓のような音

に呼応するかのように、赤子の纏う気がとてつもなく増大している。

ふ、これは将来が楽しみかもしれんな。」

そう言い、ヒュームは口の端をつりあげる。

クラウディオ「ヒューム氣がもれていますよ。抑えてください。…しかし、私も氣

になります。生まれて間もない状態でこの氣の内包量、確かに将来

が楽しみですね。」

ヒュームを嗜めるとクラウディオはリアクターに目を向け、笑いな

がらそう言っ

た。周りでは学者たちがデータのチェックやバイタルの確認を行っている。そのと

き、一際大きな心音があったと思ったらリアクターの方から『ブイー…、ブイー…』

という高い警戒音が鳴り響いた。

ヒューム「どうした!? 状況を報告しろ!!」

主任「はい!! データは全て高い数値を出しています! 簡単に言っと現在進行形で運動

をしている状態になります。そしてこれは妊婦の陣痛と酷似しています。こ

れから考えられることは、恐らくですが自分から外に出ようとしていると

思われます。」

主任はヒュームにそう報告した。これには研究者だけでなくヒュームやクラウディ

才、管理室のマーブルでさえ驚愕した。陣痛とは簡単にいうとその種族が母体内で

標準にまで成長し、子供が外に出たいという合図である。これだけならばなにも問

題はない。だがこれは一般の人の場合である。このリアクターは九鬼家の技術を集

め作られたものであり、コールドスリープやこのリアクターの中で肉体を成長させ

たあと外に出すことも可能なのだ。つまり、いつ外に出すかは彼ら九鬼家しだいで

あり、自分から外に出ようとすることは本来ありえないのだ。報告を聞き、思考の

の海に沈んでいると、『ピキッ…、ピキッ…』という音が彼らを思考の海から呼び戻

した。

「????????」  
「!?!?!?!?!」

音のしたほづに目を向けると87と書かれたリアクターにヒビが

入り始めた。

ヒューム「俺とクラウディオ以外は全員この部屋から出る。主任と数名は上の管理

室へ行け。迅速に動け。」

ヒュームの指示のとおり、研究者たちは一部のものを管理室に残し非難した。管

理室ではマーブルと研究者たちが固唾を呑んで見守っている。そんな中ヒュームは

とっしと...

ヒューム「さて、鬼が出るか蛇がでるか。どちらにしても赤子でないことを祈るば

かりだ。」

クラウディオ「ふふ、楽しそうですねヒューム。また氣がもれていきますよ。」

ヒューム「ふん。そういつお前こそ、なにやら嬉しそうだな。」

クラウディオ「当然ですよヒューム。命が生まれることはとても素晴らしいことで

す。それが将来有望そうならなおさらです。」

ヒューム「ふ、確かにな。」

その会話が終わった直後、ヒビが入ったりリアクターについて限界が来た。

『バリイイイイイイイイン  
!!!!!!!!!!!!!!』

という音と共にリアクターのガラスが内側から外側にはじけた。しかしヒューム

ムとクラウディオは他のリアクターやデータの入ったスーパーコンピュータを氣

で包んだり、拳や足で捌いていく。破片が飛んでこなくなったのをかくにんしながら

ら二人はリアクターを見た。ガラスは割れ、透き通った緑色の培養液が回りに流れ

出ていた。しかし驚くべきはそこではない。

ヒューム「ふ、なかなか楽しませてくれるな。」

クラウディオ「ええ、本当に。これからが楽しみです。」

二人の執事は楽しそうに、しかしとても嬉しそうに頷きあった。その赤ん坊はリア

クターの上に寝転がるでもなく、その膨大な氣で宙に浮いていたのだ。二人はリア

クターに近づき、クラウディオが抱きかかえようとした瞬間…

「!?」

二人に強烈な殺氣が叩き込まれた。しかし、それでもクラウディオは抱きかかえよ

うつとする。愛おしそうに満面の笑顔を向けながら。その殺気は一瞬で今は二人を受

け入れたのかクラウドディオに抱きかかえられようとしている。  
ヒュームはそれを警

戒しながら見ていた。今ではクラウドディオに抱かれ体を預けている。どうやら男の

子のようなだ。

ヒューム「クラウド、殺気を中てられた時お前には何が見えた？」

クラウドディオ「私には、この子の後ろに龍が見えましたよ。」

ヒューム「そうか。ふ、やはり帝様が情報を公開しないのもなにやら訳がありそう

だな。」

クラウドディオ「そのようですね。しかしそれは私たちではどうすることもできません

ん。それは帝様が同様から教えていただけでしよう。それはそう

と名前を考えてあげませんとね。いつまでも『この子』では可愛そ

うですからね。」

『マープル』そのことについてなんだが、それは帝様と同様に任せたらいいんじゃない

いのかい？あたたちゃその子が誰のクローンか知らないだし、その

子も生まれにちなんだ名前のほづがいいだろうつね。』

そう言ってマイクで会話に混ぜってきたのは管理室で一部始終を見ていたマープル

だった。マープル自身も知らないため、知っている人物に任せただけがうがいと考える

たのだ。

ヒューム「好きにしろ。俺は周辺の警戒にあたる。」シュンツ!!

ヒュームは一言言ってその場から消えてしまった(正確にはものすごく早く移動した

だけ)。

クラウド「オ、それではマーブル様この子をそちらに預けに参ります。その後のこ

とはお願いします。今日は帝様も局様もこちらに在宅です。先ほ

ど連絡はいたしました。すぐにお会いになるそうです。私はこの

片付けがありますので。」シュンツ!!

言うが早いかクラウドは管理室にいた。

マーブル「ありがとうよ。クラウド。それじゃ片付け頑張っておくれ。」

クラウディオ「簡単な事でございます。」シユン!!

お決まりのセリフをはいてクラウディオは片付けに戻っていき、  
マープルはその場

を研究者に任せ管理室を後にした。

S i d e O u t

S i d e 九鬼 帝

ひさびさに家に帰って局と揚羽、家族水入らずで過ごしてたらクラ  
ウから87番リア

クターから子供が自力で出たと報告があった。いや、聞いたときね  
マジで思った

よ。さすが だなんて。んで、マープルが子供つれてくるから  
名前つけてくれ

だって。こりゃ局と一緒に考えなきゃな。

局「帝様先ほどの連絡はクラウからですか？」

帝「そ。ほら例のプランの87番リアクターの子の話。」

局「87番と言うと例のあの？」

帝「そ。なんかリアクターぶっ壊して自力で出てきたみたい。」

局「自力で!?!…いやしかしそれくらい出きるのかもしれないね。」

そう言うと局は一人考えだしてしまった。今九鬼 帝が話している女性「九鬼 局」は

帝の妻である。一代で世界有数の大企業になった九鬼財閥であるが、その躍進の裏

には彼女がいたからだと言っても過言ではない。現在は長女揚羽を儲け幸せではあ

るが、帝が忙しく世界中を飛び回っているため子育てに帝の穴埋めとこちらも忙し

くも充実した毎日を送っている。

揚羽「ははうええ？どうかしましたか？」

局「ん？いやなんでもないぞ揚羽。」

舌足らずな声で呼ぶのは娘の揚羽である。まだまだ話したばかりであるが

『ははうええ』と呼ばれるのは嬉しいものである。

帝「でよ、マーブルがその子つれてこっちに向かってんだけど、正体知ってんの俺

達だけだし名前決めてほしいんだってさ。そこで局なんかいい名前ない？」

局「？我が決めてよろしいんですか？」

帝「いいよ。」

局「でしたら…。そうですね、あの子は  
でしたからそれから  
とって

『黄眞 龍一（おうま りゅういち）とこののはどいづつどいづつ』

帝「ふむ、なるほど…。いいな！よし、それにしよう…」

局「本当によろしいんですか？」

帝「いいんだよ。このうのはフィーリングだ。もう決めちゃった  
し、それ以外だ

ともう違和感あるぐらいまできちやってるから決定だな。」

局「ふふ、ありがとうございます帝様。」

するとそのく、く、『コンコン』とドアをノックする音が響く。

局「なにようじゃ？」

執事「マーブル様がお出でです。」

局「連絡は来ておる。通せ。」

そして『どうぞ』という声のあとドアが開き、赤ん坊を抱いたマーブルが入室して

くる。

マーブル「すまないねえ帝様、局様。家族の団欒の時間を邪魔しちゃまって。」

帝「気にすんなよ。仕方ないさ。それに邪魔だなんて誰も思っ  
てないさ。なぐ揚

羽。」

揚羽「うん！おばあちゃんまたおはなしきかせて！」

マーブル「そうかい。ありがとうよ帝様、揚羽様。」

そう言っ  
てマーブルは礼を述べる。

局「マーブルよ。その子が件の？」

マーブル「ああそうさ。クラウドから聞いてるだろうけど、この子の  
名前を決めてほ

しくてね。というかこの子、一体誰のクローンなんだい？  
教えてはもら

えないのかい？」

と尋ねるが

帝「ん、その子自身には早いうちに教えるつもりでいる。自分の力に振り回され

ることもないだろうし。そうだなあ、確か項羽のは年が二十五歳になったと

き教えるんだっけ？じゃあその時にそいつのことも教えてやるよ。」

と言われ少し気落ちしているマーブル

マーブル「そうかい。ならその時を待つとするかね。それでこの子の名前は決まっ

てんのかい？」

帝「ああ。それならもう決まってる。局が考えたんだがいい名前だ

ぜ。それはな

『黄真 龍一』ってんだ。いい名前だろ。」

マーブル『黄真 龍一』…。まあ、いいんじゃないかい。というかそれが前の名前

なのかい？」

帝『いや正直なところわからねえ。』いた』っていう事実はあるんだが名前が何な

のか、性別とか詳しいことはほとんどわかってねえんだ。わかってんのがその

正体くらいなものさ。」

マーブル「ふう、まあそれならしょうがないね。…帝様、同様のこのk、いや龍一を

抱いてやってはどうかねえ。」

帝「そうだな。同抱いてやれ。」

局「我が先でよろしいのですか？」

帝「いいから。ほらマーブル。」

俺がそういうとマーブルが局に龍一を抱かせる。龍一を抱いた局は愛おしそうに、

そして優しく微笑んでいる。いや、局その笑顔は反則でしょ。揚羽のときも同じよ

うな顔してましたよ。もうね慈母神だよねホント。拝み倒してよかったわマジで。

揚羽もキラキラした目で見てるし、まったく誰に似たんだか。

局「帝様も、御抱きになりませんか？」

帝「ん？なんだもういいのか？」

局「いえ、なんだかこちらを見て微笑んでらしたので…。」

帝「そっか。そうだな。じゃあ抱かせてもらおうかな。」

そう言っただけで局のもとに歩いていく。そして局から龍一を渡される。そのとき暖かい

風が通り過ぎたような気がした。春に新芽が芽吹くがごとく、広大な草原に寝転が

り大地の暖かさを感じるかのような。そんな風に思っていると三人が注目してい

た。どうやら少し呆けてしまったようだ。

マープル「それじゃあ、あたしや行くとしますかね。帝様ちょっと龍一を見ていて

もらえませんかね。準備ができたなら迎えに来るんで。」

帝「ん。わかった。頼んだぞ。」

マーブルは『はいよ』と言って部屋を出て行った。俺はマーブルを見送り、スヤス

ヤと眠っている龍一に視線を移した。

帝「よく眠っているな。」

局「寝る子は育つと申しますし、元気に育ってほしいものです。」

帝「そつだな。なにやらヒュームもクラウディオも龍一には期待しているみたいだ

しな。」

そう言って会話を切った後、俺たちは家族の時間を過ごすのだった。

S i d e o u t

## 主人公設定

主人公設定（原作開始時）

名前 黄真 龍一

年齢 18才

誕生日 4月9日

身長 183cm

体重 74kg

一人称 俺

髪型 セミロング

髪の色 ブラウン

目の色 赤

容姿 FAINAL FANTASY のスコール・  
レオンハートと瓜二つ（傷はないよ）

血液型 AB型

スリーサイズ unknown

体格

普通だが筋肉質

服装

カジュアル系

趣味

鍛錬 食べ歩き ギター バスケットボール

習得資格

普通自動車 大型二輪 危険物全種 e t c

特技

完全記憶能力

備考

『武士道プラン』により生み出されたある人物の

クローン。

に莫大な利益

その生まれ持った才能ゆえ、幼少の頃より、九鬼家

蹴りを回避する

をあげる。戦闘面でも僅から才にして、ヒュームの

ト感覚で手伝

ほど。原作開始時では、九鬼家の仕事を週二日バイ

いるが今の生

っているため、お金には不自由していない。

戦闘力はヒュームや川神鉄心よりも、遥かに高みに

喫している。

活に満足しているため、腐ることなく学園生活を満

将来は、世界中を旅した後九鬼財閥に就職するつも





眞 龍一」が12才だ。俺と与一、他にも三人ほどいるが俺達はただの人じゃない。世界有数の大企業九鬼財閥の推進プラン『武士道プラン』により生み出された過去の英雄のクローンだ。現在の人材不足を補い、また若い世代の能力向上が目的らしい。

『那須 与一』

彼は平安時代末期の武将「那須 与一(なすの よいち)」のクローンである。1185年の屋島の戦いで、平氏方に掲げられた扇の的を射落とすなどの功績を挙げている武将で、日本でも有名である。と考えているうちに、部屋の前に着いていた。「コンコンッ」とノックをしたが反応がない。俺は内心、いつも通りと思い「ハア」とため息をついた。

龍一」おゝい与一。早く起きろ。ヒュームの『メテオストライク』が飛んでくるぞ。

いいのか？…いいんだな？もう知らないよ俺。今日が与一の命日か。

しかし反応がない。中からも何かしている気配はない。あゝつまり寝坊ですね。いつものことだけど。そんじゃあ、勢いつけて『バン!!!!!!!』スウゥ、サンハイ

龍一「起きるコラアアアアアアアアア  
!!!!!!」

与一「!？」

部屋に響く俺の声と共に与一は「ビクウツ!？」としながら、ベッドから起き上がった。

そして、おそろおそろ俺の方へ顔を向ける。

与一「お、おはよう兄貴。…もしかしてまた？」

龍一「おはよう与一。兄貴分に毎朝起こされていいご身分ですね？」

(ニッコ)

俺は少し怒った風を装いながら、ニッコリと笑いかける。与一いわく「死の微笑み(デス・スマイル)」らしい。ネーミングセンスが中二病だぞ。大丈夫かこいつ？

龍一「ほれ、さっさと準備しろ。弁慶に怒られたくないだろ。お、そ

うだ。あと5分でゲ

ラウンドにこなかったら、俺と弁慶でキン バスターな。あれ、やってみたかった

んだよな〜」

与一「ゲツ!?マジかよ!?勘弁してくれよ兄貴〜」

龍一「ならとっとと準備しろ。ほら、あと4分30秒しかないぞ。ってことで先行くぜ

〜、あとでな〜」

そう言っただけ俺は与一の部屋を後にした。後ろの方ではバタバタと慌しく音がしている。少し駆け足でグラウンドへと向かった。

グラウンドに着くとそこには6人の人物がいた。一人は執事服を身に纏い、ジャージだったり、道着だったり動きやすそうな服をきている。

??? 「む、来たか龍一」

龍一「おはよう。ヒュームのおっさん」

ヒューム「ふ、柔軟でもしておけ」

龍一「はいよ」

最初に俺に気づいたのは執事服を着た男、名を「ヒューム・ヘルシング」

九鬼家従者部隊序列零位であり部隊のトップで、俺の武術の衣装でもある。武術は5才からやっており、武術を教えると言われ、オッサンに紹介され挨拶を交わした後に左側から横薙ぎの蹴りが飛んできたので、俺はそれに左手を合わせ勢いを殺さず、それを軸に飛び上がり一瞬足の上で左手だけで倒立したあと手を離し着地した。つまり大人の蹴りをただの5才児が避けてしまったのだ。これには一人を除き驚愕した。ヒュームはにやりと笑ったあと俺に武術の指導をした。それはもうハンパじゃない熱の入れようだった。それは…うん。思い出すのはやめよう。トリップから戻ると、俺は5人の近くにいる。そのうちの二人がこっちに気づいた。

??・??  
??  
「フハハハハハハ!! 龍一よ、おはよう!!」

龍一「おはよう。揚羽、英雄」

揚羽「うむ、龍一よ。今日も元気そうだなによりだ」

龍一「おかげさまで。いいもん食ってるからな」

俺に挨拶してきたのは九鬼家の跡取り「九鬼 揚羽」と「九鬼 英雄」の姉弟だ。

本来なら「様」をつけ敬語で話さなければならぬのだが、公的な場所や九鬼の人間、または本人が許可した場合において、こうしてフランクに話しかけている。

揚羽については二つ年上ということもあり「さん」づけで呼んだが「しつくり」ないから呼び捨てでいい」と言われ、いろいろ言いあつたが結局いうとおりにした。

「九鬼 揚羽」は九鬼家の長女で現在中学二年の14才だ。額にはバツ印の傷がある。何か九鬼家のしきたりらしい。髪型はセミロングで、綺麗な銀色をしていてカチューシャで前髪を上げている。顔も小さくパーツも整っているので美人といわれる部類だろう。道着を着ているが身に纏う覇気が野暮ったさを感じさせることなく、凜とした印象を見る人にあたえる。

英雄「うむうむ。九鬼家の料理人の腕は最高クラスだからな。フハハハハ!!」

龍一「わかってんよ。朝っぱらからテンションたけーなオイ」

英雄「それは我が健康である証拠よ。我は王になるもの。健康管理も万全なのだ」

龍一「さすがだな英雄。んじゃ柔軟すつか。英雄、一緒にやろうぜ」

英雄「うむ。我の友の頼みならば是否もなし。手伝おう」

龍一「サンキュー」

柔軟を手伝ってくれるのは「九鬼 英雄」揚羽の弟で俺の一つ下で小学五年の11才。

揚羽と同じく額に傷がある。髪は短めで逆立てていて、銀髪。容姿も整っている。揚羽と同じく道着。姉ほど武術に才はないが一般レベルでは高い。代わりに知略、政治面に強く九鬼家の仕事にたまに口を出している。柔軟を終えると三人の女の子が歩いてくる。

???「おはよう、龍兄」

龍一「ん？おお、おはよう義経」

???「おはよう、龍」

龍一「弁慶もおはよう。いつも通りダラッとしてんな」

弁慶「それが私の持ち味じゃん。あゝ早く川神水が飲みたい」

義経「こら弁慶。飲みすぎるのはよくないぞ。「これか」「ダキッ！」  
うわわ!？」

弁慶「いいじゃん主。やることやってるし、浴びるほど飲むわけ  
じゃないからさ」

義経「それはそうだけど…うゝ、龍兄からも言ってくれ」

龍一「え？別に分量間違えなければいんじゃないかね？」

義経「まさかの期待の援護無し!？」

弁慶「さすがは龍。わかってる」

義経「うゝ、自分の部下も説き伏せられないなんて」

龍一「ハハ！そんなに深刻になるなんて。俺も弁慶もちよっとした冗談だからさ」

それを聞いて義経はパツと笑顔になる。弁慶は主のころころ変わる表情をニコニコしながら見ている。

話しかけてきたのは『源 義経』と『武蔵坊 弁慶』のクローンで名前もそのまま。

## 『源 義経』

性別は女性で、すべてが過去の英雄と一緒にという訳ではない。 11才。

平安時代末期の武将で『源 頼朝』の弟。頼朝が伊豆で挙兵すると、幕下に加わり、「治承・寿永の乱」を皮切りに、一ノ谷、屋島、壇ノ浦の合戦を経て平氏を滅ぼした。最大の功労者であり、まさに甦った英雄としてふさわしいのだ。

長い髪を高い位置で一つにまとめポニーテールにしている。髪の色は黒。クリツとした大きな目が特徴で、かわいらしい印象を持つ。

## 『武蔵坊 弁慶』

義経と同じく性別は女性。 11才。

平安時代末期の僧衆（僧兵）で義経に仕えた家来である。 五条の大橋で義経に出会い最後まで仕えた。 義経と共に頼朝の拳兵に参加し、平氏討伐で功名をたてた。 頼朝に主が朝敵であるとされたが、義経の京入りに同行した。 その後奥州入りし藤原秀衡のもとへ身を寄せるが、秀衡が死ぬと、子の藤原泰衡は頼朝の威を恐れて、父の遺言を破り、義経主従を衣川館に襲った。 多数の敵勢を相手に弁慶は、義経を守って堂の入口に立って薙刀を振るって戦い、雨の様な敵の矢を受けて立ったまま死んだとされ、「弁慶の立往生」と後世に語り継がれており、彼女も英雄と呼ぶにふさわしい血をひいている。

髪は黒く長さは腰までありウェーブがかかっている。 切れ長の目でキツイ感じがするが、飄々とした佇まいがそれを感じさせない。 ちなみに川神水とは川神市で手に入る清涼飲料水で飲むと酔った気分を味わえる。 だがアルコールではないので未成年でも飲める神秘の水だ。

??? 「おはよう、龍君。」

龍一 「おはよう、清楚」

清楚 「あんまり義経ちゃん、いじめたらだめだよ」

龍一 「いや、義経があんまり可愛いからさ。 ついな」

嗜めてきたのは『葉桜 清楚』性別は女。俺と同じ12才。  
彼女については九鬼家でも一部の人間しか知らない。俺は知っ  
ているが：今は秘密だ。

義経「可愛い／＼／＼／」

義経は頬を赤くして俯いてしまった。垂れた頭を撫でていると

弁慶「えゝ私は？」

龍一「もちろん弁慶だって可愛いよ」

弁慶「／＼／＼／」

そう言ってやると弁慶は頬を赤くしながら左腕に抱きついた。な  
に気に弁慶はスキンシップを求めてくるのだ。すると

揚羽・清楚「じゃあ我・私は？」

龍一「揚羽は可愛いし、年上だから綺麗ってのもあるかな。清楚は…チクシヨウ！可愛いじゃね　えか！」

揚羽「むう／＼／＼」

清楚「もう／＼／＼」

揚羽は頬を赤くし顔を逸らしながら俺の頭を撫で、清楚は俺の背中に顔を埋めている。

何でみんな顔を赤くしてるんだろう？…とは疑問に思わない。俺はどこぞの『女性しか乗れないパワードスーツ』に乗れた男や『科学と魔術を打ち消す右手』を持った男のように天然でも鈍感でもないつもりだ。

ぶっちゃけ女のアピールにも問題あるし、気づかなかつたら暴力や電撃ってなに？

いくら可愛くても「こりゃないわ〜」しか言えねえ。

そうして和んでいると、不意に義経が

義経「なあ龍兄、与一はどうしたんだ？起きてなかったのか？」

龍一「あゝ、俺がいつも通り叩き起こしてやったよ」

義経「うっ、いつもすまない龍兄。義経が言っても全然直らないから」

龍一「お前のせいじゃねえよ。気にすんな。起きないあいつが悪い。それにあと一分でここに来な　　かったら罰を与えると言っている」

弁慶「罰？」

龍一「そ、罰。俺と弁慶でキン　バスター。やってみたいから、できれば遅れて来てほしい。むし　　ろ遅れる！」

弁慶「へへ、それは面白そうだ」

義経「二人とも笑顔が怖いぞ。義経がもう一回言ってみるから　　ちよっと待ってくれないか」

弁慶「何度も主に言われてるのに直さない与一が悪いのさ。主も部下を褒めるだけじゃなく、締め　　るところは締めないと」

義経「いや…だけど」

弁慶「主」

義経「うっ…わかった。でもちゃんと加減はするんだぞ。龍兄も」

龍一「まかせな」

俺と弁慶はとてもいい笑顔で義経に返した。そして、それから待つこと5分。ようやく与一が姿を見せた。

龍一「遅えぞ与一」

与一「勘弁してくれよ兄貴。いくらなんでも5分は無茶だって」

龍一「オメーがちゃんと起きりゃあいいんだよ。あ、遅れたから罰ゲームね。朝いったやつ。弁慶　　にも話してあるから」

与一「え？」

弁慶の方に視線をやるとものすごくいい笑顔をしていた。義経に

助けを求めるが「これも与一のためだ」といつて聞いてもらえず、ちよつと青ざめていた。

全員そろつたので鍛錬を開始した。まずはランニング。400mのトラックを20周。俺と揚羽以外は。俺と揚羽は九鬼家の外周を20周。俺は20kgのウエイトを、揚羽は10kgのウエイトをそれぞれ両手足に着けたまま。

ランニングのあとは場所をトレーニングルームに移して筋トレ。さすがは九鬼、あらゆるトレーニング機があるぜ。使うの初めてじゃないけど。

筋トレはクラウディオ（通称クラウ）が作ってくれたメニューをすることになっている。

クラウはその人ができる量を計って組まれているため、非常に効率がいい。

ん？なになに腕立て1000回、腹筋1000回、背筋1000回、スクワット、ベンチプレス、etc

おいおいクラウさん。なんか昨日より増えてるんですけど。あゝ飯ちゃんと食えっかな。

筋トレの後は各々の分野に分かれる、義経は剣術、弁慶は錫杖なので棒術、与一は弓術。俺、揚羽、英雄の三人は拳の武術になる。清楚は筋トレで終わり。今頃シャワーでも浴びてるころだろう。俺も含め、英雄や才能のあるやつばかりで実力の伸びがハンパじゃない。ま、俺も負けてやる気はないんだけど。

今は揚羽と組み手をしている。だいたい15分くらいたっている。拳の応酬をし、お互い間合いを離し距離をとっている。だいたい3〜4mくらいだ。

揚羽「やはり強いな龍一よ。今までおまえからは一本も取っておらんからな。今日こそ一本取らせ　　でもらうぞー！」

龍一「ハッ！そう簡単にいくかよ。男が女に負ける訳にやあいかねーだろ。守られんのは性に合わ　　ねえしな！」

揚羽「なんだ、いざとなったら我のところにすればよい。全力で守ってやるぞ？」

龍一「そりゃあ、ありがたい提案だ。けどま、遠慮しとくわ。好きになった女を守るのが男つても　　んだろ？」

揚羽「それは我のことか？／／／／」

龍一「アホか。お前『ら』だよ」

揚羽・義経・弁慶「／／／／／／／／／／」

聞いていたのか、義経と弁慶も顔が赤い。あれ？今のでフラグたつた？でもまあみんなのこと好きだし、嘘は言っていない。おっと、勘違いすんなよ。友人としての『好き』じゃなく、女としての『好き』だ

からな。どっかのへたれイマ ンブレイカーとは違うのですよ。ま、ここにいない清楚含めて守れるように強くなればいっか。

龍一「おしゃべりはここまです。構えろ、揚羽」

言いながら構え、少し強めに殺気を放つ。

揚羽「ッ!? うむ、これでラストにしよう」

龍一「フッ!!」

揚羽「ハアッ!!」

掛け声と共にお互いの距離が一瞬でなくなり拳が衝突した。一瞬の拮抗の後、揚羽はすぐに左の拳をくりだした。龍一は右手でそれをつかみ、前に出ている揚羽の右足を、左足で踏み固定した後、揚羽の顎に肘打ちをくりだした。しかし揚羽は固定されていた足を強引に振りほどき、肘打ちを回避した。が、無理やり振り払ったためバランスを崩してしまう。龍一は揚羽の腹に蹴りをいれ吹き飛ばす。すぐさま揚羽のうしろに回り込み背中にも右ストレートをぶち当てる。それで今回の組み手は終了した。

揚羽「むづ、今回も取れなかったか。やはり強いなお前は」

龍一「いやいや揚羽も強くなってんぜ。背後に回ったときはちょっと真剣だったし」

揚羽「そうか！なに我もまだまだこれからよ！お前からは必ず一本取ってやるからなフハハハハハ　　ハ!!」

龍一「おう！期待して待ってるぜ！」

そうして朝の鍛錬が終わった。ちなみに与一には鍛錬で疲れているところを弁慶と共に強襲し、俺と弁慶の合体技『プレミアム・キンバスター（仮）』をおみまいした。ピクピク震えている与一がすげー面白かった。

Side out

Side 九鬼 揚羽 くシャワールームく

揚羽「(今朝も一撃も当てられなかった)」

少し温めのシャワーを浴びながら昔を思い出す。

龍一とはじめて会ったのは今から二年前。私の鍛錬中にヒュームが一人の少年を連れてきた。茶色の髪に整った顔立ち、しかしなによりその赤い瞳が印象的だった。深い…まるでこちらの全てを見透かすような瞳。しかし不快ではなく、その瞳はとても澄んでいた。

ヒューム「鍛錬中失礼します。揚羽様こちらは『武道プラン』の一人。名を『黄真 龍一』と言います。ほら、挨拶をしる」

龍一「紹介に預かりました、黄真 龍一と申します。お目にかかり光栄です。揚羽様」

揚羽「うむ。知っているとは思いがこちらも挨拶せねばな。我が九鬼 揚羽だ。…してヒューム よ。なぜ龍一を連れてきた？」

ヒューム「はい。実は揚羽様と龍一とで、手合わせをお願いしたいのです」

揚羽「なに!?!…: 我の實力は知っておろう。半端な力ではケガをするぞ」

ヒューム「その点に関しては、俺が直々に計りました。」

揚羽「ならばよし。我はすぐに始めても構わんぞ」

ヒューム「わかりました。この場は俺が立ち会います。龍一すぐにいけるな?」

龍一「ああ、いつでもいいぜ」

武道場の中央に5mほど離れて構える。

揚羽「ヒュームが認めるほどだ。全力で行くぞ!」

龍一「もちろんです。手加減なんてしたら許しませんから」

揚羽「フハハ!! 言うではないか! それでこそ『漢(おとこ)』よ!」

ヒューム「それでは両者…始め!!」

揚羽「あの時は一瞬で気絶させられたんだっただな」

昔を思い出し、苦笑する。それから龍一を目で追うようになった。なぜあんなにも強いのか？試合を振り返ると、対峙したときの目には強い意志があり、それを成そうとする心の強さも感じられた。だがそれを聞くことは思わない。それは、龍一の強さであり、自分の強さではなく、聞いて実践しても偽りでしかないからだ。

『強さ』とは人によって千差万別。まだ自分は足を踏み入れたばかり。これ以上は…と思いつく。その時になっていつも気づく。

揚羽「龍一を想うだけでこっちは胸が高鳴るか。龍一よ、この代償高くつくぞ」

赤くなった頬を誤魔化すようにシャワーを浴び、シャワールームを後にした。

Side out

Side 黄真 龍一

鍛錬を終え、シャワーを浴びみんなで朝食を食べた後、俺は揚羽・英雄・清楚・義経・弁慶・与一の6人を学校に送り出した。本来12才である俺は、学校に通っているはずだが、これには理由がある。それは俺が持っている、ある能力による。

『完全記憶能力』

概要を簡単に説明すると

「今まで見聞きしたものを瞬時に記憶し、自身が死ぬまで忘れることなく、いつでも思い出せる」というものである。

この能力により現在の俺の知力はトップクラスの大学卒業レベルだ。そんなわけで「学校行ってもしょうがないんじゃないネ？」という事で自室で知識を詰め込んでいる。

ちなみに今いる場所は、九鬼家が所有する島で、そこに住居兼仕事場のビル、ヘリポート。そして義経達の状態のデータを取る研究施設がある。義経達が行く学校とはこの研究施設のことで、理科室のような部屋で勉強している。ここに来た当初は俺も通っていた。

義経達はリムジン、揚羽たちはヘリで学校へ向かった。

揚羽と英雄は自分達も九鬼で仕事を手伝っており、忙しい中時間を作って会いに来てくれるのだ。揚羽にいたっては、俺との勝負を楽しみにしている節がある。

そんなこんなで文学書やら哲学書やらを読み耽っていると、お腹の虫が鳴った。時計を見ると昼の12時25分を指していた。腹も鳴るわなと思しながら、部屋を後にし食堂へ向かった。

食事を終え、部屋で紅茶を飲み、一息ついた後午後からの予定の九鬼の仕事に取り掛かる。なぜ俺が九鬼の仕事をしているのかというと、去年の五月ごろある研究チームが食堂でうんうん唸っているのを

見つけ、話を聞いてみると、大容量のハードディスクを作っているようだった。大容量のハードディスクを作るとはさほど難しくない。しかし、彼らが目指していたのは携帯電話にも使えるような薄くコンパクトなものを目指していたのだ。マッドな研究員が1cm以下のものを作りたいと言い出しそれに乗って上司に報告したため後に引けないのだ。

話してくれるかは半々だったので、今はそうとう切羽詰っているのだろうと思い、研究資料を見せてもらい、流し読みした後、こうしたらいいんじゃないか？という自分なりのアドバイスをすると、資料と俺を交互にみて、先ほどの落ち込みっぷりが嘘のように歓喜していた。研究チームははやや興奮気味でその場を後にした。俺も口を出した以上中途半端はいやなので、手伝いを申し出た。それから半年後に薄さ0.5mm 大きさ5mm 容量10TB(テラバイト)というチートくさいハードディスクができあがったのだ。

それ以来技術屋や研究者方面からの仕事が増えてくるようになった。

龍一「あゝこれは軍需部門に渡したほうがスムーズになるな。…宇宙に伸ばす軌道エレベーターの 設計はこれでいいな。農産のほうは…お、新しく作った肥料がいい感じ。野菜も甘みが増したと。んで、次はと…」

声に出しながらテキパキと机の上の資料やら報告書やらを片付けていく。

机の上の仕事は3時半過ぎに終わり、義経たちが帰って来るまで、読書書をして時間を潰し、5時過ぎに帰ってきた義経たちを迎えに

行った。揚羽と英雄は、本島の極東支部に帰るようだ。

義経達と共に食事をし、弁慶の部屋で大富豪や麻雀をやり、10時を過ぎたところで解散となった。そのとき与一に、朝ちゃんときるよように釘を刺す。

部屋に戻り、入浴後コーヒー牛乳を飲み、歯を磨いた後ベッドに入った。

龍一「ああ、明日は休みだったな。なにすっか？あいつらに会いに行くか」

目を閉じ明日の予定を考えながら、夢の中に墮ちて言った。

S i d e o u t

## 成長期 『納豆小町』との出会い

S i d e 黄眞 龍一

雲ひとつない快晴の空の下、俺とヒュームはお互いを見据えて相對していた。ここは九鬼のビルから5kmほど離れたところにある縦・横10kmほどの広大な広場で、武術家の中でも『壁を越えたもの』と呼ばれる人たちは、一撃一撃が致命傷になりかねないし、拳を突き出しただけで車を吹き飛ばす衝撃波を生み出す。

そんな人外スペックを持つ俺。そして対戦相手で師であるヒュームにとってはこの程度では思い切り戦えず狭く感じるのだ。  
なぜこんなことになったかというと、俺の言葉が発端だった。

### 回想

鍛錬の休憩中、前々から思っていたことを口にした。

龍一「なあヒューム、俺さこれから日本を含め世界中を回ってみたいんだ」

ヒューム「なんだいきなり」

龍一「驚くのはしょうがなさ。初めて人に話したし。でもさ、これは前から思ってたんだ。今俺は　　日本という国で暮らしている。だけど日本と一言で言っても全てがわかる訳じゃない。方々の地方によって主義主張も変わってくる。そのところどころでたくさんものを見て聞いて　　学んでいきたいんだ。まずは日本。その後に世界にでる!!」

ヒューム「なるほど。それが理由の半分か」

龍一「あり? やっぱわかっちゃっ?」

ヒューム「当然だ。俺を誰だと思っている。もう半分はまだ見ぬ強者、ついでに人材の発掘。ダイ　　ヤの原石探しといったところか」

龍一「正解。強者つんぬんはぶっちやけ二の次だね。いい人材は早いうちに唾付けとかないとすぐ　　いなくなるからね。強者に関しては揚羽やヒュームクラスじゃないと満足できないからな　　。あ、でも将来有望そつなのは引っ張ってくるよ」

ヒューム「なにが『満足できないだ』今まで一度も全力などだしたことないだろう」

龍一「まあね。いつでも万全の状態で戦えるわけじゃないし、鍛錬中肉体にリミッターをかけて試　　行錯誤してたんだよ。俺の正

体（オリジナル）に引っ張られたのか、いくつか技も思い出して試したし」

ヒューム「そうか。旅の件は帝様と局様の判断を仰ぐことになる。そんなに時間はかからんと思う　　がな。それよりも『正体（オリジナル）の技』と言っていたな。面白い。死合いで見せてみる」

龍一「いいの？俺としては願ったり叶ったりだけど」

ヒューム「たった今クラウドから連絡が入った。帝様と局様はお前の旅を許可したそうだ。お前なら　　心配いらさないだろうが、まあ願掛けだ」

クラウド「ではその死合、私が立ち会いましょう。よろしいですかヒューム？」

そう言っただけで音もなく現れたのは『クラウド・ディオ・ネエロ』九鬼家従者部隊序列三位の人物だ。俺もクラウドにはよく世話になったし、今もこうして見守ってくれる。ありがたいことです。

ヒューム「わかった」

龍一「ありがとうクラウド。それから帝様と同様への連絡も」

クラウド「ふふ、簡単なことでございます」

龍一「じゃあ立会いよろしく」

クラウド「畏まりました。龍一様」

そういうわけで俺はヒュームと死合うことになったのだ。俺も男だ。自分の力を試したいという思いはある。

ヒューム「龍一、全力で来い！」

龍一「わかってるよ！ヒューム！」

声と同時に互いが氣を開放させる。そしてクラウドの開始の

声上がる。

クラウディオ「それでは…はじめ!!」

声と同時にお互いの距離がなくなる。最初に攻撃を仕掛けたのはヒュームだ。ヒュームは右足で袈裟懸けに首を狙ってくる。俺はそれを左腕で受け止めすぐに腕を返し右足を掴み自分に引き寄せつつ、右膝蹴りを放つ。しかし、それはヒュームの左手に遮られる。俺は曲げていた脚を伸ばし、腹に前蹴りを喰らわそうとするが、ヒュームは膝の上に乗せていた左手に力を込め飛び上がり、左足で俺の右側頭部を狙ってきた。俺は左手に力を込め、掴んでいたヒュームの右足を上に振り上げた。そのとき、迫ってきていたヒュームの左足は俺の頭上を通過した。そして足を持ったまま体を捻り

ヒューム「ムッ!!」

龍「ダラアッ!!」

勢いよく後ろに投げ飛ばし、追い討ちをかけるように右手から気弾を数十発撃ち込んだ。その衝撃であたりには砂埃が俵っている。不意に後ろから気配を感じ、無意識に屈みさつきまで頭のあった位置をヒュームの右拳が通過する。



急所に拳を蹴りをあびせていく。腹への一撃で10mほど上に打ち上げた龍一は眩く。

龍一「俺の勝ちだ。ヒューム」

ヒューム「ああ、見せてみる……お前の根源を」

龍一「蒼龍氣功、光・龍・弾!!」

ヒューム「ガハッ!」

龍一の掛け声と共に、白く光る四つの玉が龍一を囲むように現れ、そのうちの一つが輝き一瞬で4mほどの青龍の姿になり、ヒュームをその身で貫いた。

ヒュームが力なく落下していくのを、クラウディオが目に見えないくらい細かい糸で絡めとり、ゆっくりと降下させていく。

龍一「ありがとう、クラウ」

クラウディオ「簡単なことでございます。龍一様、いかがでしたか？ヒュームの全力は？」

龍一「ああ。やっぱりスゲーわ、一瞬のキレに氣のコントロール、そして隠密。俺も見習うところは        たくさん在った」

クラウディオ「それはなによりでございます」

龍一「戦闘中にギアが上がっていくんじゃ甘いと思っしね」

俺はまだまだ自分に伸びしろがあることに内心喜びながら、クラウをみた。するとクラウの後ろの方から着地したヒュームがこちらに歩いてきた。ヒュームの執事服はどこもボロボロである。

ヒューム「俺の目に狂いはなかったな。……やはりお前は俺より強い」

龍一「ありがとうヒューム。けど、だからって俺は油断も慢心もしないよっ?」(バシャー)

ヒュームは喋りながら拳を放ってきたので、俺はそれを難なく掴む。

ヒューム「俺に勝ったのだからもしやと思ったが……。ふ、安心した。それに簡単に負けてもらって俺も立つ瀬がないからな。……それであればどれくらいだ？」

龍一「最終的には5割程度かな。てかよくわかったね？全力出していないの」

ヒューム「俺を誰だと思っている……と言いたいが、はっきり言うて『勘』だな」

龍一「勘かよ。なんですか？どこのマフィアの跡取りですか？まったく。ま、いつか。そんじゃあ戻るわ」

そうやって俺はその場を後にした。あ、みんなに旅にできること言わないとな。まあ泣いたりはいはしないよな？そんなことを考えながら九鬼のビルに向かっていった。

Side out

Side ヒューム・ヘルシング

奴を見送った後、クラウの準備した新しい執事服に着替え、先ほどの死合いについて考えている時、クラウが話しかけてきた。

クラウディオ「今回はあなたも酷くやられましたね？」

ヒューム「奴ならば当然だ。この俺が認めているんだからな」

クラウディオ「これから彼が旅に出ると聞いたなら、彼女達が寂しがりますね」

ヒューム「奴らだけでなく、揚羽様もかもしれんが……まあ大丈夫だろう。他は俺達が手助けすれ ばいいだろう」

クラウディオ「そうですね。では、私はこれで」(シュン！)

クラウディオは音も無くその場から消え、広場にはヒュームが一人残った。

広場を見ると端の方に2、3mほどのクレーターが十箇所以上できたいた。龍一が放った気弾でできたのである。ヒュームは「これで5割りか」と呟き、これからあいつが世界中を旅して何を思い、何を

得、戻って来た時どう成長しているのか？弟子の顔を思い出しニヤリと笑った後、業者に広場の整備を依頼しその場を去った。

Side out

Side 黄真 龍一

俺は学校から帰って来たみんなを迎えに行き、夕食を食べ義経の部屋に集まり、くつろいでいるところに「話がある」と切り出し注目を集める。

清楚「どんな話かな？龍君」

龍一「実はしばらくの間、世界中を旅しようと思ってるんだ」

清楚・義経・弁慶・与一「「「「ええッ!?!?!」」」」

弁慶「そんな！龍は私達を捨てて他に女をつくる気なんだな！そんなに私達に魅力がないか!?!」

龍一「全ツツツ然違う！弁慶涙目になるな！清楚も！義也「ウ  
ワアアアアン!?龍兄行っちゃ ヤダア〜!!」ってこっちは手  
遅れだった!」

清楚「うう、どういづことかちゃんと話してくれる?」

俺は三人をなだめた後、旅に出る目的を話した。世界中の国の考え  
方、人材発掘、おまけだがまだ見ぬ強者との出会い。

龍一「俺と清楚は中学三年の年、お前らも中学二年にあたる。これ  
からは自分で考えて行動してか なきゃならない。要は自立だ  
な」

弁慶「それは解るけど……やっぱり龍と離れたくない!」

義経「ひっく、よ、義経も一緒に行く」

清楚「私も……一緒にいたいな……」

龍一「ありがとう三人とも。こんな美少女達に想ってもらえて嬉し  
いよ」

弁慶「なっ!?気づいてたのか?」

龍一「あつたりまえだろ!10年も一緒にいるんだ。気づかん方がおかしい。抱きついてきたり、手をつないだり、アピールがみんな露骨すぎ。な?与一」

与一「まあ、あんだだけ見ればな」

清楚・義経・弁慶「コノノノノノノノノ」

龍一「俺もお前達のこと大好きだ。だからそんな顔すんな。『武士道プラン』が実行される時は帰ってくるから」

義経「それでも龍兄がいなくなるのはヤダ」

龍一「ありがとう、義経。しかし困ったな……そうだ!俺が帰って来たらお詫び代わりに、一つお願いを聞いてやるっ!」

清楚「なんでもいいの?」

龍一「俺のできる範囲でなら」

そう言つと女三人はなにやら相談を始める。そして……

清楚「決まつたよ！」

龍一「別に今決めなくても……ま、いいや。それで？」

弁慶三人で話し合ったんだけど、龍が帰つて来たら私達の……『初めて』をもらつてほしいん　　だ／＼／＼／

俺様フリーズ……え？ハジメテって言った？三人とも顔が赤い。あゝ、つまりこれはそーゆーことですね。

龍一「……俺でいいんだな？」

清楚・義経・弁慶「コク／＼／＼」

龍一「……わかった。その時にありがたく頂こう。で、与一は？」

与一「俺は別にいいよ。普通にお菓子とかその国の土産でいい。警戒はするがな(ボソッ)」

龍一「そっか。わかった(なにを警戒するんだ?)」

弁慶「いつ出発するんだ?」

龍一「準備もあるし三日後にしようと思ってる」

義経「最初はどこに行くんだ龍兄?」

龍一「まずは国内だな。それからアジア、ヨーロッパ、アフリカ、アメリカ大陸かな」

弁慶「そっか。帰って来たら驚くなよ」龍。私達すっごい、いい女になってるからね」

清楚「そっかよ龍君。あんまり待たせるとすぐに蝶は飛んでっちゃうんだからね。じゃあ、この話はここでお終い。次はなにしようか?」

清楚が話を打ち切り、後はいつも通りに遊んだり、くっちゃべった

りして過した。

そして荷造りに、仕事の引継ぎ等をしていたら、あっという間に三日が過ぎ俺は義経達に見送られながら旅にでた。

Side out

Side 葉桜 清楚

私達は想い人の旅立ちを見送った。彼を思うだけで胸が締め付けられる。いつの間にか私の中にいた愛しい人。彼にしばらくの間会えなくなるのは寂しいけど、でも約束もしたし必ず私達のところに帰って来てくれるよね。

清楚「じゃ、戻っか。義経ちゃん、弁慶ちゃんすっごく綺麗になって龍君を驚かしちゃおう!」

義経「そうだな。義経は頑張るぞ弁慶、与一」

弁慶「主も龍にゾッコンだね。こればかりは主でも負けないよ」

義経「そうだな。こればかりはフェアにしよう」

清楚「ふふ、私だって負けないよ。一番最初は私がもらうね」

義経・弁慶「「いいや！義経・私だ！」」

清楚「むっ、私だよ」

誰が一番だと言い争い始めたのを見て与一は

与一「「こんなの俺に押し付けていくなよ。ハア、恨むぜ兄貴」

言い争っている女達を見ながらまた「ハア」とため息をついた。

Side out

Side 黄真 龍一

俺が旅に出てから3ヶ月がたった。あれから東北、北陸と周り、俺は今関西にいる。太陽は真上に上がり、セミの鳴く音が響き夏真っ盛りである。

関西某所のメインストリートを歩いていると、甘味処があったので店に入った。餡団子とカキ氷（いちご練乳シロップ）とウーロン茶を頼み満員ぼかったので外の席にいい席に着いた。この甘味処は外にも席がありちょっとした出店になっているのだ。注文した団子とカキ氷を食べていると「納豆、松永納豆はいらんかね」と聞こえてきた。

声のする方に顔を向けると、おなじ年齢くらいの女の子が声を上げて納豆を売ろうとしている。目は大きく、顔立ちもいい。髪は黒く背中の中ほどまでである。うん、普通にかわいい。気になったのでウーロン茶のおかわりついでに店員さんに聞いてみることにした。

龍一「すみません。ちょっといいですか？」

女店員「はい、なんでしょう？」

龍一「あそこで納豆を売ってる女の子ですけど、いつもあんなことを？」

女店員「お客さん地元の人じゃないんですね。彼女は西では有名ですから」

龍一「はい。俺は東から来たので。しかしなぜ有名なんです?」

女店員「彼女の名前は『松永 燕』ちゃんって言ってね、自家生産している納豆を広めるために、納豆ソングを歌ってCDを作って売り出したりポスターなんかもあったね。西じゃ『納豆

小町』って言われてるよ」

龍一「へへそうなんですか。ありがとございます。あ、ウーロン茶のおかわりください」

「畏まりました」と言って店員さんは店の中に入っていった。彼女の方に目を向けると一人の男が彼女に近づいていく。何度か話した後二人は一定の距離を取り、向かい合った。どうやら男が勝負を挑んだようだ。どういふことか店員さんに聞いてみると、彼女は武道にも通じているらしく、たまに勝負を挑まれるらしい。周りはちょっとしたギャラリーに包まれている。

燕「せいや!」

男「グッ!?このお!」

燕「ふぶん あたらないよん、ちよいちよ!」

男「グヌツ!? ハア!!」

俺は勝負を見物し考察しながらカキ氷を口に運んでいく。

龍一「へへ、結構やるな。全然実力だしてないし、揚羽と同じくらいか? それに動きに迷いが無い。拳が来たところ、蹴りが来たところと事前に知ってる感じた。こりゃあ相手のこと完璧に調べつくしたね」

カキ氷を食べ終わり最後の餡団子を食べようとしたら、俺の方に彼女が吹き飛ばしたのか、男が飛んで来た。俺は気配で察知し、座ったまま右足を高々と上げ、俺に当たる直前に振り下ろし男を地面に叩きつけた。周囲も俺に当たると思っていたようで、口を開けポカンとしている。

龍一「あむ、んまんま。ゴクリ。まったく人の至福の時間を邪魔した罪は重いぞコノヤロー」

そう言って踏みつけている男と彼女を見た。

S i d e o u t

S i d e 松永 燕

燕「納豆！松永納豆はいかがですか！」

ん、今日も売れ行き順調順調。おとんの借金もまだあるけどこれなら十分やっていける。松永が有名になって借金も返したらおかも帰って来るかもしれない。

納豆を売りながら周りを見ると170cmくらいの筋肉質な男が近づいてくる。

お、来たね。ふん、彼が今日の相手ね。私は武術をしているので、噂を聞いた人がたまに勝負を挑んでくる。

男「失礼。君が松永 燕かい？」

燕「そだよん。あなたが挑戦者？」

男「そうだ。さっそくお願いしたい。場所はどつする？」

燕「この場でオツケーだよん。いつも会った場所だし」

男「了解した。……では始めよう」

道の中央に移動した後試合を開始した。そんなに多くはないがギヤラリーに包まれている。相手の戦闘スタイル、技に動き方なんかはばっちり調べ上げた。今までそうやって勝ってきたし、やるからには負けたくないしね。それにしても情報通り。この人は対戦相手のことを調べたりしないのかな？……ま、いつか。楽ちんだし。

ふふん そんなの当たってあげないよ。

燕「せいや！」

男「グツ!?このお！」

燕「ふふん あたらないよん、ちょいさー！」

男「グヌツ!?ハア!!」

戦いは私が圧倒していた。顔の来た右ストレートを左側に傾けてかわし、相手の後頭部に左足の上段蹴りを当てふらついたところに腹に拳を入れる。しかし相手はガードし、左足で上段蹴りを放ってきたが、しゃがんで回避し、相手の左足を払いバランスを崩し、胸に前蹴りを入れた。そのおかげで少し距離が開いた。

燕「（最後は突進からの飛び蹴りで来るはず……!!来た!?）」

男「うおおおおおお!!!!!!」

想像していた通り、突進からの飛び蹴りが来た。……なんかここまです想像通りだとなんか哀れに思えちゃうよ。っといけない。集中しなきゃ。私は飛び蹴りを右に飛び回避し、相手が着地し、振り返ったところに回し蹴りを肋骨あたりに当て、足を振り抜き、吹き飛ばした。

燕「（ふう〜、これでおしま……ってやばいぶつかるー!）」

私が飛ばした方向に、甘味処の外の席で男の子が団子を食べようとしているのが見えた。彼はこちらに気づいていないのか、団子を口にしようとしたところで、座ったまま右足を上げ、飛んで来た男が自分に当たる直前に、足を振り下ろし、男を地面に叩きつけた。私や周りの人もポカンとしている。

??? 「あむ、んまんま。ゴクリ。まったく人の至福の時間を邪魔した罪は重いぞコノヤロー」

そう言って踏んでいる男と私を見た。

Side out

Side 黄真 龍一

食事の勘定をし、気絶した男を医者任せした後、松永 燕のほうに向かった。

龍一「勝負すんのはいいけど他の人に迷惑かけんなって親に言われなかったのかコノヤロー」

燕「うっ……すいませんでした」

龍一「わかればよろしい。次からはちゃんと場所を選んでやれよ」

燕「ん、了解。それより君すごいじゃん！相手を見ないであんな行動がとれるなんて。君もなんか やってるの？」

龍一「ん？まあ、武術をね。君だってなにかしらやってるんだろ？」

燕「ま、一応ね。これでも今のところ負けなしなんだよ」

龍一「へーそりゃすごい。ところで松永納豆を試したいんだけどいかな？ついでにご飯もあると いいんだけど」

燕「ありゃ？もしかしてこの辺りの人じゃないの？」

龍一「ああ。東から来てここには着いたばかりでさ、松永納豆のこともさっきの甘味処で聞いたんだ」

燕「そつか。うーん、東の方にはまだ知名度が高くないのかな？結構有名になったと思ったんだ けどな」

龍一「まあそれも、こつやあって俺みたいに旅行者を捕まえたりすれば口こみで広がったりもするか もね」

燕「そうだよ。着実にやってかなきゃ」

そんな会話をしながら納豆の置いてある場所に着く。においは納豆。問題は味だが…判断は食ってからだ。

龍「納豆だけでもいいがやはりご飯がほしいな。白米はあるかい？」

燕「アピールするために納豆に合いそうなのは一通り用意してあるよん」

龍「さっすが。商魂たくましい」

俺は白米に納豆をかけ食べてみた。

龍「あむ、もぐもぐ。ゴクリ。…へえ、確かに今まで食べてきた納豆の中じゃ一番だな。なん　だ？製造中に手間をかけてるとしか思えないが？」

燕「ふふん それは企業秘密だよん」

龍一「まあそつだよな。ところで気になったことがあるんだがいか？」

燕「ん？何かな？今後の参考のために忌憚のない意見をお願いするよ」

龍一「いや、納豆のことじゃないんだ。聞きたいのは君のことよ」

燕「私のこと？ハッ!?これって新手的ナンパ？」

龍一「いやちがうから！確かに君がかわいいのは認めざるを得ないけどー」

燕「えっ？そんな…君みたいにカツコイイひとにかわいいなんて言われると照れちゃうよ／＼」

龍一「なんか全然照れてる風にみえないんだけど？話を戻すよ。気になったのは、なぜ君が納豆ソングのCDを売り出したり、ポスターに乗るほど勢力的に活動してるのかってことさ。」松 永  
燕「さん」

燕「な〜んだ名前知ってたんだ。う〜ん……君ならいつか。実はね、おとんが株で失敗して大量の借金作っちゃってね。おかんも愛想つかして出て行っちゃってさ。それで副業の納豆生産に目をつけて盛大にアピール！CDやポスターはそのためって訳。軌道に乗っていい感じだからこゝろが踏ん張りどころなんだ」

龍一「おふっ……。なかなかへビーだな。ごめん、ずっずっしく聞いて」

燕「いいよいよよ、気にしなくて。もうほとんど自虐ネタだし」

龍一「そっか…、強いんだな松永さんは」

燕「そんなことないよ。最初は私もだめかと思ったもん」

龍一「でも今まで頑張ってきたんだろ？それだっですごくいいことだよ。う〜ん、通信販売とかはしてないの？これだけ美味しいならやってもいいと思うんだけど」

燕「そうしたいけどまだいろいろとコネがね。扱ってくれる企業や、通販だったら運送会社にもルートを作らないといけないし…」

龍一「あゝ、やっぱりその辺が問題になってくるよなあ。……!!（ピ  
ン）来た！閃いた！これで勝つ　　る！」

とつさに閃いた俺はボールペンとメモ帳を取り出しある企業の電  
話番号を書き出し松永さんに手渡した。

燕「ん？これはどこの番号？」

龍一「それは掛けてみればわかるよ。その時に俺の紹介だって言え  
ば……そういえば自己紹介して　　なかつた」

燕「あ、そういえばそだね。じゃあ、あらためて私は『松永　燕』ま  
たの名を『納豆小町』私のこと　　とは燕でいいよん」

龍一「俺の名前は『黄眞　龍一』15才。今は見聞を広めるため各  
地を旅行中だ。俺のことは好きに　　呼んでいい。よろしくな燕」

燕「あ、同い年なんだ。よろしく！龍一君！」

龍一「龍一君……」

燕「あ、いやだったかな？」

龍一「いや、そんな風に呼ばれたのは初めてだからちよつと驚いただけだ。燕の呼びやすい形でいい」

燕「ありがと、龍一君」

龍一「どういたしまして。じゃあ、そろそろ行くわ。ついでといっちゃ何だが、このあたり……いや、西で有名な武道家や人材が集まる場所とか知ってるか？」

燕「ん、もう少し西に行くと『天神館』っていう学校があるよ。武道も盛んで若い世代の人材育成にも積極的だって聞いたことがある」

龍一「『天神館』か……。わかった、ありがと燕。さっき渡したメモ、一つはある企業の番号だけど、携帯とアドレスは俺のだからいつでも連絡していいよ。じゃ、またな燕」

燕「うん、わかった。またね、龍一君」

燕に別れをつげその場を後にした。あ、納豆買っの忘れたと思い戻ろうとしたが、そのうちまた会えるかと思ひ直し、町の喧騒にまぎれ

ていった。

これが『納豆小町』松永 燕とのファーストコンタクトであった。

S i d e o u t

## 第廿話 帰還

3月末・香港国際空港

香港国際空港は約15k<sup>2</sup>mの空港島で、年間約5000万人が利用し、ターミナルには世界各地の有名ブランド店や、レストランやカフェ、土産店など様々な店がある。

世界でも仁川国際空港、シンガポール・チャンギ国際空港に次ぐ世界3位の空港と評価されるほどである。

そしてここに、一人の男性の姿がある。

髪は茶色でセミロング。整った顔立ちで身長は180cmくらい。黒のスボンに白のTシャツにファー付きの黒いジャケットを着て、背には竹刀袋を背負っている。

彼は今日本行きの便に乗るために出発を待っている。

龍一

「…3年か。…あつという間だったな」

彼は見聞を広めるための旅に出ていた。そしてあるプランが近じか実行されるため日本に帰国するのだ。彼は携帯を取り出し、一見のメールを見る。そこには…

『武士道プランを実行する。至急戻られよ』

とあった。

龍一

「ついに始まるか…。俺は傍観していればいいとはいえ少し複雑だな」

彼もその計画の全貌を知る一人だが、彼が受けた命は傍観しろというものだった。これからのことに考え耽っている…

アナウンス

「まもなく日本行きの便が出発します。」ご利用のお客様は搭乗ゲートまでお越しく下さい。繰り返します、まもなく…」

という放送が流れてきた。彼は携帯をしまい、座っていた椅子から立ち上がり搭乗口に向かった。

龍一

「考えていても仕方ない。俺はあいつらを手助けしてやればいい」

そう考え、彼は日本行きの便に乗った。…向かうは日本。この一年は彼にとって忘れられない一年になる。

S i d e 九鬼 揚羽

P M 1 3 : 2 5 日本・成田国際空港

成田国際空港は千葉県成田市の南東部三里塚地区にあり、敷地面積940ha、利用者数年間役2500万人。飲食店やコンビニ、銀行窓口などがあり、日本で第二位の空港である。

揚羽

「クラウよ。龍一はまだか？」

クサウディオ

「飛行機は到着しておりますゆえ、もうまもなくかと」

揚羽

「であるか」

我は今一人の男を待っている。一度として『武』において勝利することができなかつた男。

そして我の心を奪っていった男を…

ヒューム

「揚羽様、どうやら来たようです」

その声を聞き飛行機の出口を見ると、黒い服に身を包んだ男が大きな目のバックをもって出てきた。

気づいたのか、こっちに歩いてくる。

まったく、我が目を放した際に勝手に世界を回りおって…。

龍一

「ただいいま。揚羽様」

揚羽

「うむ。おかえりだ龍一。それと様付けはよせと言ったのであるっ」

龍一

「ま、一応最初だけ」

揚羽

「確信犯か」

龍一

「ハハ、元気そうだなによりだ揚羽。それにヒュームやクラウディオ、マーブルも久しぶりだな」

ヒューム

「貴様も随分と腕を上げたな。帰ったら久々に相手をしてやるっ」

龍一

「相変わらずだなヒューム。楽しみにしてるよ。マーブル、義経たち

の様子は？」

マープル

「みんな元気にやっってるよ。あいつらを脅かすために、あんたが今日帰って来るのはあいつらには伏せてある」

龍一

「お前も人が悪いな」

マープル

「ありがとうよ」

龍一

「ほめてないぞ」

揚羽

「立ち話もここまでにして移動するか。クラウドよ案内せい」

クラウドイオ

「畏まりました」

クラウドを先頭にターミナルの方へ向かう。我は龍一に世界のことや武闘家たちのことを聞いたりした。龍一は楽しそうに話してくれた。世界で見たこと。武闘家たちのこと。この遺跡がすごかったとか、この技はこうだったとか。

我の気持ちに気づいていないのか本島に楽しそうに。覚悟しておけよ龍一。必ず主を我に惚れさせてみせるぞ！

Side out

俺は今空港を出て九鬼家の保有するリムジンで極東本部に向かっている。

迎えが来るのは知っていたが揚羽までいるとは…まあ嬉しいが。揚羽にいろいろと話していたが、本題に入るためマーブルに切り出した。

龍一

「マーブル、プランの実行はいつだ？」

マーブル

「6月の中ごろ。あんたたちは川神学園に転入させるから、それでいよいよ一学期の中がらさね」

龍一

「川神学園か…。確か武神といわれた川神百代がいたな」

ヒューム

「そつだ。あの赤子との試合の舞台は用意してある。まだ先だが、もし申しこんできたらそついな」

龍一

「了解した」

マーブル

「ああそれと、あんたのことは義経達のお目付け役としての転入にな

るからね」

龍一

「俺もクローンだがそれを知るのは帝様と局長のみ。ならば普通の人間としてプランの要である義経達のそばに置いたほうがいい…というところか？」

マーブル

「そういうことさね。理解が早くて助かるよ」

龍一

「仕方がないか。義経たちには俺から説明しよう」

マーブル

「頼むよ。あんたのことは帝様たちしか知らない極秘プランだからね」

龍一

「そんなたいそうな話じゃないさ」

クラウディオ

「皆様、極東本部が見えてまいりました」

運転しているクラウディオの声を聞き、俺は外の方に顔を向けた。

揚羽

「少しは懐かしいのではないか？龍一よ」

龍一

「ああ、何回も来てたからな。帰ってきたんだなって実感する」

外に顔を向けながら揚羽に答えた。

義経達はどんな顔をするのか楽しみにしながら支部へと向かっていった。

Side out

Side 源 義経

PM15:10 九鬼財閥極東本部

義経

「フッ！セイッ！ハアッ！」

弁慶

「主、そのあたりにして今日はもう終わりにしよう」

そう言って弁慶はタオルとドリンクを見せてきたので義経は振るっていた刀を腰の鞘に納刀した。これで今日の鍛錬は終了だ。

弁慶からタオルを受け取り汗を拭いたあとドリンクを飲んだ。

義経

「ぶは、ありがと弁慶」

弁慶

「気にしない気にしない。これも部下の務めさ」

言いながら弁慶は川神水の入ったビンとお猪口を取り出し、川神水を飲みだした。

義経

「いい加減飲みすぎだぞ、弁慶」

弁慶

「少しくらいいいじゃないか。人生の楽しみはいい酒 ギロリッ」…もとい、いい川神水といつまみと少しばかりの刺激だよ」

義経

「そう言っていていつも途中で酔いつぶれるじゃないか。いつも部屋に運ぶ義経の身にもなってくれ」

弁慶

「あはは、だから感謝してるよあるじ〜」

義経

「まったくしょうがないな」

少しあきれた顔で弁慶を見た。楽しそうに川神水を飲んでいる。飲んでいる途中弁慶が

弁慶

「そういえば今日重要人物が来るとか言ってなかったっけ？」

義経

「え!? そうなのか!? 義経達も挨拶するのか!？」

弁慶

「ん〜、九鬼にとってだから大丈夫じゃない? すれ違ったりしたらしないといけないと思うけど」

義経

「そうなのか? でも挨拶するときを考えると緊張するな。弁慶、義経はちゃんとできるだろうか?」

弁慶

「大丈夫だよ主。主ならできると」

義経

「そうか、ありがとう弁慶」

会話を交わした後二人は汗を流すため訓練室を出た。

部屋に向かう途中で清楚と合流し、一緒に義経の部屋に行くことになった。

そして部屋の方から一人の男性が歩いてきた。

3年前に旅立ち夢にまで見た、義経の好きな人…

義経・弁慶・清楚

「」「龍兄・龍・龍君!!」「」

龍一

「ただいま。みんな」

Side out

Side 黄真 龍一

龍一

「ただいま。みんな」

いい終わった後三人がものすごい勢いで抱きついてきた。義経と清楚は少し涙ぐんで、弁慶は川神水を飲んでいたのか顔が赤い。

義経

「ウワァァン!!おかえり龍兄〜!!」

龍一

「ああ、ただいま義経。元気にしてたか？」

義経

「ああ！義経も弁慶も与一も清楚先輩もみんな元気だ！」

龍一

「そうか。弁慶も今まで義経達の支えになってくれたんだな」

弁慶

「部下として当然さ。それより今日は付き合っつてよ？」

そういつて弁慶は川神水を取り出す。

龍一

「相変わらずだな。いいだろう今日はとことんまで付き合ってやる」

弁慶

「さっすがは龍。わかってる」

龍一

「ま、今日くらいはな。清楚も久しぶり」

清楚

「うん、おかえり龍君。病気とかにはなったりしてない？」

龍一

「健康そのものだ。お土産があるから部屋にもっていこう。義経の部屋でいいか？」

義経

「わかった。与一も呼んでおく」

龍一

「助かる。じゃ、またあとでな」

踵を返し部屋に向かう途中、まだあいさつをしていない人物を思い出しその人物の部屋に向かう。

龍一

「(この時間なら大丈夫なはず)」

部屋の前に着き、「コンコン」とドアをノックする。

???

「だれだ？」

龍一

「龍一です。紋様帰還のご挨拶に参りました」

紋白

「何！帰ったのか！」

ドアの向こうから「ダダダッ」と聞こえた後ドアが開き中に案内され紋白はベッドに、俺は椅子に腰掛けた。

『九鬼 紋白』

彼女は九鬼家の三人目の子で、長女の揚羽、長男の英雄、そして次女の紋白となる。

正妻の局様の子ではなく妾との子である。

九鬼家に引き取られるさいに、認められるため自分で額に傷を入れた。

局様との中はあまり良好とはいえないが、母に認められるため頑張っている。

揚羽や英雄にはとても可愛がられていて、「目に入れても痛くもな

んともないわ！」とは英雄の言葉である。  
俺にとっても可愛い妹分だ。

龍一

「黄眞龍一ただいま戻りました。紋様」

紋白

「おお、ようやく帰ってきたか龍。我はとても会いたかったぞ」

龍一

「私のわがママを聞いていただいてありがとうございます」

紋白

「そう畏まらずともよい。昔のように紋と呼んでかまわないぞ」

龍一

「わかりまし…いや、わかったよ紋」

紋白

「うむ、それでよい。義経達には会ったのか？」

龍一

「ああ、さっきな。与一はまだだが。これから義経の部屋に行ってお土産を渡すんだが紋も一緒にどうだ？もちろん紋のもあるぞ」

紋白

「それは真か!?なら我も参加させてもらおう。土産のほう期待しているぞ」

龍一

「そういわれると恐いな。まあ紋に納得してもらえるものだとは思  
う」

紋白

「フハハ！であるか。楽しみにさせてもらおう」

龍一

「じゃあそろそろ部屋に取りに行かないと。一緒に行くか？紋」

紋白

「うむ」

紋の部屋を出て俺の部屋にお土産を取りにいき義経の部屋に向  
かった。

義経の部屋にはさっきの三人に加え与一がいた。

龍一

「久しぶりだな、与一」

与一

「ああ、おかえり兄貴」

龍一

「何だ？妙にそっけないな。なんかあったのか？」

与一

「一つの心理に気づいただけさ」

龍一

「一つの心理？」

与一

「ああ、人生なんて死ぬまでの暇つぶしにしかならないってことね」

俺は弁慶に目を向けた。

龍一

「(どっつしてこうなった?)」

弁慶

「(ここで働いてる奴の心無い言葉でね)」

龍一

「(…後で詳しく話せ)」

弁慶

「(了解)」

弁慶との目での会話の後、両手に持っていた紙袋を広げた。

龍一

「食い物系のお土産はみんなと食べようと思ってな。今は食つなよ、夕食が食べれなくなるからな。それでこれが個人的な土産…というよりプレゼントだな」

紙袋からプレゼント用に包装された二つの正方形の箱を取り出す。

龍一

「これは清楚・義経・弁慶のだな」

清楚

「開けてもいい？」

龍一

「ああ」

三人が包装紙を外し青い箱を開けると…

弁慶

「これは…」

義経

「プレスレット…」

清楚

「きれい…それに内側に字が彫られてる」

箱の中身は小さなダイヤがはめ込まれた銀色のプレスレットです  
それぞれ

『a M M o R & R B M u s s a s h i b o o R & R a M o . Y . M i n n a M o t o R . S . H a z a k k u r a & R o M a .』

と彫られている。

龍一

「気に入ってもらえたか？」

清楚

「ありがとう龍君!!大事にするね」

義経

「わあ〜ホントにきれいだ!!ありがとう、義経は着けたらはずさないぞ」

弁慶

「字を彫るなんてにくい演出するじゃないか。…でも、ありがとう」

龍一

「気に入ってもらえたようだなにより。与一はこれだ」

細長い箱を与一に渡す。

与一

「いっしょは…」

龍一

「どうだ？」

与一

「ああ、気に入ったぜ!!」

与一に渡したのは鬮體と十字架をあつらえた銀色のネックレス。  
厨二くさかった与一に対して選んだのだが、酷くなっているとは思  
わなかった。今ではいいチョイスだと思う。

龍一

「最後は紋だな」

小さめの正方形の箱を渡す。

紋白

「どれ…中身は時計か」

龍一

「ああ。紋も忙しいと思うし、ヒュームやクラウがいるとはいえ、  
いつものも持ってもいいと思うてな」

紋白

「我のためを思ってくれているのだな。感謝するぞ龍」

龍一

「これでみんなに行き渡ったかな。夕食まで時間があるし久々にみん  
なでゲームでもするか」

弁慶

「んじゃあ龍の旅の話でも聞きながらしますか」

龍一

「ああいいぞ。最初に行ったのは……」

その後ゲームをしながら旅の話をして夕食の時間までひさびさに楽しく過ごしていた。

夕食の後弁慶が川神水を持って俺の部屋で一緒に飲んだ。

肴をいろいろ用意していたので弁慶は俺の膝の上ですぐに酔いつぶれそのまま眠ってしまった。しばらく一人で飲んだ後、そっと弁慶の頭をどかし毛布を弁慶にかけ寝顔を見ながら眠った。

こうして帰ってきてからの一日は過ぎていった。

S i d e o u t

## 第貳話 武士道プラン

4月中旬・AM10:35 九鬼財閥極東本部

訓練施設では龍一と義経が刀を手に取り打ち合っている。

一般の人の目では視認することはできず、武道をするものでさえ見る事ができるのは極僅かだろう。

しかし見る事ができたのならば、その二人の美しさに目を奪われることになるだろう。

二人の『容姿』ではなくそのあまりに素晴らしく、苛烈で、流麗なその『動き』にだ。

龍一が上段から刀を振り下ろせば、義経は体を左に半分反らしてかわし、刀を横一閃に振るう。

その一閃に刀をあて、上に弾き、隙だらけになった体めがけて拳を突き出す。

迫ってくる拳に右足の裏で防ぎ、そのまま後方に跳び距離をとり、着地した直後に踏み切り龍一に向かっていく。

一合

二合

三合

八合

十五合

二十四合

三十八合

六十四号

百七十合

いつまでも続くと思われた二人の闘いの舞はお互いが距離を離れたところで終了した。

Side 黄真 龍一

龍一

「このあたりで終わりにしよう。義経」

義経

「そうだな。はあく、それにしてもすごいな龍兄は。帰ってきてからも一太刀も当てられないなんて」

龍一

「まだまだ。俺だって修行中の身だ。義経がそう思うなら義経も強くなれるよ」

義経

「そうか。龍兄、義経は強くなる。そして龍兄の隣に並んでみせるぞ！」

龍一

「ああ、期待している。そろそろ昼食だ。そのまえにシャワーでも浴びよう」

義経

「そつだな。汗をながさないとな」

俺たちはひとしきり話した後、シャワーを浴びるため訓練所を後にした。

同日 PM 21:18 九鬼財閥極東本部 自室

『ここが勝負、勝負の時なのだ』

今日の予定を終え、シャワーを浴び、タオルで頭を拭きながら出ると携帯の着信音が鳴り響いた。  
相手は…

『松永 燕』

とあった。

燕

『やっほ。久しぶり元気にしてる？』

龍一

「ああ、息災だ。伝えるのを忘れていたが今はもう日本に帰ってきているんだ」

燕

『あり？ そうなんだ。早く教えてくれたらよかったのに』

龍一

「こっちも忙しくてな。そっちはどうなんだ？」

燕

『もつぱうちり！ 龍一君が九鬼財閥を紹介してくれたおかげで、もろもろの諸事情がぜんぶ解決！ 納豆の売れ行きも、うなぎ上りさ！』

龍一

「そうか。それはなによりだ」

燕

『あの時はありがとう』

龍一

「気にするな」

燕に会ったとき、別れ際に渡したのは俺の携帯のアドレスと番号ともう一つ。九鬼財閥の電話番号。世界的に有名な九鬼財閥は普通に調べてもわかるが、今回渡したのは、ここ『極東支部』の番号。

ここなら揚羽や英雄、紋がいるし俺の名前をだせば必ず上に報告すると思っただからだ。

話を聞くと、俺と別れた後に電話。出てきたのが九鬼財閥で驚いたみたいだ。

最初は取り合ってくれなかったらしいが、俺の名前をだしたら一発だったみたいで、話を聞くと行って燕はプレゼン。納得のいく物だったのかあれよあれよという間に話は進み、通販での販売や松永納豆を市場に卸して全国への販売拡大。

人気なのでCMやポスターも今までどつりらしい。  
おかげで借金も全額返済。父親も技術面に強いこともあって九鬼  
に就職。今までの苦勞が報われたということだ。

燕

『いくらお礼を言ってもいい足りないよ』

龍一

「気にするな。困っている友人に手助けしたにすぎん」

燕

『友人…かあ』

龍一

「燕？」

燕

『え!? あはは、ごめんごめんなんでもないよ』

龍一

「そうか、ならいいが…」

燕

『あはは、ちょっと考え事してただけだから。そうそう、もうすぐ君に  
とってビッグなイベントがあるよん』

龍一

「ビッグイベント? 俺個人に? なんだそれは？」

燕

『ぬふぶ〜、それはEミン。でもあと二ヶ月くらいかな』

龍一

「二ヶ月？プランと重なるな。燕は知っているのか？…考えても仕方ないな）気にはなるがそれは後のお楽しみにしよう」

燕

『そうそう。でもきつと喜ぶよ』

龍一

「それは楽しみだ」

その後、しばらく話したあと電話を切り、ベッドに入った。

プランまで二ヶ月か…。あ、あいつらに俺はプランの一人としては参加しないって説明しないと。そんな考えごとをしながら瞼を閉じた。

S i d e o u t

S i d e 直江 大和

6月7日 川神市工場地帯

夜。もうまもなく日付も変わるうという時間。

俺たち川神学園二年生たちは西にある学校『天神館』と交流試合をしている。

きっかけは、数日前に川神学園学園長、川神鉄心が全校集会での発言だった。

## 回想

### 鉄心

「西にある天神館が週末に修学旅行で川神に来るらしいの。天神館の館長とは知り合いでの、学校ぐるみの決闘を申し込まれたので引き受けてぞい」

と、とんでもないことを言い出した。ざわつく生徒たちを聞いて学園長は続ける。

### 鉄心

「これを東西交流戦と名づける。激しい戦になりそうじゃわい」

周りの生徒を置いて一人思考に耽る。

### 大和

「(天神館といえば西では有名なバリバリの武闘派の学校…学園長の

知り合いらしいしこうなるのも時間の問題か…」

昨今、学生の強さは東高西低と言われているらしく、それがどうにも西の武闘派たち、特に好戦的な連中は気に入らないらしく、今回旅行のついでに決闘を申し込んだ。…このことだ。

鉄心

「夜に川神の工場地帯で、各学年200人を出し合い大規模な集団戦となる。総大将を決め、その総大将を倒せば勝利、ルール無用の実践形式3本勝負じゃ」

うちの連中も好戦的な奴らが多いうえに、祭り好きなので、そのイベントには大半がノリノリだった。

うちの身内たちも興奮を抑えられないようだ。

キャップ

「いいねいいねー、最高に燃えるじゃねーか…」

テンションあげてはしゃいでるのは『風間 翔一』。通称キャップ。風間ファミリーのリーダーで凄まじい豪運の持ち主。常にバンダナを頭に巻いている。

ワン子

「私も私も！うーん、腕がなるわ！」

同じくはしゃいでるのは『川神 一子』。通称ワン子。

川神にあるお寺『川神院』の娘で、赤い髪にポニーテール、性格は明るく風間ファミリーの一員だ。『川神院』は武道の総本山として有名で、ワン子も武芸者だ。

クリス

「調子に乗ってすぐやられたりするなよ、犬」

一子

「そつちこそ無様にやられたりしないでよね、クリ」

ワン子に話かけたのは『クリスティアーネ・フリードリヒ』。通称クリス、クリ。

川神市と姉妹都市であるドイツのリューベック市から来た留学生で、金髪にストレートヘア、容姿端麗で性格も明るい。フェンシングを嗜んでおり、学園でも屈指の実力者だ。同じく風間ファミリーの人。

京

「なんか大げさになってきたね…。そして大和愛してる」

大和

「いつものことさ。そしてお友達で」

京

「チッ、おしい」

モロ

「あはは、いくらなんでも脈絡がなとすぎるよ」

俺にいきなり告白してきたのは『椎名 京』。通称京。

青髪のショートヘアで、性格はおとなしい…というか根暗。

小学校の時に、いじめから助けたのがきっかけでファミリーの一員になった。

椎名流弓術を習得しており『天下五弓』の一人。

京に突っ込んだのは『師岡 卓也』。通称モロ、モロロ。

色白で線が細く性格もおとなしいが、その知識量はファミリー随いで、こと情報戦では非常に頼れる存在だ。

ガクト

「ふっふっふ、ここで活躍すれば俺様にも彼女が！」

京

「ないね」

大和

「ないな」

モロ

「ないね」

ワン子

「無理じゃない？」

クリス

「無理だな」

キャップ

「頑張ればできるさー!」

ガクト

「なんだこいつら全然容赦がないぞ…!」

ほぼ全員から否定されて落ち込んでいるのは『島津 岳人』。通称ガクト。

身長は190cm近くあり、体格もよく、顔もそこまで悪くないが先のような発言を普通にするので同学年の女子からは気味悪がられている。しかし面倒見はいいので後輩の女子からは避けられてはいない。何か武道をしている訳ではないが、ファミリー内は武闘派の人物が多いので回避力は高く、喧嘩も強い。

忠勝

「はあ、忙しくなりそうだな」

大和

「ゲンさんはバイト?」

忠勝

「チッ!聞いてやがったか…まあそうだ」

小さく呟いたのは『源 忠勝』通称ゲンさん、ゲン。

肌は浅黒く目つきも鋭いため不良として見られがちだが、生活は健康的。

川神学園の所有する『島津寮』に住んでいる。

最後に俺『直江 大和』。通称大和。

ファミリー内では軍師と呼ばれていて、ガクトと同じ理由で回避力が高い。戦闘力は可もなく不可もなくといったところ。

あと二人いるがそれはまた後ほど。

とうかさつきから誰に向かって説明してるんだ？…まあいいや。

キヤップ

「くー、ワクワクするなー！作戦は頼むぜ！軍師大和！」

大和

「ああ、まかせとけ」

回想終了

こうして東西交流戦は開始された。

現在の戦績は1勝1敗。

初戦、まゆつちのいる一年の部は総大将を1 S『武蔵 小杉』とし、戦闘開始。

総大将自ら戦陣に立つものの、相手の方が自力が上なのかすぐに囲まれて終了。

初戦は天神館の勝利となった。

まゆつち本名『黛 由紀江』

ファミリー内唯一の一年生で携帯ストラップの『松風』を持っている。

本人曰く「九十九神がやどった」とのこと。

『剣聖』の娘で本人も剣術を納めており、その実力はトップクラス。しかし内気な性格が災いしてか、友だちが少ないのが悩み。

二戦目、川神 百代率いる三年の部。

『川神 百代』通称モモ先輩、姉さん、お姉様。

川神鉄心の孫娘で、武において天賦の才を持っており、幼少の頃より武を鍛えてきた。公式戦いまだ無敗で『武神』とも呼ばれている。

ちなみに俺はあの人の舎弟で姉さんと呼んでいる。風間ファミリーの一人。

閑話休題。

三年の部では天神館側が合体技『天神合体』をくりだし巨大化するも、姉さんの川神流『星殺し』で爆散。弱っているところを三年で掃討し、二戦目は川神学園の勝利となった。

そして最終戦二年の部。

英雄

「一年の敗北をみなも見たであろう！バラバラに戦っては天神館に勝利することはできん！学び舎の名を高めるか！辱めるか！選べ、お前たち！」

九鬼英雄の演説が、生徒の心をうつ。

心

「ふむ…F組と手を組むのは甚だいかんじゃが勝つには仕方がない

の

冬馬

「私たちは力と体を合わせて、西と戦いましょう」

大和

「体は合わせないからな！」

冬馬

「つれないですね」

準

「ま、昨日の敵は今日の友と言っしな」

小雪

「お祭りのはじまりだ〜！」

準

「こらこら、スカートのまま飛び跳ねるんじゃないありません」

小雪

「スパッツだから平気だよ〜ん（ピラッ）」

準

「そついう慎みのないことしちゃいけません」

騒いでいるのは？ Sの生徒。

『不死川 心』

名家御三家のうちの一つ『不死川家』の娘。

プライドが高く家柄で人を見下すため、周りからの評判はとても悪い。

しかし弄ると面白い。

『葵 冬馬』

葵紋病院の跡取りで、成績優秀、容姿端麗で性格も温和。

だが、自称両刀使いである。

『井上 準』

同じく葵紋病院の跡取り（冬馬の父が院長で準の父が副院長）。

S組に所属しているだけあり成績は良い。S組は総じてプライドが高いが、付き合いやすい人物だ。

スキンヘッドで、幼女が好きだが本人曰く「手折るもんじゃねえ、愛でるもんだ」とのこと。

『榊原 小雪』

冬馬や井上と一緒にいる女の子。

フラフラしており井上を困らせているようだ。紙芝居が趣味で好物はマッシュマロ。

閑話休題。

二年の主力はF組とS組。

英雄は鼓舞し終わると一子のほうに向かった。

俺と冬馬は部隊の配置や部隊の編成案を詰めるため話し合う。

満月が見下ろす工場地帯。

戦の火蓋は今まさにきつて落とされようとしていた。

戦闘が始まって幾ばくかの時間が過ぎた。

俺と冬馬は見晴らしのいい場所から戦況を眺めている。

大和

「どうにも旗色が悪いな。自力は向こうが上か」

冬馬

「西方十勇士を各個撃破し、士気の低下を狙っていくしかありませんね」

大和

「そういう位置に配置したけどな。十勇士さえ抑えれば後はゴリ押しでいける」

冬馬

「大和君にも動いてもらいますよ？」

大和

「ああ、そういう役割だからな」

戦況を見ながらどちらともなく口を閉じた。

Side out

Side 川神 一子

大友

「軟弱な東の連中め！西国武士の気骨を見よ！」

『大友 焰』の改造大筒が川神学園の生徒に狙いをつける。

大友

「大友家秘伝国崩しいいいいいい！！！！」(ドゴオオオオン！！！！)

数多の弾丸が放たれ焼夷弾が夜空を紅に染め上げる。

一子

「うわぁっと！すっごい広範囲！どんだけやられたんだろ？というかやりすぎじゃない」

大友

「東西交流戦とはいえあくまで戦。その程度で喚くな。体を動かさず部屋に閉じこもっていたのであるっつ？軟弱者め！」

一子

「ぐぬぬ、豪快すぎる。だけど倒してみせる」

薙刀を構え大友に駆け寄る。

大友

「させるか!! 国崩しいい!!!」

近寄らせまいと大筒を放つ。

一子

「あつぶない!」

持ち前の瞬発力で回避し、爆風に吞まれながらもダメージを最小限ですませる。

そして大友の背後に一子を狙う男が一人…

大友

「ハッ! 逃げるしか能がないのか! 腰抜けめ!」

一子

「(回避して弾切れを狙うしか今のところ手がないよ)」

毛利 元親

「東の凡夫共、美しい毛利の三連矢で仕留めてやるっ」

大友

「せりゃあああ!!」

毛利

「今だ!!」

一子に向かって、回避不可の矢が放たれる。

一子

「!!!」

しかし、その矢は一子に当たることなく別の矢に弾かれる。

一子の遙か後方で京が矢を狙ったのだ。

そのまま弓を引き毛利に狙いを定める。

毛利は死角に入りやり過ごそうとするが…

京

「無駄だよ」

そのまま爆薬つきの矢を放った。

矢は毛利の横1mほどの壁に着弾、爆発。

毛利は爆風で飛ばされリタイア。

京

「椎名流弓術【爆矢】こっちも遠慮は無しで」

一子

「弓ではこちらの方が上みたいね」

大友

「勝敗は戦の常だ…しかしそれで事態が好転する訳じゃない！」

一子に向けて大筒を放つ。

大友

「一つ言っておくが私に弾切れは無い」

一子

「ガーン」

大友

「補給線を確保しておくのは戦の基本よ！」

マルギッテ

「そしてそれを潰すのも戦の基本と知りなさい。現在お嬢様が後方をかく乱中です」

大友

「しかしそれでも弾切れは無い!!こんなこともあろうかと各地に弾薬は保管済み」

マルギッテ

「しかしそれもあなたを倒してしまえば必要なくなる」

直後に大友に向かってマルギッテが疾走。

マルギッテ

「トンファアーシュート!!」

大友の大筒の発射口目がけてトンファアーを投擲。

大友

「なっ!!」

直後、爆発。

一子

「まだよ!!マル!!」

一子の声と共にマルギツテのいた場所が爆発する。

大友

「国…崩し…」

マルギツテ

「その状態での攻撃…そして気迫見事です」

そしてマルギツテはトンファアーを構え大友に疾走。

大友が撃った大筒を避け、トンファアーで腹、顔、腕など連撃をくらわせていく。

マルギッテ

「トンファーストライク!!」

大友

「ぐあああ!!」

連撃を受け大友撃沈。

一子

「いやーいいとこ全部もっていかれちゃったわ」

マルギッテ

「火力の高い敵を足止めしただけでも十分です。誇りに思いなさい。私はお嬢様のもとに行きます。お前も前線に行きなさい」

一子

「望むところ!!」

二人は前線へと駆けていった。

Side out

Side 井上 準

俺達は敵の最前線にいる。ここで力を発揮しているのはクリスだ。

井上

「さすがクリス！軍人の娘だけあってすげー指揮だなーおい」

クリス

「お前もなかなかやるではないか」

二人で会話しているとこちらに向かってくる集団がある。

尼子 晴

「尼子隊参上!!」

クリス

「くっ！もうすぐ本隊だというのに」

井上

「クリス！ここは先に行け！」

クリス

「お前…」

井上

「少しはカツ」つけさせるよ」

クリス

「…分かった。借りておくぞ」

クリスを先に行かせ尼子隊と対峙する。

尼子

「なんだ？やるきか？」

井上

「一見シヨタっぱいけど俺にはわかる。ホントは女の子なんだろ」

尼子

「おれは男だー!!」

井上

「いいねーお約束だねー可愛いよ。マジ天使…それなのにこんな戦いに巻き込まれるなんて…ああんまりだああー!!」

尼子兵

「え？なにこいつキミチワル！」

井上

「てめえらはお呼びじゃねえんだよ!!芯竜ー!!拳!!」

尼子兵

「理不尽だああー!!」

井上

「幼女の絡んだ戦闘では俺の戦闘能力は3倍になる」

尼子

「じ…自衛の兵が…」

井上

「もう戦わなくていい」

いいながら近づく。

尼子

「近づくな！切り刻むぞ」

俺に向かってクローが飛んでくるが回避。

井上

「お兄たまと呼ぶがいい。さあお風呂で汚れを落とそう」

そして尼子を抱きしめる…しかし…

尼子

「うわああーきもちわるいよーー!!」

井上

「!!」…この余計な感触は！お前男だったのか!!」

尼子

「さっきからそういつてるだろー!!」

井上

「お前にはがっかりだよ」

そして尼子の首筋に手刀を食らわせる。

尼子

「がっ!!」

井上

「俺はシヨタじゃねえ…そんな特殊な性癖は持たねえ!!」

尼子隊撃沈

S i d e o u t

S i d e 忍足 あずみ

あたいは九鬼家従者部隊序列1位で英雄様の従者だ。  
今、英雄様は負傷兵たちを鼓舞している。

英雄

「聞け!!負傷兵たちよ!!同胞の活躍で敵将の半分以上を討ち取り戦線は膠着している!!今こそ背恥辱を晴らすとき!!西にやられたままでいいのか!!立てるものは行き、武勲をあげよ!!」

生徒A

「俺は行くぜ！」

生徒B

「あたしもまだ行けるわ！」

さすがは英雄様。息を吹き返した。ん？こっちに近づいて来る気配…上か！

あずみ

「鉢屋か！一人で奇襲とは西は頭がイカれてんのか？」

あたいは小太刀二刀を構え急降下してきた影を蹴り飛ばす。

鉢屋

「風魔か！騙まし討ちこそ忍びの基本。一人のほうに奇襲に向く。人数がほしければこのとおり」

鉢屋が5人に分身する。

英雄

「あずみ、さっさと片付けろよ」

あずみ

「畏まりました！英雄様!!」

あたいは鉢屋に駆け寄り一瞬で5つの影を切り伏せる…しかし…

あずみ

「手ごたえが無い。全部残像？」

鉢屋

「本体は後ろよ！もらったぞ！」

鉢屋はあずみをガツチリ掴み上空へ跳躍。

あずみ

「チッ！飯綱か！」

鉢屋

「源流を同じくする風魔と鉢屋。この技の恐ろしさは知っていよう  
」！

『飯綱落とし』

相手の四肢を固定し同時に跳躍。そのまま上空から叩き落とす技である。

あずみ

「不様なところは見せられないんでね!!」

あたいは歯を合わせ奥歯に仕込んだ自爆スイッチを押す。瞬間に爆発。

鉢屋

「自爆だと！しかし火力が足りないようだな！」

あずみ

「抜ける時間さえあればいいんだよ！」

鉢屋

「なに！」

あずみ

「逝っちまいなー!!」

今度はあずみが鉢屋の後ろを取りそのまま掴み地面に叩き落とす。

鉢屋

「ぬぐあ!!」

あずみ

「あの程度で離すようじゃな…詰めがあまりいぜ。お騒がせしました英雄様」

英雄

「うむ、大儀であった。その水着なかなか似合っているぞ」

あずみ

「きゃるーん！あずみは幸せでございませう！英雄様ー！！」

鉢屋 吉介 撃沈

S i d e o u t

S i d e 不死川 心

此方は今本陣で優雅に戦場を見ておる。そしてここに向かってくる山猿の集団がある。

宇喜多 秀美

「敵本陣に一番乗りやー！！これで報奨金アップやー！！」

英雄

「フハハ！！我の前に突撃してくるとはな」

宇喜多

「大将に一騎打ち申し込んだるわ！」

英雄

「たわけが！誰が貴様の相手なんぞするか！」

宇喜多

「だったら全員ぶちのめしたるわ！」

不死川

「ほっほ、退屈しておったところじゃ。此方が遊んでやるっ」

英雄

「不死川か。好きにするがいい」

不死川

「しかしでかい的じゃのお」

宇喜多

「あんたは小さいなりやなあ。うちのハンマーでぺちゃんこや。行くでー！」

不死川

「ほっほ、体格差があるほど有利という考えを此方が修正してやるっ」

突っ込んできた宇喜多のハンマー回避し、襟を掴み体を滑り込ませ一本背負い。

宇喜多

「だあ!!」

そのまま宇喜多は気絶した。

不死川

「柔よく剛を制す。柔術の基本じゃ。敵将不死川が討ち取ったー  
!!」

英雄

「ああいった手合いは投げに弱い…相性がよかったな」

あずみ

「運も実力のうちですね」

不死川

「素直に褒めることができないのかおぬしらはー!!」

宇喜多 秀美 撃沈

Side out

Side 葵 冬馬

私と大和君は見晴らしのいい場所で戦場を見下ろしている。  
そして背後に誰かが現れた。

冬馬

「…まさかいきなり後ろからは」

長宗我部

「ぬははは！海を泳いで回り込んでやったわ！」

冬馬

「備えをされていてよかったです」

長宗我部

「ほお、思ったより敵が多いな。オイルレスリングを見せてやる」

長宗我部はオイルの入った壺を取り出しオイルを浴びる。

冬馬

「オイルレスラーがいるという情報は間違っていないでしたね。これも役にたちそうです」

私はライターに火をつけ相手に投げる。火が当たり勢いよく燃え上がる。

長宗我部

「ぬぐああああ!!ノリ悪すぎだろ!!」

しかし燃えながらもこちらに向かってくる。

冬馬

「ちすが「じぶんとすね」

小雪

「人間て燃えると綺麗だねー」

冬馬

「ユキ海側に落としてくださいね」

小雪

「はいはい。いっくよー！」

ユキは長宗我部に向かって走り出す。相手が掴もうとしたのを回避し、真上に蹴り上げる。ユキも跳躍し顔面を蹴り海に叩き落とす。

小雪

「たっだいまー！」

冬馬

「ありがとうユキ（なでなで）」

小雪

「わっはーいもっとー」

大和

「容赦ないな燃やすなんて」

冬馬

「オイルまみれで絡む男二人…見たいですか？」

大和

「じめんなさい」

そのとき大和君の携帯が鳴った。

大和

「電話？もしもし？」

クリス

『大和か？敵の本陣なんだが大将がいないんだ』

大和

「状況不利と見て隠れたかな。了解そのあたりで暴れてて」

クリス

『了解した（プッ）』

大和

「さて、そろそろ俺も動くかな。今回あんまり役に立ててないし」

冬馬

「そこまで気負うことはないんですよ」

大和

「みんな頑張ってるんだ。俺も頑張らないと。じゃあ行って来る」

そう言って大和君は走り去っていった。

やはり彼はいい。いつか肌を重ねたいものです。

このとき大和にゾワツとした悪寒がはしたとかなんとか。

Side out

Side 直江 大和

なんだったださっきの悪寒は？

そんな考えは思考の隅に追いやり、おそらく敵の大将が隠れているだろう場所に向かっている。本陣の位置から考えてたぶん…いた！  
犬笛を吹きつつ走り寄る。

石田 三郎

「この場所が分かるのは、ずるく保身に長けているやつだろう。俺はほかにもいろいろ備えてはいるが」

大和

「ずるく保身に長けているね…耳が痛いね。けどま、おかげで見つけられたし結果オーライかな」

島 右近

「なに…」

石田

「ほう、ここがわかるとはな。名をなんといいっ…」

大和

「直江 大和。下見に来たときに隠れるならここになって」

石田

「そうか、しかし一人で来るとはな。阿呆だな」

島

「それがしは十勇士が一人島 右近！覚悟！」

大和

「おいOBじゃないのか！」

島

「それがしは同じ年だ」

大和

「それは失礼した」

そのとき一人の乱入者が現れた。

一子

「おーっと！あんたの相手はあたしよ！」

ワン子だ！ワン子は犬笛で呼ぶと吹いた人のもとに駆けつけるのだ。

島

「ぬっ！援軍か！」

大和

「さあ大将一対一だ！」

俺は拳を構える。

石田

「その構えは…ってド素人じゃないか!!」

大和

「やっぱばれるか」

石田

「まあいい、西方十勇士が大将！石田 三郎！参る！」

石田は刀を構え走りだそうとしたところに一本の矢があたる。

石田

「ぬぐー！弓兵だと！」

京

「愛しの大和は私が守る」

大和

「ごめん人数間違えちゃった」

いいながら石田を蹴る。

石田

「がっ……ここまで虚仮にされるとはな……見せてやる【光龍覚醒】!!」

石田が光をまといあたりが照らされる。光が収束すると、金髪になりすさまじい威圧を放っていた。

大和

「なにそれ!どこのスーパーサ ヤ人!!」

石田

「俺に奥義を出させるとはな……寿命が短くなるデメリットはあるがこの状態で俺に勝てるのは川神百代くらいだ!!」

刹那京の矢が石田に向かう。

石田

「同じ手を食らうつか!!」

その矢をなんなく刀で弾く。

京

「まずいすごく強くなってる!」

大和

「くそ！計算外だ！避けれるか！」

刹那何かがちちらに近づいて来る。

その人物は工場の壁を垂直に駆け下りていた。

石田

「!?なにやつ!!」

義経

「源 義経！推参！」

義経と名乗った少女は勢いそのままに、すさまじい速さで石田に接近し一刀のもとに切り伏せた。

石田

「ぐっ！……がは！……その名前。俺や島のように武士の血を引くものか……」

義経

「ちがう。義経は武士道プランにより生まれたもの……受け継ぐのではなくそのものだ」

石田

「……?しかし理不尽なまでの強さ……」

言って石田は気絶した。

大和

「(そうとう強かったはずだ…それを瞬殺かよ)」

義経

「怪我はないか？」

大和

「ああ…大丈夫だ」

義経

「そうか。よかった。義経は同じ学び舎の友として助太刀した」

大和

「そうか、ありがとう。でも君の事知らないんだけど？」

義経

「無理もない義経は「そこまでだ」…龍兄！」

龍一

「まったく今日は見学だけだった話だっただろ？」

義経

「うっ…倒されると思ったらしい…義経は反省する」

龍一

「いいさ。怒っているわけではないが釘は刺しとかないとな。弁慶には謝っておけよ」

義経

「うん、分かった。龍兄はどうしてここに？」

龍一

「…義経、ここからどうやって帰るんだ？」

義経

「それは…」

龍一

「それは？」

義経

「……わ」

龍一

「わ？」

義経

「……わからない」

龍一

「…だろうな。だからお目付け役の俺が迎えに来たんだ」

義経

「そっだったのか…ごめん龍兄、迷惑かけて」

龍一

「気にするな。可愛い妹分を守るのは兄の役目だからな」

義経

「カワッ／＼／」

後から来た男がこちらに顔を向ける。

龍一

「すまないな会話の邪魔をしてしまつて」

大和

「いえ、かまいませんけどあなたたちは？」

龍一

「すまないが詳しいことは今は言えないんだ。…そうだな、明日の朝テレビを見れば分かる。とだけ言っておこう」

大和

「テレビ…ですか？」

龍一

「ああ。じゃあそろそろ行くよ。そっちの彼女も終わりそうだしな」

大和

「え？」

ワン子のほつを見ると川神流の技で島を倒すところだった。

一子

「川神流【水穿ち】!!」

島

「ぬ!!ぶはああ!!」

ワン子の技が決まり島は気絶した。

大和

「やったなワン子!!」

一子

「そつちも総大将を倒したし大和勝ち鬨をあげましょ」

大和

「そつだな…あなた達もどうです?」

しかし、後ろを見ても誰もいなかった。

一子

「?どうしたの?」

大和

「いや、なんでもない。それより勝ち鬨だ!!」

一子

「ええ!!敵将全て討ち取った!!」

大和

「勝ち鬨をあげるーー!!」

川神学園二年生

「「えいえいおーー!!! えいえいおーー!!!」

大和

「なあ九鬼英雄？男女の二人組みが乱入してきたんだが…武士道プランとかいってたっけ、なんか知らないか？」

英雄

「ほう、随分早い投入だな」

大和

「だから武士道プランで何だよ？」

英雄

「明日のテレビをみるのがてっとり早いしばし待て」

大和

「…しかたないか」

「」つして東西交流戦は川神学園の勝利で終わった。

side out

## 第参話 編入

6月8日 AM 7:30 島津寮

S i d e 直江 大和

東西交流戦も終わり昨日の疲れを残しながらも、ニュースを見ながらみんな朝食をとっていた。

大和

「しかし武道プランね」

忠勝

「新聞も一面だ」

由紀江

「どこの局でもその話題で持ちきりですよ」

キャップ

「随分と熱いプランだよな。退屈しないにもほどがあるぜ！」

大和

「川神学園に来るらしいからね」

クリス

「それでは共に学べるな」

京

「みんなそろそろ時間」

大和

「んじゃ行くか」

俺たちは寮を出て学園に向かった。

登校中

寮のみんなと登校。

途中合流したガクトとモロと姉さんもいる。

由紀江

「ガクトさん、なにをしているんですか？」

ガクト

「ホテル香水をつけてんだ。なんでも異性をクラクラにさせるらしい」

京

「相変わらずぶれないね、ガクトは」

クリス

「…だが正直好きではない匂いだ」

百代

「」

大和

「姉さんは機嫌いいね」

百代

「まあな！」

モロ

「格好のバトル相手が来たからね」

百代

「ああ！今から楽しみだ！」

大和

「はあ…どうなることやら」

### 川神学園

朝のSHRは全校集会となった。

鉄心

「みなも今朝の騒ぎで知っているじゃろう、武士道プラン。この学園に7人転入生が入ることになったぞい」

ザワッ

小笠原 千花

「プランって3人じゃなかった？」

鉄心

「武士道プランについては新聞などの説明を見ること。重要なのは友人が増えること。仲良くな。競い相手としても最高じゃ、何せ英雄じゃからのう」

マルギッテ

「（確かに先人から学ぶとあっては究極のもの…それは自身のレベル

アップになる)」

鉄心

「プランの申し子は4人、3名は関係者じゃ。まずは3 Sに2人入るぞい」

百代

「なんだSクラスか、私たちのクラスには来ないのか」

京極 彦一

「ほう、私のクラスか」

鉄心

「それでは葉桜 清楚挨拶せい」

鉄心の声とともに、一人の女性が前に出た。そしてゆっくりと壇上へ上がっていく。

その立ち振る舞いはとても綺麗で見ているものを魅了した。

清楚

「こんにちは。はじめまして。葉桜 清楚です。みなさんとお会いするのを楽しみにしていました、これからよろしくお願いします」

挨拶が終わると歓声が沸き起こった。…特に男子から。

ガクト

「やっべー、名前からして清楚すぎるんですけどー!」

モロ

「文学少女って感じだね。いい感じ!」

ヨンパチ

スーパーレア

「宴にグッズ出したら間違いなくSR」

百代

「なんだよかわいいのにSクラスとか…Fに来てくれー」

ヨンパチ

「質問があるんですけどー！」

鉄心

「なんじゃ、全校生徒の前で…言うてみい」

大和

「(学長はプランの申し子は4人と言った…おそらく彼女が4人目…誰のクローンなんだ?)」

ヨンパチ

「ぜひ3サイズと彼氏の有無を!!」

小島 梅

「この俗物が!みんな私の教え子がすまん」

そういつて梅先生は鞭を構え…

梅

「肅清!!」

ヨンパチ

「アオウウウー!!」

鉄心

「アホかい…まあ、3サイズは気になるが」

清楚

「えっ？／＼／」

百代

「おいジジイ死ね」

清楚

「…」ホソ、みなさんのご想像にお任せします」

百代

「可愛いー!!」

冬馬

「ああいう恥じらいは素敵ですね」

井上

「やれやれ、若もはしゃいでいることだ…」

小雪

「テンション低いねー」

井上

「三年ってさ、言ったら女として腐ってるじゃん。女は小学生までだよね、変な意味じゃなく。それ以上はなんていうか…さよつならだよね」

小雪

「腐ってるのは準の頭だよー この不毛地帯」

井上

「ひどいわー!」

ルー・イー

「総代、真面目にやってください」

鉄心

「おお、すまんすまん。ついとう。葉桜 清楚という英雄の名を聞いたことが無いじゃろっ」

大和

「確かに聞いたことが無いな」

一子

「あつ、いないのね。正直ビクビクだったわ」

大和

「実はいます…常識だぞ。知らないのかワン子」

一子

「ひいっ」

京

「サドい冗談だよ」

一子

「よかったあ、お仕置きされるかと思ったわ」

清楚

「これについては私から説明します。実は私は他の三人とは違って誰

のクローンか知れされていないんです。葉桜清楚という名前はイメージから付けた名です」

キャップ

「そうなのか。自分が誰だかわからねーのか」

清楚

「25歳になったら教えてもらえるそうです。それまでは学問に打ち込みなさいと言われています」

冬馬

「それで英雄、誰のクローンなんです？」

英雄

「我が友冬馬よ、清楚に関しては我も知らされてはおらんのだ」

井上

「お？人類の宝である九鬼英雄が知らなくていいのか？」

英雄

「フハハ、知らずとも葉桜清楚は葉桜清楚。それだけで十分よ」

井上

「そいつぁごもつとも」

クリス

「しかし存在感のある人物だな、この人数のなかでもよく声が通る」

大和

「正体が謎だから報道されなかったのか…」

鉄心

「みなテンションが上がってきたようじゃな、続いて同じく3 Sに入る黄眞 龍一じゃ。挨拶せい」

また一人壇上が上がっていく。その人物の立ち振る舞いはただ歩いているだけなのに優雅で、どこか気品を漂わせるものだった。

龍一

「ご紹介に預かりました、黄眞 龍一です。私はここにいる清楚、そして後に紹介されるプランのメンバーをサポートするため九鬼財閥より派遣され、この学園に編入しました。みなさんと共にこの学園で学べることを誇りに思います。どうぞよろしくお願いします」

そう言って彼は一礼した。すると…

川神学園生徒

「キャアアアアア!!」

歓声。それはもう、ものすごい女子からの。

一年生A

「カッ!イイ!!」

一年生B

「この学校に来てよかった!!」

三年C

「Sクラスでよかった!!」

冬馬

「おやおや、ものすごい歓声ですね」

井上

「だなあ…しかし龍さんサプライズってこのことだったのか」

小雪

「あつ龍兄だ〜 やったね、トーマ、準」

冬馬

「ええ。私もうれしいですよユキ」

英雄

「む？なんだ冬馬よ、知っていたのか？」

冬馬

「ええ、子供の頃ユキのことでお世話になりました。それから今まで連絡を取っていたのですよ」

英雄

「そうであつたか。これからもよろしく頼むぞ」

冬馬

「もちろんです」

大和

「すごい歓声だな」

ガクト

「イケメンは死ね!!」

モロ

「ガクト目から血涙流すのはよしなよ。みんな引いてるから」

大和

「まあ確かにかっこいいな。ん？どうしたんだ京？」

京

「…大和、彼恐らくだけどもものすごく強いよ」

クリス

「…ああ、正直勝てるイメージがまったく沸かない」

一子

「…そうね、お姉様クラスでようやくまともな勝負になるレベルね」

大和

「なっ!!マジか!!…姉さんクラスってどんだけだよ」

百代

「……………」

矢場 弓子

「…よ…もよ…百代！」

百代

「っ！」

弓子

「百代、どうしたで候？」

百代

「…いやなんでもない(…隠してはいるがあいつは強い。歩き方に加えて体の芯がまったくぶれていない。…恐らく私と同等)」

鉄心

「(モモのやつ気づきおったか…わしでもギリギリ察知できるかどうかというもの。恐らくモモの戦闘の勘が察知しおったか…)(それでは二年に入る3人を紹介じゃ、全員が2 Sとなる。まず、源 義経 武蔵坊 弁慶両方女性じゃ」

ガクト

「うげえ、マジで弁慶女バージョンかよ」

ヨンパチ

「誰が得すんだよ。ノーサンキューもいいところだろ」

鉄心

「では両者登場」

一人は交流戦で見た顔。もう一人は…

弁慶

「どうも、弁慶らしいです。…よろしく」

ガクト

「結婚してくれー！！」

ヨンパチ

「死に様を知ったときから愛してましたー！！」

大和

「おいおい」

千花

「あんたらサイテー」

羽黒

「しっかし清楚に続き今度はお色気、マジ死にてえ系」

千花

「ホントにね、自信なくしちゃうよ」

義経

「…」「ホン」

龍一

「義経落ち着いて行け」

清楚

「心配しなくても大丈夫だよ」

弁慶

「ん、主はやればできる」

義経

「よし…義経は源 義経だ。性別は気にしないでくれ。武士道プランに携わるものとして恥じることはない振る舞いをしてい…んと思っ。よろしく頼む」

男子生徒

「うおおおー…！！」「ちら」そよろしくだぜ！！」

男子の怒号が大地を揺らした。

義経

「挨拶できたぞ龍兄！」

龍一

「…義経、まだマイク入ってる」

義経

「はわっ！」

龍一

「そんなに緊張するな」

義経

「うっ、反省する」

鉄心

「女子諸君次は武士道プラン唯一の男子じゃ。那須 与一でませい」

大和

「与一といえば、京おそらく弓使いだぞ」

京

「女性じゃないならキャラ被りもあり」

しかし待てども一向に現れない。

忠勝

「ああん？来ねえじゃねえか」

甘粕 真与

「与一さん怖がらなくていいんですよー」

井上

「優しいんだよな、委員長」

あずみ

「いちいち反応すんなや」

義経

「あわわ…与一は何をしているんだ」

龍一

「失礼。申し訳ありませんが与一を連れてまいりますので少々お待ちいただけますか？」

宇佐美 巨人

「しょうがないな。学長こう言ってますし行かせては？」

鉄心

「んむ。許可する」

龍一

「ありがとうございます(シュン)」

壇上にいた龍一はその場から消えた。

大和

「(っ!!消えた!!京が言ってたのは嘘じゃなさそうだな)」

Side out

Side 黄真 龍一

学園長に許可を貰い俺はすぐさま屋上に跳んだ。与一の気配は掴んでいたからだ。

与一

「ハッ！くだらねえ。人間は死ぬまで一人なんだよ」

龍一

「なにをしている」

与一の背後から話しかける。

与一

「っ!!…兄貴」

龍一

「なにをしていると聞いている」

与一

「…こんなの無駄だろ。卒業するまでの馴れ合いなんて俺はごめんだね」

龍一

「…その馴れ合いの中にこそ大切なものがあると俺は思う」

与一

「なんだよそれは？」

龍一

「その前に確認だ。…与一俺とお前の付き合いは馴れ合いか？」

与一

「そんなんじゃないねえ!!」

龍一

「…そうだな。俺もお前のことは大切に思ってる。大事な弟分だ。…  
与一お前のことは弁慶から聞いた」

与一

「!!」

龍一

「心無い言葉でお前が傷ついた。…そのときに傍にいてやれなくてす  
まなかったな」

与一

「兄貴のせいじゃねえよ! あれはあいつらが…」

龍一

「そうだな。だがそのせいでお前は怯えてる」

与一

「…俺が怯えてる?」

龍一

「そう。…怖いんだろ? 自分が確かにここにいるのに『自分がいてい  
いのか』否定されるんじゃないか』といったような」

与一

「……………」

龍一

「そして自分を精神的に守るために二ヒルを気取り他者を拒絶する。

…与一そんな有象無象は捨て置け。お前を否定するやつらは俺が…俺達が潰してやる。悲しいときは一緒に泣いてやる。嬉しい時は一緒に喜んでやる」

与一

「…兄貴」

龍一

「お前の後ろには常に俺達がいる。だが、一步踏み出すかはお前しだいだ。踏み出したなら全力で支えてやる…だから安心しろ」

与一

「…兄貴言ってるで恥ずかしくないか？」

龍一

「お前の…お前達のためなら喜んでクサイ台詞を言つた。で、どうする？」

与一

「…行くよ」

龍一

「分かった。安心しろ俺がいる」

与一

「ああ…」

俺は与一を連れ壇上に跳んだ。

龍一

「お待ちせしました。ほら与一挨拶」

与一

「…ああ。那須 与一だ。よろしく」

まだきこちなさがあるが今はこれでいいだろう。これから硬さを抜いていけばいい。一人感慨にふけていると弁慶が視線を送ってきた。

弁慶

「(…)どつやって連れ出したの？」

龍一

「(…)与一があの子以来他者を拒絶しニヒルに振舞ってきたのは自分を守るためだ」

弁慶

「……………」

龍一

「(…)だから少し安心させてやったのさ。お前には俺が…俺達がいるってわ」

弁慶

「(…)言ってるで恥ずかしくない？」

龍一

「(…)それで与一が昔みたいになるなら安いものさ」

弁慶

「(…)ありがと」

龍一

「いや、与一も含めお前達には笑顔でいてほしいからな。ただの自己満足さ)」

弁慶

「それでもさ、ありがと)」

俺は苦笑しながら視線を外した。弁慶も安心したのか川神水を飲み始めた。っておい。

弁慶

「はー、問題が解決した後の川神水は格別だね」

義経

「こら弁慶！」

クリス

「ひょうたんは気になっていたが弁慶が酒飲んでるぞー！」

龍一

「まったく、我慢できないのか？」

弁慶

「申し訳ない。でも一回見せれば回りも納得するでしょ？」

龍一

「ま、確かに。あー勘違いしないでほしい。これは酒ではなく川神水だ」

クリス

「なんだそうか。ってそれで飲んでいいわけじゃないぞー！」

弁慶

「いやー、私はとある病気で飲んでいないと手が震えるんです」

クリス

「なんだそれなら仕方ないな」

モロ

「ちよっと！それってアルむぐ！」

ガクト

「空気よめモロ！いいんだよ美人は飲んでても」

武蔵 小杉

「でも特別待遇過ぎます」

鉄心

「それについては成績が4位以下なら退学でかまわんと念書を貰っておる。4位以下ならサヨナラじゃ」

不死川

「3位以内じゃと？Sクラスで随分となめたことしてくれるのう」

マルギッテ

「まったくです。引きずり落としてあげます」

井上

「確かに弁慶に勝ったって響きはカッコイイよな」

宇佐美

「(おっ、さっそく競争に火がついたか。後は仲良くしてくれれば万々

歳だ。頼むからおじさんの仕事増やさないでくれよ…)」

義経

「不快感を与えたかもしれないが義経は仲良くやっていきたい。よろしく頼む」

義経は深々と頭を下げ、弁慶はシュタツと手を上げ、与一は適当にお辞儀した。

鉄心

「さて次はプランの関係者じゃ。両名とも1 Sクラスじゃ」

さて紋の登場か。俺も準備しますか。さりげなく気を高め、あるモノを召喚する。それを紋のもとへ向かわせる。もちろん周りには見えないように。

確認のため川神鉄心と川神百代をちらりと見るが気づいたのは学園長だけで百代は気づいていない。学園長は俺を見て目を見開いている。

龍一

「(さすがは武神。あれに気づくか…しかしその孫娘のほうは気づかなかった。これは期待するほどではなさそつだ)」

鉄心

「(あやつとんでもないモノを呼び出しおった!!…モモは気づいておらぬ。こやつ何者じゃ?)」

学園長が何か考え始めたが恐らく俺が何者かということだろう。正体を教える気はないがこころは少し安心させてあげよう。

龍一

「大丈夫ですよ。ただのパフォーマンスです」

と、学園長だけに聞こえるように話しかけた。

鉄心

「!!…本当じゃろうな？」

龍一

「もちろんです。ここであなたやあなたの孫娘さんと闘うつもりはありません。それに孫娘さんの方は九鬼がきちんとした場を提供するそうです」

鉄心

「そうか…しかしのう、おぬし何者じゃ？」

龍一

「フフ…私は4人のサポート役ですよ」

鉄心

「…はあ、まったく大騒ぎになるぞい」

龍一

「大丈夫ですよ。九鬼のすることです。『ああ、またか』みたいな感じになりますよ」

鉄心

「そつだといいがのう」

龍一

「言い訳も考えてあります。あんまり悩むと早死にしますよ？」

鉄心

「おおきなお世話じゃい」

龍一

「それはそれは」

学園長から視線を外しそろそろやってくる人物を思い浮かべる。

由紀江

「！お友達をゲットするチャンスですね松風！」

松風

「おっしやー！寂しい心をハンティングするぜー！」

小杉

「私のクラスね。使えそうなら部下にしようつと」

キャップ

「ん？なんか礼儀正しそつなのがでてきたぞ」

冬馬

「あれは…有名なウィー 交響楽団。なぜここに？」

彼らは準備ができると演奏を始めた。

京

「これって登場BGM？」

一子

「うつつ…なんだか嫌な予感がするわ」

そして一人の生徒が上空を見て叫ぶ。

生徒D

「おい…空からなんか来るぞ！」

そして校庭にいる人全員が上空を見上げる。そこには…

百代

「なっ…龍だと！」

そう…そこには空を滑空する一匹の龍の姿があった。

全長は5mはあり、鱗は黄金に輝き、目は赤く鋭い爪に牙。まさに想像上の龍の姿がそこにはあった。全員が固まる中誰かが気づいた。

生徒E

「おい！あれ人が乗ってるぞ！」

龍の頭の上には男女二組の姿があった。龍はこちらにゆっくりと近づき校庭に降りてきた。そして龍に乗っていた二人の人物が壇上に下りた。龍は二人を下ろすと俺に念話で話しかけてきた。

黄龍

「(役目は果たした。我は戻るぞ)」

龍一

「(ああ。ありがとう、美麗)」

美麗

「(なに、主の頼みだ。無下にはせんよ)」

そういつと美麗は上空に舞い、ひときは強い光を放つとその場から

消え去った。

そして壇上では…

紋白

「我、顕現である！」

英雄

「フハハ、何を隠そう私の妹である！」

不死川

「わかつとるわー！それ以外になにがあると云うんじゃ！というか龍はスルーか！」

マルギツテ

「九鬼が二人…カオスすぎる」

井上

「見た瞬間に心が震えた！…圧倒的カリスマ！」

不死川

「まあお主はそうじゃろつな」

井上

「自分が恋に落ちる瞬間を認識してしまった」

不死川

「というか龍はスルーなのか？」

井上

「まあ九鬼のすることだし？気にしても仕方なくね？」

そんな彼らの疑問をよそに壇上の人物は自己紹介を始めた。

紋白

「我の名は九鬼 紋白。紋様と呼ぶがいい。我は飛び級することになったな。武士道プランの受け皿である川神学園を進学先を選んだのだ。そのほうが護衛も分散せんしな。っと先の龍の説明をせねばな。細かい説明は省くがあれは単なる映像だ。我は退屈を良しとせぬ。共にこの学び舎で楽しく過ごそうではないか！フハハハー!!」

大和田 伊予

「すっごい強烈な人が来たね」

由紀江

「寂しいという概念が存在するのでしょうか？」

松風

「というか会話が成立するのか怪しいんだぜ」

百代

「おいジジイもう一人はどこだ？」

鉄心

「さっきから紋ちゃんの隣にいるじゃろっ」

百代

「やっぱりそんなオチか」

紋白

「そうだな。ヒュームよ挨拶せい」

ヒューム

「新しく1 S組に入るヒューム・ヘルシングです。みなさんよろしく」

百代

「そんなふけた学生はいない」

鉄心

「ヒュームは特別枠じゃ。紋ちゃんの護衛じゃな」

百代

「あの人がヒューム・ヘルシングか…」

弓子

「強いで候？」

百代

「強いなんてもんじゃないぞ。九鬼家従者部隊零番だ。だが想像しているよりは強くは…お年かな」

そのときその会話を聞いていたヒュームは百代の後ろを取るため移動した。速すぎるため壇上から消えたように見えただろう。

龍一

「(お？ヒュームが百代のところに行った。俺も少し挨拶に行くか)」

そう考えた俺はヒュームの後ろを取った。ヒュームのところでは、ヒュームが百代に話しかけていた。

ヒューム

ストライカー

「ふむ、打撃屋としての筋力が足りないぞ…川神百代」

百代

「なっ!?!いつの間に後ろに!?!」

ヒューム

「ふん、大体わかった。お前もまだまだ赤子よ」

龍一

「そういつてやるなヒューム」

ヒューム

「…ふん、お前か」

百代

「私が気づかなかっただど!?!しかもヒュームさんの後ろまでとって!?!」

おお、なにやら驚いているな。しかし彼女が川神百代か…近くで見ても正直思っているほどではなれそうだな。

ヒューム

「なにやら驚いているがこいつは俺より強いぞ」

百代

「なに!?!」

龍一

「よせヒューム。まだその時じゃない」

ヒューム

「…そうだったな。戻るぞ」

龍一

「ああ」

俺達はすぐに壇上に戻った。

弓子

「…消えた？」

百代

「(何者なんだあいつは…フフ、ゾクゾクするじゃないか)」

壇上にはクラウドディオがいた。

クラウドディオ

「私は九鬼家従者部隊序列3番、クラウドディオ・ネエロと申します。少し補足させていただけます。私ども九鬼家従者部隊は紋様の護衛と武士道プラン成功のためちよくちよく学園に立ち寄りますがどうか仲良くしていただきたい」

英雄

「さすが紋。堂々としたものではないか」

クラウドディオの補足説明が終わりこの場は解散となった。

これからいつもとは違う一日が始まる。

さてこれからどうなるやぶ。

S i d e o u t

## 第肆話 編入初日

3 S

Side 黄真 龍一

3 Sの教室では拍手喝采が起こっていた。原因はもちろん俺達……というか、清楚を見るクラスの男達のものだ。

女子の方は何やらこちらを見て呆けている。

龍一

「(……ここまで個性が強い学園はそうないだろう)」

と、素直な感想を胸中で呟いた。隣では清楚が改めて挨拶をしている。

清楚

「改めまして、葉桜 清楚です。短い間ですがよろしくお願ひします」

ペコりと一礼して微笑む。その様にクラスは…

3 S生徒A

「いやあ、受験で身も心もボロボロなときに清涼剤だ」

3 S生徒B

「この学園の子は我が強いのが多いから清楚な君は大歓迎だよ」

3 S生徒C

「文学少女バンザイ！」

周りが騒がしくなる中、着物に身を包んだ一人の男が声をかける。

京極

「京極 彦一だ。君の生い立ちは朝礼で聞いた。正体は誰であろうと君は君…私達は気にしない。気にしすぎて自意識過剰にならないことだ」

清楚

「はい。そこは理解しています」

京極

「そうか。これからよろしく頼む」

清楚

「いちからこそ」

清楚は無事に自己紹介を終えクラスも歓迎しているようだ。この分なら案外早くに馴染んでいくだろう。

さて、次は俺の番か。

龍一

「「こちらも改めて、黄真 龍一だ。話し方が変わっているがこちらが素だ。よろしく頼む」

ぺこりと一礼。

3 S 女生徒 A

「かっこいいなあ」

3 S 女生徒 B

「新たなイケメン…これって逆ハーレム!？」

3 S 女生徒C

「今度一緒に写真撮ってもらおう!」

俺の方も受け入れて貰えた様だ。

当面の問題は『武神』川神百代に対しての対応だな。朝礼の時ヒュームの後ろを取ったせいか、かろつじて氣は抑えていたが好戦的な目をこちらに向けていた。

龍一

「まあ九鬼が機会を用意すると言っているしそれをあてにさせてもらつか」

そこで思考を中断し、担任に言われた窓側の一番後ろの席へと向かう。

清楚は右隣だ。

担任の連絡事項を聞きながらHRは過ぎていった。

放課後

本日の授業も終わり俺は清楚に声をかけた。

龍一

「清楚、俺は義経たちの様子を見てくるがどうする?」

清楚

「あ、私も行くよ。その後でみんなで帰ろう」

龍一

「そうするか。と、その前に一年のクラスに寄りたいたいんだが構わないか？」

清楚

「うん、いいよ」

龍一

「じゃあ行くか」

俺と清楚は席を立ち、教室を後にした。

なぜ一年のクラスに行くかというと、朝礼のときに見知った顔を見かけたからだ。

龍一

「(会つのは二年ぶりか……)」

考え事をしながら歩いていると、周りからの視線がこちらに集中していた。

「何で一年の階に？」とか「かつこいい」とか「清楚先輩可愛い」などだ。

まあ、このくらいはある程度予想していたので聞き流す。  
しかし清楚は若干機嫌悪く俺に話しかけてきた。

清楚

「モテるね？龍君」

龍一

「……なんだ？妬きもちか？」

清楚

「そんなんじゃないよ……」

やれやれ。清楚は案外独占欲が強いからな。今はモノ珍しいのとミィハーなものが半々、といったところだろう。

しかしこのままでも不味いのでフォローしておくか。

龍一

「安心しろ清楚」

清楚

「え？」

龍一

「お前達のほうが、俺はいい」

清楚

「／／／」

清楚は頬を赤くした。これで一先ず大丈夫だろう。フォローというより誤魔化した感が強い気がするが……

そうこうしているうちに1 Cへと着いた。俺は生徒の一人に声をかけ、目的の人物を呼び出してもらった。

龍一

「ちよつといいか？」

1 C 女生徒

「え？」

龍一

「ここに黛 由紀江という人はいるか？いたら呼んでほしいんだが」

1 C 女生徒

「は、はい／＼／」

女生徒は顔を赤くしながら由紀江を呼びにいった。

向かう先を見ると由紀江がこちらに気づいた。

俺は「よう」と手を上げながら声をかけ、由紀江は小走りで駆け寄って来た。

龍一

「久しぶりだな、由紀江」

由紀江

「は、はい！お久しぶりです！龍一さん！」

龍一

「……その様子だとあれから変わりにないみたいだな。いろんな意味で」

由紀江

「あつっ」

松風

「元気を出すんだまゆっち！まゆっちにはオラがついてるぜ！」

龍一

「松風も相変わらずだな」

松風

「オッス龍さん！まゆっちあるところにオラありだぜ」

龍一

「そうだったな」

俺は松風の言葉にクスリと笑う。二年ぶりに会う彼女は、以前会ったときのようにオドオドしていた。しかし硬さはとれていて、自然な感じだ。これを自然と言っているのかは微妙なところだが……

清楚

「龍君そろそろ紹介してくれない？」

龍一

「ん？ああ、そうだな。由紀江、知っているとは思うが彼女は葉桜 清楚だ。そして清楚、彼女は黛 由紀江。俺が旅をしていたときに出会った子だ。最後に喋ってる携帯ストラップが松風。由紀江曰く十九神が宿ったらしい」

清楚

「葉桜 清楚です。よろしくね、由紀江ちゃん、松風」

由紀江

「は、はい！よろしくお願います！」

そういつて由紀江は笑った。……いや、本人は笑ってるつもりなんだろう。しかしその顔はクワツといった効果音が似合いそうな迫力のあるもので、初見の人は十分引くレベルだ。

清楚

「ひっ……」

龍一

「……由紀江。その癖まだ直ってなかったのか？」

由紀江

「うう…やっぱり怖いですか？」

龍一

「ああ。まだまだ練習が必要だな」

松風

「おつふ…オラをちゃんと認識してくれるなんて…オラ今日から変な汗が出てきた」

龍一

「はあ…清楚、彼女は少し内気でな。松風というイレギュラーがいるが根は優しい子だ」

清楚

「あはは、ちょっとびっくりしたけどもう大丈夫だよ」

由紀江

「すみません、お見苦しいところを…」

清楚

「ふふ、大丈夫って言ったでしょ？仲良くしようね」

松風

「よっしゃー！まゆっちここで友達宣言だ！」

由紀江

「いら松風図々しいですよ」

清楚

「友達？それならもう私達は友達でしょ？」

由紀江

「へ？」

清楚

「違っの？」

由紀江

「いえいえいえいえ！すっごく嬉しいです！」

松風

「いえ〜い！まゆっち、友達ゲットだぜ！」

由紀江

「はい松風！今夜は宴ですね！」

由紀江は今にも飛び出しそうな勢いで喜んでいる。やっぱり清楚を連れて来て正解だったな。「こつこつ相手の本質を見る清楚なら、由紀江の友人になってくれるのでは？」と思ったからだ。「こつこつのは自分で何とかするものだが、まあ今回くらいはいいだろう。」

由紀江

「そついえば龍一さん達はどつしてこちらに？」

龍一

「義経達の様子を見に行くんだがその前に由紀江に会っておこうと思つてな。友人にくらい会つてもいいだろう？」

由紀江

「そつでしたか」

龍一

「せつかくだし由紀江もどつだ？」

由紀江

「え？いいんですか？」

龍一

「ああ。というか元々誘つつもりだったしな」

由紀江

「……では失礼ながら」

龍一

「じゃあ行くか」

俺達は1 Cを後にし、2 Sへと向かう。俺の後ろでは清楚と由紀江が話している。

「龍君はそつちにいた時はどうだった？」とか「葉桜先輩はどんな本を読むんですか？」とか話題が尽きることはなさそつだ。

しかし清楚……なぜ俺のことばかり聞く？いや、気にしたら負けだろつ。

俺はそれを頭の隅に追いやつた。そして2 Sに到着。

2 Sの前は過去の偉人を一目見ようと、人でごつた返していた。

龍一

「すごい人だな」

清楚

「私のことは分からないからね。義経ちゃん達は有名だし」

龍一

「それはそうだが…仕方ない、行くか」

俺は清楚と由紀江の手を引き前へと進む。教室の入り口にはマルギッテがいた。

龍一

「久しいな『獵犬』」

マルギッテ

「そうですね『霸王』」

龍一

「清楚、由紀江先に行っててくれ。俺は少し彼女と話してから行く。問題ないな？マルギッテ」

マルギッテ

「ふむ、彼女達なら問題ないでしょう。通行を許可します」

マルギッテは体で塞いでいた教室の入り口から移動し、道を譲る。

清楚

「…じゃあ先に行くね？」

由紀江

「お先に失礼します」

龍一

「ああ、すぐに行く」

先に二人に教室に入らせ、俺はマルギツテのほうを向く。

龍一

「相変わらず元気そうだな」

マルギツテ

「体調管理は万全です。体が資本ですから」

龍一

「そうだな、お前はそういう奴だったな」

「ここで少し俺とマルギツテのことを話そう。」

マルギツテと出会ったのは去年の夏。国内を回り終え、海外に出て十二カ国目のイスラエルでの紛争地帯での出会いだった。

マルギツテはドイツ軍に所属しており、イスラエルでのテロ組織の鎮圧に派遣された狩猟部隊の隊長だった。

なぜ俺がイスラエルにいたかという点、これは完全に偶然で紛争地帯にいたのも理由はあるが偶然だ。

現地の人に近づかないほうがいいと言われたが、俺は人の殺し合いというのを知る。言い方は悪いが、いい機会だと思えば紛争遅滞に足を運んだ。

そこではイスラエルの政府軍とテロ組織が戦っており、銃声の響く中荒れた大地の上にはすでに事切れている人。片足のないもの。片腕のないもの。爆死したのか、肉片や大量の血がそこらじゅうに広がっていた。

その日の戦闘はいったん両軍が引き終了した。俺は胸糞悪さを感じながら街の宿にもどろうと気持ちの整理をしていると何やら路地

が騒がしいので、気になったので向かうと、数人の男が女性に暴行しようとしているのを発見し、それを助けたところに騒ぎを聞きつけたドイツ軍が駆けつけ、事情説明として軍に連れて行かれた。

ここで初めてマルギッテに会うことになる。事情聴取が終わった後にマルギッテとの戦闘や俺のことについてなど、いろいろあったが、その後半年近く行動を共にしたという訳だ。

閑話休題。

龍一

「中将はどつだ？相変わらずの親馬鹿か？」

マルギッテ

「そついう言い方はやめなさい。それにお嬢様はドイツの至宝。それに我が子を可愛がるのは当然です」

龍一

「まったく、甘やかしすぎだろう……それそつとマルギッテ、お前いい奴は見つけたのか？」

マルギッテ

「話が一気に離れましたね……答えはNOです」

龍一

「まあ、お前の目に適つのは相当な男だろう。惚れられる男は得だな」

マルギッテ

「今のところあなた以上の男はいません……いや、今後現れるとは思いません／＼」

龍一

「頬を染めるな。けどまあ…ありがとう」

マルギツテと共に行動していたとき、なにやら惚れられていたみたいだった。それに気づいたのはドイツを出るときにマルギツテにキスされたときだ。……おかしい。いつフラグを立てた？

龍一

「ま、積もる話もあるが今はこれぐらいにしよう。入っても？」

マルギツテ

「……ええ、あなたの役割は朝礼で聞きました」

そう言うとマルギツテは道を譲り、俺はマルギツテの横を通り過ぎようとしたが、ふとイタズラ心が芽生え小声でマルギツテに言う。

龍一

「(今度デートでもしよう)」

マルギツテ

「なっ!?!／＼／」

驚愕するマルギツテをよそに教室に入る。

そこには義経達を囲み英雄や冬馬達、そして由紀江の姿があった。

英雄

「む？来たか龍一よ」

龍一

「ああ。どうだ義経達は？」

あずみ

「はい。最初は緊張していましたが今ではすっかり慣れたようです」

龍一

「そうか。それは何よりだ。ありがとう、あずみさん」

あずみ

「いえいえ、英雄様の従者として当然です」

英雄

「フハハ！あずみよ褒めて使わす」

あずみ

「ありがとうございます！！英雄様ー！！」

英雄達と話していると義経達がこちらに気づいた。

義経

「あっ！龍兄！」

弁慶

「お、清楚先輩から聞いてたけどちょっと遅いんじゃない？」

与一

「はあ、しんどい」

弁慶がぶつくそ言っているが、それを無視して近づく。

龍一

「様子を見に来たんだが無用な心配だったみたいだな」

義経

「ああ。義経達のことも受け入れてくれたし義経は嬉しい」

そう言った義経は満面の笑顔だ。

俺は義経の頭をゆっくりと撫でた。

義経

「あ／／／」

龍一

「ん。まだまだこれからだ。あんまり気を張りすぎるなよ」

義経

「……ん。わかった／／／」

龍一

「弁慶はどうだ？」

弁慶

「ん〜、特に問題なし」ゴクゴク」

弁慶は川神水を飲みながら答えた。

龍一

「学園の許可も貰ってるし、飲むなどとは言わないが授業中は飲むなよ」

弁慶

「その辺は心得てるよ」

龍一

「はあ…まったく」

ため息をついて、俺は与一の方へ顔を向ける。

龍一

「与一は大丈夫か？」

与一

「まあ、なんとかな。しかし視線がウザイ。客寄せパンダになった気分だ」

龍一

「なにせ偉人のクローンだからな。そんなに心配しなくてもそのうち収まるぞ」

与一

「それまでこの状況かよ……だりい」

心底嫌そうに与一は肩を落とした。

小雪

「やっぱり！僕のヒーロー！」

いいながら突っ込んできたのはユキだ。それを受け止めユキは顔をあげる。

龍一

「こらユキ、そんな勢いで突っ込んだら危ないだろ？」

小雪

「大丈夫だよ ちゃんとしてリュウ兄が受け止めてくれると思ったし」

龍一  
「やれやれ」

邪気のない笑顔に苦笑をこぼす。

冬馬

「お久しぶりですね龍一さん」

龍一

「冬馬か。元気だったか？」

冬馬

「医者の子供が病気になっては笑いものですからね」

龍一

「そんなことはないと思うが……まあ元気そうだなによりだ」

さて、冬馬がいるという事は準の奴もいると思うがどこだ？

井上

「龍さん久しぶりだな」

龍一

「……冬馬、誰だこいつは？」

冬馬

「準ですよ？」

井上

「若？なんで疑問系？」

龍一

「やっぱりか……準、どうしたんだその頭？その年で毛根が全滅したか？」

井上

「ちっがーう!!これはユキにやられたんスよ」

龍一

「まさか…ユキに手を出そうと…」

井上

「ちがうって。唐突に俺の頭を剃りだしたんだよ。ま、それ以来さっぱりして気に入ってんだけど」

龍一

「それなら仕方ないな。俺にもユキの行動は読めんからな」

小雪

「ん？何の話？」

龍一

「ん？なにユキは可愛いなって話だよ」

俺はユキの頭を撫でた。ユキは気持ちよさそうに目を細めている。

小雪

「ん」

冬馬

「ユキはべったりですね」

井上

「仕方ないんじゃない？龍さんに久しぶりに会ったっていうのもあるし、よく懐いてたしな」

そこに教室の入り口からこちらに向かってくる集団があった。

Side out

Side 直江 大和

俺達は2 Sに向かっていた。メンバーは俺、キャップ、ワン子、ガクト、モロ、京、クリスだ。なにせ偉人のクローン。おちかづきになつておいて損はないからな。

少し打算的な考えをしながら歩いていた。

一子

「義経たちはいるかしら？」

マルギッテ

「検問だ。ここは通れないと知りなさい」

ガクト

「揉める気はないぜ。挨拶して仲良くなりてーんだ」

マルギッテ

「お前達のような野次馬が多くて煩わしい事この上ない早々に立ち去りなさい」

大和

「なるほど、マルギッテさんは番犬代わりか」

クリス

「マルさん、ガクトの言う通り挨拶に来ただけなんだ」

マルギッテ

「お嬢様も来ていらっしやいましたか」

クリス

「マルさん、通してくれ」

マルギッテ

「……（彼なら何が起ったとしても対処できるだろう）わかりました。お通りください」

大和

「お役目ご苦労さまです」

俺達は2 Sに入った。

ワン子

「あ、いたわ」

クリス

「ああ、隙がないな」

ワン子

「ええ、間近で見るとすごく強いわ」

ワン子とクリスは武芸者としての力量が気になるんだろう。

キャップ

「お？まゆっちもいるじゃないか」

モロ

「珍しいね。まゆっちがいるなんて」

確かに。今頃は大和田さんと一緒に帰ってると思ってたんだが……  
すると義経達が気づいたようだ。

義経

「あっ」

大和

「やあ源さん。交流戦ではどうも」

義経はこちらに駆け寄って来る。

義経

「わざわざ挨拶に来てくれたのか、ありがとう。龍兄、清楚先輩、弁慶、  
与一達も来てくれ」

龍一

「ああ」

清楚

「はい」

弁慶

「はい」

「はい」

「かったりいからヤダ」

弁慶

「主の命に背くな」

与一

「いだだだだ!! 姉御耳を引っ張るな!!」

与一は弁慶に引きずられて来た。

義経

「源 義経だ。改めて、よろしくお願いする」

クリス

「クリステイアーネ・フリードリヒだ。クリスでいい。よろしく頼む」

あっちは握手していた。学友として、また強敵(とも)として。

大和

「直江 大和。よろしく弁慶さん」

京

「大和の妻椎名 京」

モロ

「おおっと、京が積極的に!」

京

「すすすす成長してるの。身も心も(弁慶は大和と話が合いそう…要  
注意なんだー!)」

龍一

「黄眞 龍一だ。交流戦以来だな大和、と言うより君の事は前から知っていたんだが」

大和

「え？なんでですか？」

龍一

「君の両親とロンドンで知り合ってたね。景清さん達がテロに巻き込まれたのを助けてから、しばらく護衛として雇われていたんだ」

大和

「そうなんですか!?!……親父の奴そんなこと一言も言っていなかったのに」

龍一

「子供を心配させるような連絡をあの二人がするはずないだろう」

大和

「そう言われればそうですね」

龍一

「しかし君は咲さん似だな。考え方は景清さん譲りみたいだが」

大和

「親を知っている人にはよく言われます」

龍一

「ふむ、気分を悪くしたならすまなかつたな」

大和

「いえ、気にしてませんよ」

龍一先輩は「助かる」と言って苦笑した。うわっ、なんだかその仕事だけで無駄にかっこいいな、と思ってしまった俺は悪くない。

他の面々も自己紹介は終わったようだ。与一だけは終始だるそうにしていたが…

その時

百代

「よーしつねーちゃん。たったかおー」

と、姉さんが入ってきた。

一子

「あ、お姉様」

百代

「お、妹に愉快的な仲間達も一緒か」

龍一・弁慶

「はあ……やっぱり来たか」

二人は盛大にため息をついた。心底面倒だと言わんばかりに。

クラウドディオ

「この場は私にお任せください」

どこからともなく執事が現れた。

弁慶

「…クラウド爺いつの間にも後ろに」

龍一

「なんだ気づいてなかったのか？」

弁慶

「…龍教えてくれてもいいんじゃないか？」

龍一

「気づいてるんだと思っていたんだがな……まあ、クラウなら仕方あるまい」

二人の会話の横ではクラウディオさんが姉さんの説得を行っている。

クラウディオ

「武神は義経様達に勝負を挑みたいとお見受けしました」

百代

「もうワクワクしすぎて先生に注意されたくらいですよ」

クラウディオ

「しかし今はお断りします」

百代

「そうですねか…って引っ込むような性分じゃないんですよ。戦わせてくださいよ。ウズウズしてるんです」

クラウディオ

「もちろん戦いから逃げている訳ではございません。悩みがありまして、学園外からの挑戦者達です。なにせ相手はあの源義経。外部からの挑戦者もかなりの数になるでしょう」

百代

「人気者ですからね。外の人間にまで気を回しては、キリがないのはわかりますが…」

クラウディオ

「そこでこういうシステムをとります。義経様達と戦いたいものは武神と一戦し、武神に認められた者のみが、義経様達と勝負することができる。お力を貸していただけますか？」

百代

「それはいい、OKです！戦いに不自由なさそうだ。でも義経ちゃん達ともきちんとたたかいたいな！」

クラウディオ

「もちろんでございます。きちんと舞台は用意しますゆえ、ご安心ください」

一子

「えーっと、つまり学園の人たちは勝負を挑んでいいのね？」

百代

「おーなんだワン子やるきか？」

一子

「うん！またとない機会だしね」

クリス

「それでは自分もぜひお願いしたいな！」

弁慶

「すでに申し込んでる人がいるので順番待ちだけどね」

一子

「あはは…みんな考えることは一緒ね。待つわ待つわ」

クリス

「それまでは腕を磨いておくか」

百代

「さて、義経ちゃん達はだめですけど、そのサポート役の彼ならいいですよね？」

姉さんの視線は龍一先輩を捕らえていた。

自然と俺達の間もそちらに向く。

先輩はため息をついていた。予想が的中した。そんな感じのため息だった。

Side out

Side 黄真 龍一

はあ……やっぱりこうなったか。予想していた事とはいえ、正直これからのことを考えると頭を抱えたくなる。

しかしどうするか……

龍一

「(ヒューム達には断れと言われてるが、百代の目を見るに目の前に極上の獲物がある…みたいな感じだ。ここは一つさらに甘味を与えモチベーションを上げて次までの繋ぎにしてみよう。我慢できるかは微妙だが……)」

龍一

「ああ、いいだろう」

クラウディオ

「龍一様！」

百代

「おお！そうか！戦ってくれるか！「ただし」……？」

龍一

「今回は手合わせだ。俺の本来の役割は彼女達のサポートだ。仕事に支障が出ては困る。真剣勝負をするつもりはないからその辺りは理解してくれ」

百代

「ん〜まあ仕方ないか。いいぞそれで」

あきらかに肩を落とす百代に俺は…

龍一

「ああ、安心しろ。真剣勝負の舞台は義経達と同様九鬼家が用意する  
そうだ」

すると、一目で分かるほど機嫌がよくなる。

百代

「そうかそうか！では早速グラウンドに行こう！」

龍一

「クラウ、学園長に連絡は？」

クラウドディオ

「すでに手配済みです」

龍一

「さすがだな　それとすまないなクラウド。お前達に断れと言われていたのに」

クラウドディオ

「構いませんよ。龍一様もお考えがあったのことでしょう。ならば私共はそれを支えるだけでございます」

龍一

「そうか。すまな……いや、ありがとうクラウド」

クラウドディオ

「では、参りましょうか」

龍一

「ああ」

俺達はグラウンドに移動を始めた。

ちて、武神はどねほどちら

Side out

to be continued

次回「手合わせ」

## 第五話 手合わせ

グラウンド

Side 黄真 龍一

俺達はグラウンドに移動した。ここにいるメンバーは、俺・義経・弁慶・与一・清楚・英雄・あずみ・冬馬・準・小雪・百代・大和・翔一・一子・ガクト・モロ・京・クリス・由紀江・マルギッテ・鉄心・ルー先生・クラウディオに、どこから聞きつけたのかヒューム・紋そして見物人の外野達といった感じだ。

紋はヒュームを連れこちらに向かって来た。ヒュームはじつと俺を睨みつけている。

紋白

「フハハ！龍よ、編入初日に武神と手合わせとはなかなかやるではないかー！」

龍一

「あのままだとしつこく言われそうだったからな。早々に手合わせという形に持っていけば……まあ、この後もしつこく誘われるだろうが『適度に手合わせする』という落としどころまで持っていけるからな」

紋白

「なるほどのう。龍もいろいろ大変だな」

龍一

「ありがとう紋。ほら、俺のことはいいから英雄のここに行きな」

紋白

「しむ、ではそいつをせてもらいつつよ」

紋白は足早に英雄のところに向かっていった。残ったのはヒューム・ヘルシング。

護衛はクラウに任せるようだ。

ヒューム

「……………どいつしつもりだ？」

龍一

「理由は二つある。俺の役目は義経達のサポート。ここで百代と戦って義経達に集まっている注目を学園内だけでも俺に向けようと思ったまでだ。編入初日にもかかわらず、勝負を挑まれてるからな」

ヒューム

「二つ目だろっ？お前の目的は」

龍一

「そう、これはただの情報収集だ」

ヒューム

「ならば俺は何も言わん。格の違いを見せてやれ」

龍一

「これはただの手合わせだヒューム」

ヒュームの発言にツッコミを入れながら、俺はグラウンドの中央へと進んだ。

Side out

S i d e 川神 百代

私は今最高に機嫌がいい。話題になっっている武士道プランの義経達とは戦えなかったが、代わりにそのすぐ傍にいる人物と戦える。名前を黄眞 龍一。

朝礼で私の後ろを取ったヒュームさんのさらに後ろを取った男だ。ヒュームさんの言葉が頭をよぎる

ヒューム

「じいつは俺より強いぞ」

あのヒュームさんをして言わせる人物。体が早く早くと攻め立てる。

大和

「姉さん大丈夫？体が震えてるけど」

百代

「なぐにただの武者奮いさ。気にするな」

大和

「それならいいけど」

一子

「大和、これは手合わせなんだからそんなに心配しなくても大丈夫よ。いざとなったらお爺ちゃんやルー師範代が止めてくれるし」

大和

「まあ、そうなんだけどね」

キャップ

「でもよくどれぐらい強いんだろ？ 龍先輩は」

京

「普通にモモ先輩とやりあえると思っよ」

クリス

「マルさんは何か知らないか？」

マルギッテ

「……龍一は一時期私の隊の狩猟部隊と共に行動していた時期があります」

クリス

「なっ!? 初耳だぞそれは」

マルギッテ

「なにぶん民間人の協力者という形でしたから。もちろん中將には包み隠さず報告していますが」

百代

「それで？ お前が認める奴なんだ。自分でも勝負してみたんだろ？」

マルギッテ

「確かに勝負はしましたが……」

クリス

「マルさん？」

マルギッテ

「いえ……なんでもありません。結果から言っと、私の負けでした」

クリス

「そうか。マルさんでもだめだったのか」

百代

「ふふふ……そうかそうか。俄然やる気が出てきた！」

モロ

「うわあ……もうこれ絶対途中で止まらないよね」

大和

「大丈夫だろう………たぶん」

モロ

「間が長いよ！全然安心できない！」

大和

「そういえば、まゆっちは前から知ってたんだよね？龍一先輩のこと」

由紀江

「は、はい。国内を回っている最中に北陸に足を運ばれてその時に友達になりました」

松風

「まゆっちのファーストフレンドだぜ！」

キャップ

「くっ、羨ましいぜ、俺も早く旅に出たいぜ！」

ガクト

「キャップは気づいたらいなくなってるんだろっが」

由紀江

「そ、それですすね、龍一さんは自分の鍛錬が終わった後は街に出たり私の家にある書物を読んでいたりしていました」

一子

「なんかホントに『これぞ旅！』って感じね」

由紀江

「私も一緒に街に遊びに行ったり、模擬戦したりといろいろお世話になりましたから」

百代

「まゆまゆ手合わせしたのか。その時はどうだったんだ？」

由紀江

「私も負けました。当時は今よりも弱かったとはいえ圧倒的でした。……それから二年、龍一さんがどれくらい強くなっているのか正直想像もつきません」

百代

「くくく……ああ、早く戦りたいな」

モロ

「ヤバイよ……なんか火に油どころかガソリンと二ト口放り込んだよ」

大和

「混ぜるな！危険！」

キャップ

「いや…もう手遅れだな」

ああ、早く早く。私の渴きを満たしてくれ！

黄真 龍一！！

Side out

Side 葵 冬馬

私達は英雄とその妹である紋白さんといいます。準はなにやら震えていますね。

それはそうと英雄に話を聞いてみますか。

冬馬

「英雄あなたはこの手合わせどう見ます？」

英雄

「ふむ、これは勝負ではない。手合わせだ。ゆえに龍一もそこそのところではめるであろうな」

冬馬

「では、仮に真剣勝負だった場合勝つのはどちらだと思えますか？」

英雄

「フハハ！それこそ愚問よ！勝つのは龍一だ！なにせあやつは姉上が現役を引退するまで一度も勝てなかった相手だからな！」

紋白

「うむ。我も龍が負けるとこなど想像できん」

井上

「紋様の意見に同意!!」

小雪

「龍兄が負けるわけないよ。だって僕のヒーローだもん!」

冬馬

「ふふ、そうですね。私達のヒーローですからね」

グラウンドには龍一さんとモモ先輩の二人が立っていた。

Side out

Side 葉桜 清楚

龍君も大変だよ。私達のサポートに百代ちゃんの相手までしないといけないだし。

百代ちゃんのことには聞いていた。私達が学園に行けば、十中八九勝負を吹っかけてくることは用意に想像できた。

義経

「なあ弁慶、龍兄は大丈夫だろうか?」

弁慶

「ん、大丈夫だと思うよ。手合わせなんだし、ほどほどのところでやめると思う」

与一

「兄貴もたいへんだよなあ、初日にこんなことになるなんて」

清楚

「仕方ないよ。私達はいやでも注目されるし」

弁慶

「けど主はよく見ていた方がいいと思うよ？いずれモモ先輩と戦うことになるんだし」

義経

「そうだな、龍兄なら大丈夫だよな。そうと決まれば百代先輩の動きをよく見ておかないとな」

そう言つと義経ちゃんは集中し、これから始まる戦いを見逃さないようにしている。弁慶ちゃんは変わらずに川神水を飲んでるし、与一君は適当な感じでグラウンドを見ている。

一人を除き、緊張感のなさに思わず苦笑した。

Side out

Side 川神 鉄心

モモの奴めさっそくこれかい。ただでさえ義経ちゃん達のことですりすりしとるといふのに…

しかしまあ今回は多めにみてやるかのう。

黄真 龍一

こやつは得たいが知れんからのう。全校集会の龍といい、ちょうどいい機会じゃわい。

鉄心

「ルーよ、どう見る？」

ルー

「今は氣を抑えているので一般人程度ですが、恐らく百代と同等ぐらいし力……」

鉄心

「ふむ、ルーよわしの意見はちと違う」

ルー

「では？」

鉄心

「恐らくわしと同等か……それ以上じゃ」

ルー

「まさか!？」

鉄心

「わしでもあやつの底は把握しきれとらん。何しろ氣の遮断が絶妙すぎるからなの」

ルー

「では、彼は何のため？」

鉄心

「ただの情報収集じゃろう。聞くときとは全然違うからなの」

グラウンドを見ればモモと龍一が立っていた。  
では始めるとするか。

鉄心

「両者ともに準備はよいか？」

百代

「ああー！」

龍一

「こちらも構わない」

鉄心

「うむ、では時間は15分。それでは…はじめいー！」

Side out

Side 黄真 龍一

鉄心

「はじめいー！」

学園長の声に反応し、百代は【縮地】でこちらに突っ込んでくる。

### 【縮地】

故事や伝記で、仙人や道士が使用したとされる特殊能力の一つで、短時間で長い距離を移動する術である。現在における縮地とは、瞬時に相手との間合いを詰めたり、相手の死角にに入り込む、武術における移動技術の一つである。名前は故事に由来する。

百代がこちらに向かって来るなか俺は棒立ちのままだった。

龍一

「まずは一撃もらって威力の確認だな……しかし遅いな」

百代は【縮地】でこちらに向かっているのだが、いかんせん遅く感じる。

周りからすればものすごい速さで、消えたように見えるだろうが

……

そんなことを考えていると、百代が腕を振りかぶっていた。

龍一

「ようやくか…やはり拳の速さも力も思っていた程ではないな」

実際はコンクリートが砕けるほどの速さと力なわけだが、彼が最後に全力を出した　　と言っても5割ほどだが　　のは旅に出る前のヒュームとの一戦であり、それからの三年で自分がどれだけ強くなったのかは比べる対象がないので本人は分かっておらず「前よりは多少強くなっただろう」程度の感覚しかない。

閑話休題。

俺は百代の拳を顔面に受け勢いよく吹っ飛んだ。

龍一

「やはりこの程度の威力……正直期待はずれだ。これなら上海で出会った『霞　拳一郎』の方が強い」

そのまま校舎の壁に激突した。

Side out

Side 川神 百代

私は正直がっかりした。回避どころか防御もせず……と言うか反応すらできずに私の拳をくらい校舎に激突した。

あれをくらってはもう立つこともできないだろう。吹っ飛んだとき地面で何回かバウンドしたため土煙が舞い、本人の確認はできないがその必要もないだろう。

百代

「ああ……またダメだったか」

そう内心呟いて、みんなのところに行こうと背を向け、歩き出したところに後ろから声が届いた。

龍一

「どこへ行く？まだ始まったばかりだぞ？」

振り向けばそこにはさっきと同じ場所に傷一つ、服の汚れすらなく立っている龍一の姿があった。

百代

「ははは！なんだ随分と期待を持たせてくれるじゃないか！」

龍一

「そっか……では期待に応えるとしよう」

そういつて奴は人差し指をクイッククイックと手招きのように折り曲げた。

その行動にカチンときた。なめられている。それを直感で感じた。瞬間、私の体からは気があふれ出る。それでも奴は表情を変えない。

百代

「上等だ!!」

私は全力の【縮地】で駆け寄り、拳を突き出した。さっきまでの速さについて来れなかった龍一だ。今回も決まると思った。

しかし……………

百代

「なん…だと?」

私の拳は止められていた。

たった一本の左手の人差し指で

Side out

Side 黄真 龍一

驚く暇があったらすぐに連続で攻撃するなり、距離をとるなりすることがあるだろう。なぜいつまでもぼけっとしてしている?一瞬の判断の遅れが自分の身に降りかかるといつの…待て?もしかや

……………

龍一

「百代、回復系の氣功　そうだな、例えば内養功や瞬間回復といったものは習得しているか？」

百代

「……答えると思っか？」

龍一

「いや、今ので確認は取れた。答えてもらわなくて結構だ」

百代

「その余裕の表情を崩してやる!!」

言っやいなや百代は拳を突き出した。

しかしそれはまたも指一本で止められた。

百代

「チッ!!」

龍一

「これではさっきのリプレイだ」

百代

「ならば重い一撃を与えるまでだ!!その指へし折ってやる川神流【無双正拳突き】!!」

俺はまたしても指一本で止めた。

龍一

「どうした？俺の指をへし折るんじゃないのか？」

百代

「まさか【無双正拳突き】まで止められるとは……」

龍一

「………来ないのならばこちらから行くぞ」

瞬間、百代が後方に跳ぶ……しかしあまいな百代。そんな距離のとり方じゃ中途半端すぎる。もっと距離をとるべきだったな。

龍一

「行くぞ」

百代

「くっ!!」

【縮地】で駆け寄り、百代の腹を左手で打ち抜き、後方に飛ばす。

百代

「がはっ!! (なんて重たい攻撃だ!!)」

龍一

「考え事をしている余裕があるのか？」

百代

「っ!!」

すぐさま百代の着地点に先回りし、後ろから殴りかかる。

今度は反応できたのか、それとも戦闘の勘かとっさに左腕を上げる。

だがな百代………

龍一

「防御の上からダメージを与えることもできるんだぞ？」

拳の形を、左手の人差し指だけ出す形にする。

そのまま百代の左手首に狙いを定める。

百代

「ぐぐっつっ!! (なんだ今のは!? 指で突かただけで手首の間接が外れた!! いや、狙ったのか!!)」

龍一

「拳の形にもいろいろある。常識に囚われないことだな」

話しながらも攻撃の手は緩めない。

龍一

「脇があまい」

百代の右のわき腹を左手で突く。

百代

「がっ!!」

龍一

「視野が狭い」

百代の後頭部を右足で蹴り抜く。

百代

「ぐあっ!!」

龍一

「注意力が散漫。氣のコントロールが悪い」

吹き飛んだ百代の前に先回りし、かかと落として叩き落とす。

……………俺は少し離れて様子を見る。

龍一

「(さて……………瞬間回復がある以上この攻防はあまり意味がない。まあ、今回は百代に満足してもらったことが目的である以上15分相手をすれば、後は周りが止めるだろう)」

百代に目をやると、ゆっくりと立ち上がってきた。回復したのだから、痣どころか傷一つなかった。

龍一

「期待に応えたが満足できそうか？」

百代

「……………ああ！最高だ！お前は最高だよ！龍一！」

龍一

「……………忘れていないとは思っがこれは手合わせだからな？」

百代

「ああ、分かってるって」

俺達は再び激突し、二戦目の幕が上がった。

Side out

S i d e 直江 大和

大和

「姉さんが押されてる？」

自分で言ってるって信じられないくらいだ。姉さんは圧倒的な武を持ち、今までその力に助けられたことは両手の指じゃ足りないくらいだ。

その姉さんが押されている。その光景は少なからず動揺を与えた。

京

「うん。私も全部見えるわけじゃないけど、押されてるのは間違いない」

キャップ

「モモ先輩の拳を指一本で止めたところまでは分かったけど、その後はどうなったんだ？」

モロ

「そうだね、気がついたらモモ先輩が倒れてたんだぐらいの感覚だよね」

京

「モモ先輩が防御に精一杯だって事くらいしか見えなかった。クリスとワン子はどっっ？」

ワン子

「いめん、何にもわからなかったわ」

クリス

「自分もだ…マルさんは？」

マルギツテ

「全部ではありませんが大体は」

クリス

「さすがマルさん！」

大和

「それで？大まかでいいから説明してくれないか？」

マルギツテ

「（説明中）　　」と言っ訳です」

ガクト

「マジかよ……」

俺達はその内容に驚愕した。それって……

大和

「話を聞く限りじゃ防御もさせてもらってないじゃないか……」

マルギツテ

「それに龍一は右手と左足を攻撃の際使用していません」

京

「なんていうか、あきらかに手加減してるよね」

一子

「お姉様に手加減だなんて……」

マルギツテ

「私の時も指一本しか使わなかったな」

由紀江

「私の時もです」

キャップ

「ひゃく、どんだけだよ龍先輩」

グラウンドを見れば二人は距離を離して対峙していた。そろそろ15分。次が最後の攻撃だろう。俺達は固唾を飲んで見ていた。

Side out

Side 川神 鉄心

鉄心

「まさかこれほどとはのう」

わしは驚愕を隠しきれなかった。最初に一撃もらったのにも驚いたが、その後の方がより驚愕した。なにせ百代が何もさせてもらえんのじゃからのう。

鉄心

「ユースムの奴め、どこで見つけてきたんじやい」

ルー

「パワー、スピード、そのどちらもガ、百代を超えていル」

鉄心

「それだけではないぞ。あやつは攻撃の際、左手と右足しか使っておらんからのつ」

ルー

「では手加減しているト？」

鉄心

「今回は手合わせじゃ。あやつも情報収集が目的な以上、それで十分と判断したんじゃろつ」

ルー

「あの年でこれほどまでの実力……百代にも驚きましたが、今回はそれ以上デス」

鉄心

「わしもじゃよ。ホントに世界は広いのつ」

そこに一人の来訪者がいた。

ヒューム

「どうだ？ 奴の実力は？」

鉄心

「ヒュームか……おぬし、あやつをどこで見つけてきたんじゃ？」

ヒューム

「その様子を見るに驚いているようだな。まあ無理もあるまい、なにせあいつはこの俺に15で勝った男だからな」

鉄心

「なんじゃと!!」

それが本当なら今の百代では勝てん……

技術的なことに加え、精神・氣の操作で劣っているし、特に精神面では致命的じゃ。自他共に認める戦闘狂じゃしろう。

それゆえ熱くなりやすい。

鉄心

「む？そろそろ15分じゃな」

ユーム

「次の一撃で最後だろう」

二人は距離を離して対峙していた。

わしは、恐らく駄々をこねるモモを止める準備をするのだった。

Side out

Side 黄真 龍一

龍一

「破ッ!!」

百代

「ぐっ!!」

百代の防御の上から致命傷の一撃を与える。本来なら腕の骨は粉々になっているだろう。すぐに回復するが百代は衝撃で飛ばされ、

地面には百代が足で耐えたであろう二本の線が残っていた。

龍一

「さて百代、そろそろ15分だ。次で終わりにしよう」

百代

「なんだからもう終わりか」

龍一

「楽しい時間とはすぐに過ぎるものだ」

百代

「違うない。ところで一ついいか？」

龍一

「なんだ？」

百代

「なんで呼び捨て？」

龍一

「ああ、そういえば。なに、同じ年だしお前の名前を聞いてからずっと  
そう呼んできたからな。しかし失礼だったな……すまなかった」

百代

「まあ気に入らん奴だったら問答無用で殴っていたがお前ならいいだ  
ろう。これからいろいろ楽しめそうだしな」

龍一

「……………お手柔らかに頼む。では!!」

掛け声と同時に氣を高める。今から出す技はコントロールがシビアだからな。

百代

「はは!!ホントに最後まで楽しませてくれる!!」

百代も氣を高め、お互いに構える。

互いに腰を落とし

百代は両手を右の腰あたりに

俺は右手を引き、左手を前に

百代

「川神流奥義!!」

龍一

「黒龍氣功奥義!!」

百代の氣が手の平に

龍一の氣が右手に集まる

百代

「【かわかみ波】!!!!」

龍一

「【炎獄黒龍波】!!!!」

百代の両手からは、さしずめ極太のレーザーが

俺の右手からは黒い龍が相手に向かっていく

そしてお互いの技が衝突した

百代

「ははははは!!なんだその技は!!」

龍一

「知りたければ真剣勝負で勝つことだ」

会話をしながら頭では別のことを考える。

龍一

「(肉弾戦は力に頼る傾向があるが氣功系の技は基本に忠実だ。これからの鍛錬しだいでは良くも悪くもなる。肉弾戦は基礎からやり直しだな)」

俺は思考をまとめて結論付け、攻撃に集中する。

百代

「ぐっぐっぐっ!!」

百代も押されているのが分かるのだろう。俺はさらに力を込め黒龍が、かわかみ波を飲み込んでいく。

龍一

「破ッ!!」

百代

「うわっ!!」

黒龍が、完全にかわかみ波を飲み込み百代に当たる寸前に軌道を変更。

空中に向かい、四散した。

鉄心

「そこまで!!」

学園長の声に戦闘態勢を解いた。

龍一

「ふう……これで今回は手打ちにしといてくれ」

百代

「いや、やっぱり強かったな！なあ、これから川神院で試合しよう!!  
うん、そうしよう!!」

龍一

「人の話を聞け!!」

内心ため息をこぼしながらみんなの下に戻る。

英雄

「うむ、よく苦労であった」

紋白

「さすがは龍!!あの武神と互角とはな!!我も鼻が高いぞ!!」

龍一

「ありがとう、紋」

義経

「ホントにすごかった。やっぱり龍兄はすごいなあ」

龍一

「義経には俺の動きが見えていたんだろ？」

義経

「うん。モモ先輩も凄かったけど龍兄よりも遅く感じたな」

龍一

「それだけ義経も強くなっている証拠だ」

義経

「そうか。うん！義経はまだまだ頑張るぞ！！龍兄の隣で一緒に歩くんだ！！」

義経の決意に嬉しくなり頭を撫でた。

龍一

「頑張れよ、義経」

義経

「うっ／＼／」

弁慶

「あゝあ、主ってば赤くなっちゃって」

義経

「うっ、弁慶！！」

弁慶がちゃちゃを入れ和やかな雰囲気になる。

龍一

「なんだ？ 弁慶も撫でてほしいのか？」

有無を言わず弁慶の頭を撫でる。

弁慶

「ん〜、気持ちいい／＼／」

少し赤くなりながらも気持ちよさそうに目を細める。  
それを羨ましそうに見つめる清楚がいた。

俺は清楚に近づき頭を撫でた。

清楚

「あう／＼／」

龍一

「捨てられた子犬みたいな目だったぞ」

清楚

「そんなんじゃないもん」

龍一

「そうか」

撫でていた手を頭から離す。

清楚

「あっ」

少し寂しそうだったがこれ以上はまずいので自制した。

冬馬

「お疲れ様です」

龍一

「まったくだ」

井上

「しっかしすっげー強ええな」

小雪

「当然だよ　　なんたって僕のヒーローだもん」

龍一

「まあ無事に終わってなにより、だな」

小雪に抱きつかれながら冬馬達と話していると学園長とルー先生が歩いてきた。

鉄心

「ほっほ、お疲れ様じゃ」

龍一

「いえ、なかなかどうして楽しめましたよ」

鉄心

「どっじゃおぬしの目から見てモモは」

スウツと学園長の目が細くなり、鋭く光る。それを感じながら、臆することなく言った。

龍一

「武神を名乗っている以上実力は申し分ありません。しかしこれより、上を目指すのであれば足りないものが多すぎます」

鉄心

「ふむ。してそれは？」

龍一

「まずは肉体面。接近戦で力に重きを置いているのに体ができていない……これはヒュームも同意見だろうか？」

ヒューム

「ふん、朝本人に言ったのを聞いていただろう」

龍一

「だそうです」

鉄心

「ふむ、他には？」

龍一

「技術面では問題ないでしょう。ただ、やはり力に頼っている分大振りになりがちです。基礎をおろそかにしているわけではないでしょうが大技に頼る傾向が見えます」

鉄心

「耳が痛いろう。それでいてよく見ておる」

龍一

「ありがとうございます。そして氣のコントロールですが、こちらも問題はありません。瞬間回復を身に着けているので氣の量も多いと

思います。これから効率のいいやり方を身に着ければさらに武術家として大成するでしょう。しかし問題は……」

鉄心

「やはり精神面かのう？」

龍一

「学園長も気づいていましたか……そう、問題はそれらを行う本人です。今はまだ仲間や友人といることでその精神はなんとか安定されていますが、今まで自分と対等な人物がいなかったせい、常に強者の孤独に苛まれてきたんでしょう。それが現在の戦闘狂の要因の一つです」

鉄心

「もう一つとは？」

龍一

「これは恐らくですが……本人の性格です。この問題は学園長の方が正確に理解していると思います」

鉄心

「確かにのう。しかしおぬし、たった15分でよくそこまでわかるのう」

龍一

「武術に関しては手合わせすれば大体は。内面に関しては聞いていた情報と実際に会って話し、見聞きしたものを統合し判断しただけですよ」

そういつて苦笑してみせる。学園長は鋭い眼光を抑え、普段の飄々とした雰囲気に戻った。そこに百代達がやってきた。

百代

「さあ龍一!!川神院に行って勝負するぞ!!」

龍一

「は?」

まさか本気か?……………いや本気なんだろう。呆然とした俺は悪くない。

龍一

「はあ、今日はここまでだとさっきも言っただろう」

百代

「いいじゃないか、勝負しよう勝負!!」

鉄心

「くらモモ!!まったくお前という奴は……………すまんのう」

龍一

「いえ、ようやく自分と戦える者がいるんです。無理もないでしょう」

鉄心

「そういつてもらえると助かるわい」

しかしこのままでは埒がいかんな。予定の落としどころで我慢してもらおう。

龍一

「百代、さっきも言ったが俺の役割は義経達のサポートだ。そこは理解しているな?」

百代

「ああ」

龍一

「そこで、だ。休日は手合わせという形で川神院で模擬戦を行うというのはどうだ？毎週時間が取れるわけではないがな。これなら適度にガス抜きもできるだろう」

百代

「ん〜まあ仕方ないか。いいぞそれで。あ〜早く週末にならないかな」

鉄心

「……………ホントにすまんのだ」

龍一

「いえ、こうでもしないと収まりませんから。正式な試合は九鬼が用意することですので、その時はご連絡します。それではまた明日」

そう挨拶をして俺達は下校した。いつの間にかクラウドが呼んだりムジンが校門にいたのには驚いたが、なんとか編入初日を終えることができた。

百代との手合わせは予想内ではあったが、正直めんどくさいことになったと内心呟く。

そういえば燕がサプライズがどうこうと言っていた時期だな。

まさかとは思つが……………

思考を中断し窓の外を見れば極東本部が見えてきた。

本人の予想が的中することになるとは、この時は知るよしもなかった。

S i d e o u t

t o b e c o n t i n u e d

次回 「 納豆小町再び 」

第陸話 納豆小町再び

6月9日火曜日 AM5:00

side 黄真 龍一

「pipipipipi! pipipipipi! pipipipipi! pipipipipi! pipipipipi! pipipipi!」

慌しい転入から翌日、朝の鍛錬のために起床する。

龍一  
「ふあっ」

寝ぼけ眼をこすりつつ、洗面台へ行き顔を洗う。

龍一  
「(バシャッ!バシャッ!)ふっ、よし!」

眠気を覚まし、ジャージに着替え軽くストレッチをした後ランニングに出るため外へ向かう。外に出たところで義経と合流した。

義経

「おはよう、龍兄」

龍一

「おはよう、義経。行くつか」

そのまま二人でランニングに出る。この朝の鍛錬には清楚、弁慶、与一は参加しておらず自主的なものとなっている。

最初は一人で行っていたが、義経が知ると「義経も参加する！」と言い出しそれ以来一緒に鍛錬している。

ランニングは極東本部を5周。距離にして約10km。その後は基本的な筋トレに各々武術の型に10分間の模擬戦を行う。

朝の鍛錬では義経は刀ではなく無手で行う。刀が使用できない場合の時のために教えてくれと頼まれた。備えはあってもいいかと思っただので、了承した。

そして現在、徒手空拳の模擬戦真っ最中である。

「ガガッ！ガガガガガガッ！」

素手ではありえない音を出し、額に汗を浮かべて攻防を続けている。

義経

「はあっ！」

龍一

「ふっ！せあっ！」

お互いに相手の攻撃をかわし、いなし、時には防御し、隙を見て拳や蹴りを繰り出す。いつまでも続くかに見えたその攻防は唐突に終わりを告げた。

「p.i.p.i.p.i.p.i.p.i.p.i.p.i.p.i.p.i.p.i.p.i.p.i.p.i.p.i.p.i.p.i!!」

龍一

「ふっ、時間だ義経」

義経

「むっ、また一撃も当てられなかった」

龍一

「まだまだ負けてやらんさ。シャワーを浴びて朝食にしよう」

義経

「うん…」

朝食を済まして自室へ戻り登校の準備をしていると不意に大きな氣の衝突を感じた。

龍一

「ッ!!」の氣は……ヒュームさんか」

なにがあつたのは分からないが、ヒュームさんの氣が無くなっていないのでたいしたことはないのだと思い、学園に登校した。

side out

川神学園 放課後 第二茶道室

side 直江 大和

俺は今宇佐美先生と将棋を打っている。予備の部室を私物化しているヒゲ先生に親しみがもてた。予備部室なので迷惑はかからないはず。

宇佐美 巨人

「あゝ、小島先生と結婚してえ、新婚旅行で湯河原温泉行きで〜（パチッ）」

大和

「願望丸出しですね、全然進展してないのに（パチッ）武士道プランで疲れてるんじゃないんですか？」

宇佐美

「二人のときは敬語いって……思ったほど疲れないな。義経は優等生だしよ、逆に気をつかってもらってるわ（パチッ）」

大和

「彼女は決闘希望者が後を絶たなさそうだよね（パチッ）」

宇佐美

「今も第一グラウンドでやってるぜ、相手生徒会長（パチッ）」

大和

「ギャラリーはそっち行ってるだろうね（パチッ）」

宇佐美

「だからこそまったりできるわけだ（パチッ）」

大和

「弁慶と与一は？（パチッ）」

宇佐美

「んー、あー弁慶は飄々としてるからな、川神水は飲むが大人しいいい子だよ。与一は終始ダルそうにしてるがやることやってるし問題はなさそうだな。直江は結構弁慶とか好きそうなタイプだな（パチッ）」

大和

「性格的に合いそう。仲良くしたいね（パチッ）」

宇佐美

「わかるわかる、お前と近そう（パチッ）」

そんな話をしていると廊下からスタスタと足音が近づいてくる。

大和

「誰か来るよヒゲ先生」

宇佐美

「通りすぎんじゃないねー、こんな空き教室誰も来ないだろ」

龍一

「(ガラツ)ん？ここはなんの部屋なんだ？」

扉を開けたのは龍一先輩だった。ちょうどよかった、連絡先を聞くと思ってたんだ。先輩は俺たちに近寄り、腰を下ろし将棋盤を見る。

龍一

「将棋ですか？……これは大和が優勢だな」

大和

「先輩はどうしてここに？」

龍一

「ん？ああ、校内探索と放課後の暇つぶしだな。九鬼に所属してるといっても義経達のことを考慮してその辺ゆるいからな」

大和

「そうだったんですか。それでここに行き着いたと」

龍一

「そういうことだ。いつも二人でここに？」

宇佐美

「オジサンは暇なときはな」

大和

「ヒゲ先生、俺が見つけて来るようになった後居なかったことないですよね」

宇佐美

「そりゃあれだ、仕事全部終わらせてるからな」

大和

「嘘くさ」

龍一

「なるほど、ここはだらける部室か」

宇佐美

「ま、そういうこと。お前は真面目そうだからな、入部拒否だ」

龍一

「ひどいですね宇佐美先生。俺だって人並みに手を抜きたい時くらいありますよ」

宇佐美

「んじゃ質問。休日に雪山に行きました。さて、何をする？」

龍一

「帰って寝る」

宇佐美

「山すら登らないとは……こいつの素質は最高だな」

龍一

「これからここに来てもいいんですかね？」

宇佐美

「ああ、オジサン歓迎するよ」

大和

「俺も」

龍一

「どうも」

三人で談笑しながら将棋をしているとまた廊下から足音が近づいてくる。

大和

「また誰か来たみたいだよ」

龍一

「この氣は弁慶だな」

宇佐美

「お前も人間やめてるよな」

龍一

「失礼ですね」

ガラスと扉を開いたのは先輩の言う通り弁慶だった。

弁慶

「あれ？龍」

龍一

「よ、どうしたんだ？」

弁慶

「んー、私決闘とかかったるいから逃げてきた」

大和

「それでここに行き着いた、と」

弁慶

「そ。龍がいるし、いてもいいよね」

宇佐美

「ここは三人の聖域だからな」

大和

「なんて薄汚いサンクチュアリなんだ」

宇佐美

「まー冗談だって、好きにしろや弁慶」

龍一

「弁慶、川神水くれ」

弁慶

「はいよ」

大和

「なんでこの二人初日でこんなに堂々としてんの？」

弁慶

「んっんっぶは〜、直江気にしたら負けだよ」

大和

「なんの負けだよ」

宇佐美

「とりあえず入部テストだ。友達と温泉旅行に行きました。さてどうする？」

弁慶

「温泉に入って川神水を飲んでぼ〜として温泉に入って食事をして川神水を飲んで寝る。翌日は午後1時に起きる」

宇佐美

「こいつもまた素質は最高だな。なかなかのだらけっぷりだ」

弁慶

「これからよろしく。(1jv1jv)」

大和

「仲間の作法その1。連絡先は教えあいましょう」

弁慶の方に携帯を向ける。弁慶はチラッと先輩の方に目を向けた。

弁慶

「ん〜、悪いけどそのうちね」

大和

「そっか。やっぱりそういうの厳しいんだ」

弁慶

「まあ事情が事情だしね。禁止ではないから」

大和

「仕方ないか、んじゃ先輩」

龍一

「ん？」

大和

「連絡先。交換しましょう」

龍一

「まあいいか（ピッ）」

大和

「先輩はいいんですね」

龍一

「俺はただの護衛だからな。だからといってなんでもかんでも頼るなよ」

大和

「了解です」

先輩に釘を刺された後は、川神水に合うおつまみやらの話になり談笑して放課後の時間は過ぎていき、気づけば日が落ちてしまった。

大和

「じゃあ全員大扇島の九鬼財閥のビルに住んでるんだ」

弁慶

「楽しくやってるよ。門限もゆるめだし」

龍一

「一回諸事情あって遅れたことがあったがそのときはヒュームさんと乱闘になりかかったな」

大和

「そ、そうですね」

弁慶

「お？下駄箱に手紙が入ってたなっ」

大和

「ラブレターか決闘状か、どっちもありそうだよね」

弁慶

「ラブのほうだ。三年生から……私彼氏いるから意味ないんだよね」

大和

「え？弁慶彼氏いたの!？」

龍一

「どうした？」

弁慶

「あ、龍。ラブレター貰っちゃったよ」

龍一

「俺も入ってた。ラブレター3つに決闘状2つ」

弁慶

「む」

龍一

「なんだ弁慶妬いてるのか？」

弁慶

「まあ一応ね」

龍一

「素直でよろしい」

……ってちよつと!!  
そういつて先輩は弁慶の頭をなでた。なんか弁慶頬染めてるし

大和

「龍一先輩弁慶の彼氏ってまさか……」

龍一

「俺だが？」

大和

「マジか……」

まさか弁慶の彼氏が龍一先輩だなんて……弁慶とはこれからどうなるか分からないし、もしかしたら俺でもと思ってたけど……先輩はスクラスだから頭もいいんだろう。それに姉さんくらいに強いしイケメンだし。

大和

「） どう考えても勝ち目がないな」

龍一

「そんなにショックだったか？」

大和

「まあそれなりに」

弁慶

「ついでに清楚先輩と義経とも付き合ってるよ龍は」

大和

「は？ごめん、もう一回言っで。耳が遠くなったかな？」

弁慶

「清楚先輩と義経とも付き合ってるんだよ龍は」

大和

「はあああああああ!!!」

龍一

「はあ」

え？なに三股!?

大和

「えーと弁慶たちはそれでいいわけ？」

弁慶

「まあね。3年前から龍は私らの共有財産だから」

龍一

「まあそういうことだ」

大和

「これが知れたら全男子生徒の敵ですよ」

龍一

「なにお前が黙っていればいいだけさ」

そういつて先輩はグラウンドの方に足を向ける。はあ、とんでもないこと聞いちゃったよ。ガクトには言えないな。

side out

side 黄真 龍一

グラウンドではギャラリの大歓声が起きていた。  
見ればまだ義経が決闘しているところだった。

大和

「まだ決闘やってたのか」

龍一

「あれは確か川神 一子だったか」

「キンキンキン！キンキンキン！」

刃を潰した刀と薙刀が甲高い音を立てて打ち合っている。義経は  
迫り来る薙刀をその刀で打ち払う。袈裟懸けに刀を合わせ切り払い、  
返す刀で振り下ろす。一子はそれをバックステップで回避する。

一子は義経の残心を見て薙刀を構え突進し横切りに振るう。義経  
はしゃがんで回避し、空いた体にしたから切り上げるが、一子は後ろ  
に跳びながら身を捻って何とか避ける。

義経

「なんとという激しさだ！義経は驚愕した！」

ワン子

「この一撃はガードできないわよ！」

一子の一撃を義経は体を左に半身で避け瞬時に接近し刀を振るつた。

ワン子

「うあっ！」

隙を突かれた一子に義経の一撃が直撃し一子は倒れた。

京

「頑張ったけど、最後焦っちゃったねワン子」

クリス

「義経は身軽だなあ。飛燕の「とく」というわけだな」

30分後、ギャラリーは解散し、ポツリポツリと人が残る程度になった。

龍一

「お疲れ義経。どうだった川神さんは」

義経

「すごくいい試合だった。義経も得るものもあった」

龍一

「そっか」

俺は義経の頭をなでた。義経は頬を染め気持ちよさそうにしている。

クリス

「ん〜、義経と犬の手合わせは凄かったな」

大和

「こんなに早く決闘できるとは知らなかった」

クリス

「義経がどんどん挑戦者を片付けるから予定が繰り上がってな」

ワソ子

「いやあ〜負けちゃったわ。でもでも得るものも多かったわ。悔しいけどまだまだ強くなれる!」

京

「挑戦者の中では一番粘ってたよ。生徒会長なんて骨法出す前に終わっちゃったし」

義経

「実にいい汗を流せた。また戦おう一子さん」

ワン子

「今度は負けないわよ。覚悟してよね」

龍一

「クリスは戦わないのか？」

クリス

「連戦で疲れてる義経と元気な自分とではフェアではないからな。この波が落ち着くまで待つつもりだ」

ワン子

「確かに義経疲れてたかも」

クリス

「ん？ああ、別に犬を責めているわけじゃないぞ」

義経

「できるだけ多くの人と手合わせするのが義経の役目だ。気を使わなくていい」

クリス

「これは自分のこだわりみたいなものだ」

義経

「義経は理解した。いずれ戦おうクリスさん」

クリス

「ああ」

今日はそこで解散となり各々が帰路についた。  
護衛といわれても特にする事がないと気づいた一日だった。

6月10日 水曜日 登校時間 多馬大橋

龍一

「今日も朝から元気だな、百代は」

橋の上から百代が吹っ飛ばした相手を見ながら、こっちに歩いてくる百代達に声をかけた。

百代

「なんだ龍一じゃないか」

龍一

「なんだとは失礼だな」

百代

「まあ気にするな。それよりもどつだ？」「こつらでーっっ」

そついつと百代は氣を俺に向けて放つ。

龍一

「やるわけないだろう。早くその氣を抑えろ」

百代

「ちえ、ストレス発散できると思ったのに」

龍一

「都合のいい。そういうのは義弟の大和にでもしておけ」

大和

「ちよっ!? 人柱にしないでくださいよ!」

龍一

「そっいいながら、百代の胸の感触とか楽しんでるんだろ? ムツツリ  
め」

大和

「へ? なんて知って…ちよっ! やめて姉さん! ニヤニヤしながら当て  
ないで!」

目の前で百代が大和に抱きつきながワザとらしくこれでもかと密  
着する。

ガクト

「くそ〜っつらやましいぜ畜生! 松風、言ってやれ」

松風

「年上って響きはいいけど、早く年食っちまうんだぜ」

百代

「よし！今日はまゆまゆの部屋に泊まるっつと」

由紀江

「ええええ！私の部屋ですか！」

百代

「寝技の乱取りで上下関係を再確認しないとな」

モロ

「あゝ、言い過ぎたんだねこれ」

龍一

「師岡、いたのか」

モロ

「いきましたよ！さりげなくひどいこと言わないでくださいよ！」

龍一

「すまんすまん。冗談だよ」

雑談しながら橋を渡っていると、後ろから清楚が自転車に乗って来た。

清楚

「リンリンリリン、リリン」

ガクト

「おお見るよモロ！葉桜先輩だぞ清楚だなあ」

モロ

「ホントだ。見てよ、自転車から降りる姿も絵になるなあ」

清楚

「龍君、モモちゃんおはよう」

龍一

「よ、清楚」

百代

「おはよう清楚ちゃん。おっ　い揉んでいいかな？」

清楚

「ええ／＼／」

大和

「いつの間に仲良くなったんだ？」

百代

「ワタシ美少女にメガナイ、スグニ教室イッテ、口説イタ」

大和

「オーイエス……龍一先輩はいいんですか？」

龍一

「なにがだ？」

大和

「いや、ほら姉さんが口説いて」

龍一

「別に本気じゃないだろ。せいぜいがスキンシップ程度、何も心配いらんぞ」

大和

「そうですか」

集団のほうでは岳人が百代に詰め寄っていた。

ガクト

「葉桜先輩を紹介してくれよモモ先輩！ハアハア！」

百代

「えー」

ガクト

「紹・介・し・て・く・れ・よ・!!」

百代

「分かった、分かったから！血涙なんか流すな！」

清楚

「楽しそうなお友達だね、モモちゃん」

清楚、あれを見て楽しそうな友達で済ますお前の胆力に驚きだ。

ガクト

「島津岳人です。ベンチプレスで190kg上げます。俺様と結婚を前提に付き合ってください…」

清楚

「ごめんね島津君。私もう付き合ってる人がいるんだ」

その瞬間、周囲の空気が凍った。

ガクト

「……………ちなみにその人は？」

清楚

「えっと／＼／＼（チラッ）」

清楚が俺の方に視線を向けた。清楚よ、そこは誤魔化すところだ  
る。

ガクトなんか血涙流しながら「ギギギッ」っとこっちに視線向けて  
るし。

周りの視線も俺に集中してるし……………べつ収集しよっ。

ガクト

「……………先輩……………本当に？」

龍一

「……………あめ」

ガクト

「……………清楚先輩の彼氏？」

龍一

「…そつだ」

ガクト

「……………おおおおー！！イケメンは死ぬー！！」

ガクトは怒りに任せ拳を繰り出してくる。

それを上半身をそらして避けると、右から拳が飛んできたので、誰かと思うと百代だった。その百代の拳を右手で受け止めた。

龍一

「ガクトはともかく何で百代まで出てくるんだ？」

百代

「いや、なんかムカついたから」

龍一

「なんだそれは？まあ、ドンマイだガクト」

ガクト

「チクシヨーーーー！！」

ガクト強く生きる。

大和

「葉桜先輩は自転車通学なんですね」

清楚

「うん、九鬼財閥が開発した電動自転車だね、坂道なんかもスイスイ進むからスイスイ号って言うの」

スイスイ号

「みなさん、おはようございます」

クリス

「おお、喋ったぞ!!これも腹話術か？」

由紀江

「人工知能のようですね。松風は九十九神ですが」

ワネ子

「メイドイン九鬼なら喋っても不思議じゃないわ」

大和

「人工知能はクッキーで証明済みだからな」

スイスイ号

「はい、クッキーさんは私の先輩にあたります」

モロ

「この自転車トランスフォームしたりするのかな？」

スイスイ号

「師岡様、残念ながらそのような機能はありません。私はただの自転車ですので」

モロ

「ただの自転車は喋らないと思うけど」

キャップ

「しかしすつげえ自転車だな。乗ってみてもいいか？」

スイスイ号

「すみません、拒否いたします。私に乗れるのは主のみ」

京

「おお、忠誠心が」もしくは美人な方なら歓迎します」と思ったただのスケベだった」

スイスイ号

「ジョークですよジョーク」

キャップ

「じゃあ乗ってもいいんだな」

スイスイ号

「断固拒否します」

キャップ

「いーじゃん、いくぞー！」

スイスイ号

「汚ねえケツを乗っけるんじゃないやねえ!!」

キャップ

「うわああああ、大和こいつ怖いぞう!!」

大和

「無理矢理乗ろうとするからでしょ。それにしても……」

クリス

「なんで九鬼の人工知能はすぐキレルんだ？」

京

「まさしくクッキーの後輩の感じがするね」

龍一

「一応威嚇機能がついてるんだよ。盗難防止や、清楚のために」

スイスイ号

「行きましよう清楚、余裕を持った登校を」

清楚

「はい、じゃまた後でね龍君」

龍一

「ああ」

清楚は自転車に乗り颯爽と駆けていった。

その後、義経たちが合流した。

雑談しながら登校していると後ろからバイクが迫ってきた。

ひったくり

「いっただきいいいいっ」

義経

「ああっ!!」

ひったくりは義経の鞆を奪って逃走した。

由紀江

「!?手加減したとはいえ刀をはじくなんて」

龍一

「そこそこ腕に覚えがあるみたいだが無意味だな……与一……撃て」

与一

「了解……」

大和

「ここから狙うのか?…京お前ならできるか?」

京

「さすがに遠いと思う……あ、大和がエネルギーくれるならいけるよ」

与一

「奥義……【金剛矢】!!」

放たれた矢は一直線にひったくり犯の乗るバイクに向かい……

ひったくり

「へ?」

ドガアアアアアアン!!!!

見事に命中し、飛んだ鞆を空中でキャッチして着地。

龍一

「ほら義経」

義経

「ありがとう龍兄、与一」

与一

「はこよ」

龍一

「とりあえず一件落着だ、行くか」

朝からとんだ災難だったな。さすが多馬大橋。通称『変態の橋』といわれるだけあるな。

多馬大橋で清楚が俺と付き合っているとの発言で、学園中の男子から敵意の視線で見られるため早々に退避してきた。

視線で人が殺せるなら俺はとっくに死んでいるだろう。

屋上の貯水タンクの上で食事をし、まどろんでいるところに大和がやってきた。

大和

「先輩も昼寝ですか」

龍一

「ここに来たのはたまたまだが、中々居心地がいいなことは」

大和

「なにかあつたんですか」

龍一

「ほら、朝の清楚の発言でな。視線が目障りだから逃げてきた」

大和

「あ、なるほど」

龍一

「昼寝に来たんだろ？後で起こしてやるから寝てろ」

大和

「じゃ、お言葉に甘えまして」

そういつと大和は隣にゴロンと転がりくつろぎ始めた。

俺は持参した本を読み、時間を潰していると、不意にどこかで感じた氣を思い出した。

龍一

「(この氣は……なるほど、サプライズとはこういうことか)」

???

「や！久しぶりだね、龍一君」

龍一

「ああ、会うのは久しぶりだな燕」

燕

「およ？結構不意を突いたと思ったんだけどなあ」

龍一

「不意を突くには氣配の消し方が甘いな。今度教えてやるよ」

燕

「おお、ありがとねん」

龍一

「ああ後、パンツは見えないようにな」

燕

「///……見た？」

龍一

「さあ？大和も寝た振りして薄目開けても意味ないからな」

大和

「気づいてたなら声かけてくださいよ」

龍一

「いやどこまでそのムツツリを出すのかなと」

大和

「ムツツリって言わないで下さい！」

龍一

「ははは!!悪かったって。それで？その制服着てるってことは転入ってことでいいんだよね？」

燕

「そだよん。今日は下見だね」

大和

「っていつか龍一先輩知り合いなんですか？」

龍一

「ああ、武者修行中に出会ってな。それからメールのやり取りくらいだ」

燕

「そうそう。そのときに色々助けて貰っちゃってね」

大和

「なにかあったんですか？」

燕

「ま、そのうちね。んじゃまたね龍一君。とっつ!!」

そういつて燕は屋上から跳んでいった。そのすぐ後に風が吹いた。

大和

「……なんだよ風吹くの遅すぎだろ」

龍一

「……( ; \_ ) ジー」

大和

「はっ！待って今の無し！」

龍一

「これは京に報告だな」

大和

「ごめんなさい！それだけは！」

龍一

「やっぱり大和はムツツリか」

大和

「グハアッ！」

なにやら心を抉ってしまったみたいだ。  
しかし、燕が来るとまた騒がしくなるな。  
どうしたもんかなと、これからのことを考えるのであった。

side out

6月11日 木曜日 朝のHR

side 川神 百代

カラカル・ゲイツ

「サテ、今日ハイキナリ転入生ヲ紹介スルヨ」

いきなりなのに、クラスがざわついた。

弓子

「この時期に？クローンで候？」

ゲイツ

「クローンジャナイネ、普通ノ人ダヨ」

百代

「どうせムサイ男とかだろ。ソースは私の感」

ユミ

「なるほど、ありえるで候」

ゲイツ

「百代。直感八頼リニナルガ、決メ付ケ八駄目ダヨ。ソレジャ転入生  
軽ヤカニドウゾ」

百代

「まさかの美少女来たー！ー！ー！！」

燕

「はじめましてー！！」

男子連中から歓声が上がった。

3 F 男子

「可憐だ…やったぞ皆の衆…ついに、ついに我らは美少女を手に入れ  
た！悲願達成、大願成就！」

百代

「おいおい美少女なら私やユミがいるだろチミ」

男子

「ひいつ、川神さんはそれよりも恐怖が勝って」

百代

「失礼な。まあそんなことより目の前にいる一輪の花だ」

私は転入生に近づいていく。

百代

「私は川神百代！よろしくな！」

燕

「武神だね。西でもその名は聞いているよ」

百代

「ん？」

燕

「私は松永燕。よろしくね」

燕が手を出してきたので握手をした。

その瞬間私は感じ取った。

彼女は強いと。

百代

「松永と言ったか？あの松永か？」

燕

「うん、一応武士娘として決闘とかもやってるよ」

弓子

「聞いたことがあるで候。西に武具を使いこなす兵がいると…それが松永」

百代

「何故川神に？」

燕

「おとんの仕事の都合。これが関東へ来た理由。川神学園を選んだ理由は、賑やかで楽しそうだから…：そしたらいきなり源義経だよ。いいよねえ、破天荒で」

百代

「なるほど、分かりやすいな燕。では、川神の流儀でお前を歓迎してやろう。決闘だ」

燕

「うーん、記録に残るような試合は許可が必要なんだ」

弓子

「西は家名を重んじると聞いたことがあるで候」

百代

「あー、家がうるさい系なのか」

燕

「しめんね。でも稽古ってことならいいよ」

百代

「ははは!!よし、歓迎稽古だ!!」

私たちはグラウンドに移動した。  
龍一といい、燕といいこつも続けて楽しめるとは。

百代

「さあいくぞ!!川神流【無双正拳突き】!!」

side out

side 黄真 龍一

窓から外を見れば百代と燕が戦ってるのが見えた。

龍一

「あいつの転入今日なのか」

近いうちにはと思っていたが、昨日の今日とは……

清楚

「ねえ、あいつって?」

呟いたのが聞こえてたのか、清楚が話しかけてくる。  
俺は外を指差し、誰かを示した。

龍一

「百代と戦ってるのが松永燕。京都でちょっと知り合ってたな」

清楚

「そうなんだ。すごいね、モモちゃんと戦えてる」

見ればたくさん武器を使い百代と戦っている。

しかし器用貧乏。決定打にかけない。たくさん武器が使えるのは強みだが、一つ一つの練度が足りなさ過ぎる。

今回の戦闘に何の意味が……

龍一

「(燕は相手を調べてから戦う……今の燕じゃ百代に勝てない……今回決闘の放送は無かった。となればこれは手合わせ?……なるほど、今回は手合わせと称して目的は百代の分析。そうならば、武器の多さにも納得がいく)」

一応の考えをまとめた頃には戦闘も終わっていた。  
何かルー先生と話した後、マイクを持った。

燕

『皆さん、暖かいご声援、ありがとうございます。京都から来た、松永燕ですっ！これからよろしくっ！何故私が、川神さん相手に粘れたかといいますと!!』

カップ型の松永納豆（試供品）を取り出す。

燕

『バーン！秘訣はこれです松永納豆ツツツ!!!もちろんこれ食べれば強くなれるわけではありません。しかーし！ここぞという時に粘りが出ます！皆さんも、栄養満点の納豆を食べて、エンジヨイ青春！試食したい人は、私をもっていまーす!!皆さんも一日一食、納豆、トウツ!!以上、松永燕でした!ご静聴感謝します!』

燕……相変わらず商魂逞しいことで。

でもあの納豆は確かに美味しいんだよな。

side out

side 松永 燕

マイクでの納豆営業が終わってたくさんさんの歓声の中、漸く目当ての人物を見つけたので、大きく手を振れば、向こうも振り返してくれた。

百代

「燕は龍一とは知り合いなのか？」

燕

「うん。昔、いろいろ世話してもらったんだ」

百代

「ふーん」

燕

「?どじしたの?」

百代

「いや、なんかこும்カムカというかモヤモヤというか……よく分かんらん」

燕

「???

百代

「まあいいや、戻ろうか」

燕

「そだねん」

百代ちゃんに勝ったらこの想いを龍一君に言おう。

隣にいた女の子がすごい睨んでたけど。

そんなことを考えながら教室へと足を進めた。

s i d e o u t

t o b e c o n t i n u e

次回「 歓迎会 」

## 第漆話 歓迎会

川神学園 昼休み 屋上

side 黄眞 龍一

朝の騒動から時間は過ぎて昼休み。

俺は自身に向けられる嫉妬の視線に疲れながら屋上へと足を進めた。

燕が来てから多少は減ったものの、それでも数は多い。

食事も終わり、屋上の給水タンクの上でどうしたものかと考えていると大和の氣が屋上に向かって進んでいるのに気がついた。

龍一

「あいつはこのままサボリかね」

そう考えていると、屋上のドアが開き、給水タンクの上まで大和が登ってきた。

大和

「あ、先輩どもです」

龍一

「おう、このままサボリか？」

大和

「あゝ次麻呂の授業なんで」

龍一

「ふうん、そっか」

なんでもその教師は平安時代が至高とっており、授業では平安時代しかやらないくせに、テストでは別の時代も出すというなんとも迷惑な教師らしい。

横になってしばらく談笑していると一つの氣を感じた。

燕

「やつぽ、ここにいたんだね」

龍一

「燕か、朝はご苦労だったな」

燕

「いやあゝさすがは百代ちゃんだね。強かったよ」

大和

「松永先輩こんにちわ」

燕

「うん、こんにちわ」

龍一

「燕も風に当たりにきたのか？」

燕

「うんまあそんなと」

龍一

「??？」

燕はちらりとこちらを向いたあと空を見上げた。

なんとなく顔が赤い気がしたが次に向いたときは元に戻っていた。

その後は三人で談笑し、大和は燕のアドレスを教えてもらったり、二人で大和をいじったりして過ごした。

九鬼財閥極東本部 P M 21:26 自室

夜の鍛錬や入浴なども終え、自室でくつろいでいると携帯が鳴った。

龍一

「もしもし」

彦一

「龍一か？今大丈夫か？」

龍一

「ああ」

彦一

「そうか。では聞くが明日の放課後時間はあるか？」

龍一

「大丈夫だが、どうしたんだ？」

彦一

「実はな……」

話を聞くと、明日が義経たちの誕生日なので、誕生日おめでとうパーティーと歓迎会を同時にやっってしまうおと紋白が言い出し、それに賛同した大和たちが彦一や俺に協力を依頼したという訳だ。会場や料理など大和が方々駆けずり回っているらしい。

龍一

「なるほど、了解した。そういうことなら俺も手伝おう」

彦一

「助かる。葉桜君にはもう言っている。ではおやすみ」

龍一

「ああ、おやすみ」

電話を切り一人物思いに耽る。

龍一

「転入してから一週間も経ってないのに、つくづくイベントに事欠かないな。まったくもって　面白い」

そう呟いて布団に潜り就寝した。

6月12日　川神学園　放課後　歓迎会会場

清楚

「いんにちわ」

彦一

「来たぞ、直江」

龍一

「よ」

大和

「どもです」

会場に足を運んでみればもうほとんど準備は終わり、後はテーブルの運搬や料理運びだけらしい。

何でも昨日から準備を始めていたようで、最後の準備と「やるなら三年も巻き込んでしまえ！」ということうらしい。

龍一

「俺はテーブル運んでくるから、清楚は料理運んできてくれ」

清楚

「うん」

大和

「京極先輩には字を書いてほしいんであつちに」

彦一

「うむ、わかった」

一子

「おおー京極先輩が字を書いてくれるのね」

モロ

「豪華なメンツでの歓迎会だね」

ガクト

「せっかくだ、最大限のおもてなしをしてやるっぜ」

そんなこんなで1時間後

会場設営は終わり、後は義経達一行を待つばかりとなった。

小杉

「プレミアムに会場設営完了！」

由紀江

「料理もばっちりです」

みんなそれぞれ談笑して過ごしているところに本日の主賓がやってきた。

マルギッテ

「直江大和。2 Sを全員連れてきたぞ」

大和

「ありがとう。皆さんいらっしやい」

井上

「おーいいねいいね、メシもうまそうだし」

冬馬

「よく一日でここまでやりましたねえ」

大和

「みんなのおかげさ。俺指示しただけだし」

2 Sの周りには人が集まって、笑って話している。それを離れて見ていると声がかかった。

清楚

「ありがたいよね。こっぴつ」

龍一

「そうだな。ここまで大きなものは今までなかったし」

清楚

「うん。……あ、来たみたい」

入り口には義経、弁慶、与一の姿があった。

与一は来ないかとも思ったがちゃんと来てくれた。あいつも少しずつ外と関わりを持つということだろう。

三人は会場の一段高くなっている即席の舞台に立った。

義経

「今回は、義経達のためにありがとう」

弁慶

「川神水まで用意してもらって…嬉しいね」

与一

「まあ、ありがとな」

井上

「へいへい…与一、照れがあるぞ」

与一

「るっせ、後で蜂の巣にしてやる」

井上

「なんでいきなりそんな殺伐とすんの…」

「こうして歓迎会は始まった。」

みんなは思い思いに楽しんでいる。立食式でひたすら料理をかき込んでいるのもいれば、談笑に花を咲かせてるのもいる。

俺は紋白のところに向かった。なにやら直江と話している。

龍一

「よう…紋」

紋白

「ぬ、龍一か」

龍一

「ありがとうな紋。あいつらのために」

紋白

「かまわん、なにより我一人ではここまでのことはでなかったからな」

龍一

「ああ、話は聞いてる。直江ありがとう。ここまで「ぎぎ」つけたのはお前のおかげだ」

大和

「いえ、気にしないでください。やりたいようにやっただけですし」

龍一

「そうか。あいつらも他学年と関わりが持てただろうし壁も無くなっ  
ていくだろう」

大和

「だといいですね」

龍一

「じゃ俺はこの辺で。お前も紋も楽しめよ」

大和

「はい」

紋白

「うむ、またの」

俺はその場を後にし、義経達のところに向かう。

義経

「あつ龍兄」

龍一

「楽しんでるか？」

弁慶

「もちろん。やっぱりみんなで飲む川神水はおいしい（ンゲンゲ）」

義経

「あわわ、弁慶ペースが早いぞ」

龍一

「今日くらいは好きに飲ませてあげな」

義経

「うう、龍兄がそう言うなら」

龍一

「今日はお前たちの歓迎会なんだ。そんな顔しないで笑え」

そう言って義経の頭を撫でる。するとみるみる笑顔になっていく。

義経

「そうだな。今は笑顔だな」

龍一

「そつだぞ義経。さ、みんなのところにいきな」

義経

「うんー」

笑顔になって弁慶を連れて2 Sのほうに向かった。まったく。周りのことばかりで自分のことは省みないからな。

与一を探して見れば弓道部からの勧誘を受けているようだ。

ここはあいつのコミュ症を治すのにいい機会だと思い、あえて放置した。

まあ帰れば話を聞いてみるか。

立食しながら3 Sの面々と談笑していると百代がやってきた。

百代

「こんな美少女に話しかけないなんて重罪だぞ」

龍一

「冤罪もいいとこだ」

百代

「まあ冗談として、どうだ？楽しんでるか？」

龍一

「ああ。他学年とも関わられたし、料理も美味しいし言うことなしだ」

百代

「そうかそうか。それでな稽古のことなんだが、ジジイと話して基本的に土曜でということなんだがそれでいいか？」

龍一

「ああ、予定があるとき以外ならそれでいい」

百代

「じゃあジジイにそう伝えておくからな。いやあ〜楽しみだな〜」

そういつてスキップしながら離れていった。

そんな嬉しいものなのか？と視線で回りに振って見るが、みな肩をすくめるだけだった。

そのあともあちこち回りながら談笑し、立食し交流を深めていった。

歓迎会は大成功といえるだろう。

九鬼財閥極東本部 義経の部屋

歓迎会も終わり帰宅した俺は義経達を部屋に集めた。  
もちろん誕生日プレゼントを渡すためだ。

龍一

「ちてまは義経からだ。誕生日おめでとう」

義経

「ありがとう龍兄。開けてもいいか？」

龍一

「ああ」

義経にあげたのはクマのぬいぐるみ。だが普通のぬいぐるみではなく、両手で挟んだ電子表示のプレートがあり、それには時計の機能と時間経過で変わるメッセージ機能がある。例えば朝なら「Good morning」や「Good night」だ。  
今は誕生日をあらかじめ入力してあるので「Happy birthday」と表示されている。

義経

「わあ〜ありがとう龍兄!!」

龍一

「どついたしました。後、それには面白い機能があつてな。音声を録音・設定することで目覚ましのときにその音声が流されるんだ」

義経

「へえ〜そうなのか。じゃあ龍兄、音声登録しよう」

龍一

「ん？俺の音声でいいのか？」

義経

「うん龍兄がいい／＼／」

龍一

「そうか。じゃあなんて言えばいい？」

義経

「うーん』起きろ、朝だ義経』と優しい感じで」

弁慶

「そこは』起きろ、義経。起きないとキスしてあげないぞ』くらい言ってもいいんじゃない？」

義経

「こら弁慶!! / / /」

弁慶

「ああ〜怒った主も可愛いな〜」

与一

「(はあ)(はあ)」

清楚

「あはは、弁慶ちゃんは揺るがないね」

龍一

「ふむ、それでいくか」

義経

「ちよっ / / /」

龍一

「はは冗談だ。後で登録しとくから」

義経

「ほっ」

龍一

「次は弁慶だな。はい、誕生日おめでとう」

弁慶

「ん、ありがとう。じ、これは!!」

弁慶に渡したのは川神水。もちろんこれも普通ではない。

川神水が取れる場所、生産される場所はいくつかあるがその中でも幻の名水『川神水・朧』は20年に1本しか作られない。

川神水は源流を蒸留・加工したのだが、ある生産者が試行錯誤し作ったのがこれだ。

『川神水・朧』は味はもちろんだが、なんといっても特徴なのが炭酸飲料に近いのだ。もちろんその成分に炭酸はない。製作過程での変質とみられるが詳しいことは製作者のみ知るところである。

龍一

「弁慶にはこれしかないと思ってな」

弁慶

「いや、ありがとう。まさか出会えるとは思わなかったよ」

龍一

「どういたしまして。次は与一だ。誕生日おめでとう」

与一

「ああ、サンキュ。お、おおー！！」

与一に渡したのは与一がはまっていたゲーム、ティーズからそれを模したものを九鬼で魔改造したものをプレゼントした。

基本色の白にところどころ金の装飾が施されたまさに聖弓とっていい代物だ。

見た目に反し装飾弓ではなく実用重視のもので、与一に合わせて作られたので本人しか使用できないもので、他人が使うと著しく命中精度が下がる。

龍一

「どうだ？」

与一

「おお最高だぜ!!弦を引いた感じも俺にぴったりだし、握りもフィットするしなー」

龍一

「そりゃよかった。…そういうば弓道部に勧誘受けてたがどうするんだ？」

与一

「…ああ、せっかくだしやってみようと思う。行けないときもあると思うが」

龍一

「そうか。頑張れよ」

与一

「おう」

その後清楚がプレゼントを渡し、ケーキを食べたりした。

清楚が渡したプレゼントは、義経・弁慶が清楚とおそろいの腕時計。与一がシルバークレスレットだった。

ケーキを食べた後、そのままゲームをしたり、麻雀したりした。

一度部屋に戻り携帯を確認すると燕からメールが来ていた。

燕

『明日暇なら川神の案内してほしいな』

龍一

『かまわないが川神院で百代との稽古があるけどそれでもいいか？』

と返信した。すると1分たたずに返信が来た。

燕

『私も少したったら川神院で合同稽古するから大丈夫だと思う』

と返ってきたので、

龍一

『それなら大丈夫か。なら10:00に川神駅の東口でいいか？』

燕

『いいともー！』

とものすごい早さで返ってきた。

そのあとシャワーを浴びて義経と弁慶のいる部屋で朝まで過ごした。

t o b e c o n t i n u e

次回「川神案内」